

---

# 少女兵器-Girl Arms-

陽向暖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少女兵器 - G i r l A r m s -

### 【Nコード】

N3479C

### 【作者名】

陽向暖

### 【あらすじ】

30世紀、世界は完全独立を果たし平和になったかに思われた。しかし無宗教国であった日本国は、神を信仰するゴッド派、自然を尊重するナチュラル派にわかれ、激しい攻防を繰り広げる。そんな両派閥の仲介をはかるのが、独立部隊、ビュー・ガーデン。ナチュラル派上層に位置していた亡き父を持つ亮樹は、ゴッド派の生み出した兵器である融合人間、砂乃とともにビュー・ガーデンに属している。平和を願う二人の運命は、ゴッド派とナチュラル派、そしてビュー・ガーデンの存在に、ことごとく引き裂かれてゆくが…!?

2007年度コバルトロマン大賞選外作品。

## 1・未来のかたち

たかたかと廊下ろっかを駆け回る足音がする。それが誰のものなのか、  
上条緒叶かみじょうおかのには大体見当がついていた。扉が開くより幾分早く、回転  
式の椅子を動かして後ろを見る。

予想通り、長い黒髪の小さな少女が、ひょっこりと緒叶の自室に  
顔を出した。

「おかの、りよーじゅ知らない？」

きよとんとした顔で緒叶を見つめていたが、その本心は不安なよ  
うだ。

切なそうな漆黒の瞳で、こちらを見ている。

「亮樹くんなら……、多分町へ買物に出てると思うけど……」

「え？ 一人で？」

「ええ。シゲは別の用事で朝から出かけているし、彼はほら、元々  
ひとりで出かけるのを好むじゃない」

「そうだけど……」

置いていかないで。出かける時は、すなのに一言言ってからにし  
て。と、江奈原砂乃えなはらすなのはいつもくどいほど言っていたのに……。

砂乃は一人にされるのが嫌이었다。それも自分の好いている人  
間に置いて行かれるのは、まるで自分が嫌われているのではないかと  
錯覚さっかくする。

「……りよーじゅ、どこに行くか言ってた？」

緒叶から亮樹の居場所を聞き出すと、砂乃は一目散にアジトを飛  
び出して行った。

\*\*\*

時は三十世紀。文明の発達により、国は外国との交流を無とした  
独立国家となっていた。

自分達の生きる場所だけが“世界”だった。

機械で何もかもが操作できる時代に、わざわざ出かける人間には理由がある。

それが 戦争。

日本国では今、派閥同士の争いが勃発していた。

亮樹達が住んでいるのは四国島と呼ばれる小さな離れ島で、ナチユラル派の領地であるそこは、随分平和そうに見えるが本島では領地争いも兼ねた派閥同士の争いが酷い。亮樹自身、何度も自分の目でその惨劇を目にしているのだから、間違いないことだ。噂では、既に荒地と化した町や村もあるらしい。

亮樹は大きな荷物を抱えて、穏やかな通りを歩いていた。自然を大切にすなチユラル派の領地だけあって、通り過ぎる家々には草木が自由気ままに生きている。この様子は、千年ほど前から変わってはいないらしい。

「りょーじゅー！ いたー！」

閑静な町の一角で青年を見かけた砂乃は、大きな声でその名前を呼んだ。

茶髪な上に袖なしのパーカ、彼の体より明らかに大きいズボンが裾が引きずられてポロポロになっている。さらに、体のあちこちに裝飾されたアクセサリーや髪の間から覗く黒のバンドが、後ろ姿だけでも、柏葉亮樹かしわばだと砂乃に分からせる。

振り向いた青年も青年で、丈が短い浴衣に黒のスパッツ、袖は肩まで捲り上げられたその色気のないスタイルに、すぐに相手を判断した。

「もう！ なんでいつつもすなののこと置いていくの？ 出かけるときは一言いつていつていつてるじゃん！」

「ずんずんと近づいてくる砂乃に亮樹はいつものように顔をしかめる。

「別に買物くらい、黙って出てったっていいだろ」

パソコンで物が買える世の中になったとはいえ、戦争の関係でわざわざ買物に行かなくては物が手に入らない人間もいた。その一例が亮樹だ。

「買物ならすなのをつれて行ってくれたっていいじゃない」

「お前無駄なものねだるんだもん」

「置いていかれたほうがめいわくかけるわ」

どうしたものか。あきれたように亮樹は溜息をつく。

「なーに？ すなのが来たのがそんなにめいわく？ だったら先に行き先教えといてくれれば、すなのだつてりょーじゅの後をおいかけたりしないよ」

ぷうつと頬を膨らませて、亮樹を睨み見た。その姿には、威厳も何もあつたもんじゃなくて、亮樹はただ溜息をつく気にしかなれない。

「分かったよ。俺が悪かった。アイス買ってやるから機嫌直せよ」

「……もうすなのを置いていかない？」

どうやらアイスで少々機嫌が直つたらしい。本当、単純な奴だ、と亮樹は思った。

「それは約束出来ないかな。だって俺もう十八だよ？ お子様には理解出来ない場所にだって興味ある」

「すなのだつてもう十四歳だよ！」

「じゃあもちろん、赤ちゃんはどうやったらできるのか知ってるよな？」

「……え？」

「はい、お子様」

さらりと言つてのける亮樹に、砂乃はピクリと眉をひそめる。

つかまれた肩でくるりと回転させられながら、頭に浮かぶ精一杯の答えを言ってみた。

「け……、けっこんしたらできるよようになるんでしょ？」

「何で？」

「何で……って、……しぜんに？」

「はい、ブー」

答えているうちに、砂乃は数メートル歩かされていた。それには生憎あいにくが付いていないようだが、子ども扱いされた事実について反抗したくなり、亮樹の目的とは逆に体を向ける。

「なによ、子どもあつかいばかりして。だいたいいりよーじゅが、すなのに見られて困るようなところへ行こうとするからいけないじゃない」

まるで風のようにするりと亮樹の腕をすり抜ける。別に興味あると言っただけで、見られて困るところへ行っただけとは言っていない。

「おい、どこ行くんだよ」

「りよーじゅのいないところ！」

意地になりながら歩みを進めると、不意に人だかりが目に入った。けどそれも、今の日本国にとって珍しい光景ではない。そしてその状況は、砂乃にとって気持ちいいものでもなかった。

がたいのいい二人の男と、大勢の兵士が監視する中、十数人の人達が不安げな顔で一列に並ぶ。その先頭はなにやら黒い大きなレーザー銃を持ち、辛そうに悲鳴を上げながら前方の的にくぐられた丸石を射抜いている。

何人かの勇氣あるものが抗議の声を上げると、容赦やしやみなく兵士にその首を切られていった。

その様子に、砂乃は恐怖と怒りから震えが止まらなくなる。

「……見んな」

砂乃の悲しい気持ちを讀取ると、彼女を引き寄せながら、亮樹はその目をふさいでやった。

「何……やってるの？」

声まで震える。何だか情けない。

「ナチュラル派が捕虜ほじゆにしたゴツド派に、『生きたければナチュラル派になれ。ナチュラル派になったなら、ゴツド派の証であるチャームを棄てる』っていつてああやって撃たせるんだ。レーザー銃で撃たれたものは完全に溶け消える。あの人たちはもう、本当にゴツ

ド派の証を失うんだ」

その言葉に、砂乃の表情はますます険しくなった。ゴッド派は信者に神の絵の彫られたチャームを持たせる。それはゴッドに尽くす印で、ゴッドに愛される証だと、彼らは信じている。それを失うことは、加護からも見放されるということだ。

ナチュラル派と、ゴッド派。その二つが対立し始めたのは、もう百年以上前のことだと、亮樹は亡き父から聞いた事が合った。

元々、いや、事実千年近くは前のことなのだが、当時地球はまだ外国との交流を続けていた。現在の日本国も、平和をたたえ上手く外交していたらしい。しかし時と共に文明は発達し、外国との関わりも必要となくなってきた世界は、二五三七年、各国に無駄な戦争を起こさせない為、『世界完全独立国家宣言』を発表した。

固より戦争は、宗教の違いから起こる主観の違いによるものだった。崇拜宗教のはつきりしている“国”に、戦争が起きる事はそうはない。

その点から考えると、昔、無崇拜宗教国と呼ばれていた日本国が、争いを始めるのは当然の事だったのかもしれない。

神道を崇拜するゴッド派。

万物は神によって造られ、神のために生きるもの

その考えに基づくゴッド派は、万物を神の物とし尊重するとして、自然を尊重するナチュラル派とも上手くやっていけるかのように思われた。

しかし戦争は起きた。

自然を尊重する。その考えはどちらの派閥も同じはずなのに、ゴッド派はその暗黙の了解をやぶった。自然物や、動物と人間。その融合人間を造ったのだ。

自然との融合体となった少女達は破壊的な力を持ち、日本国はゴッド派によって侵されていった。

それに反抗したナチュラル派もゴッド派の領域をどんどんと侵し、数々の惨い参事を犯した。

かつてはどの国よりも平和へと尽くしてきたのに、いつしか日本国は、一番の戦争国となっていたのだ。

「ナチュラルは……ひどいね」

「ゴッドだって同じようなもんだろ」

「ちがうよ！ ゴッドは……」

パツと亮樹の手を払うと、砂乃は悲しそうに胸元に輝くクリスタルを握った。

言葉が途中で途切れたのは、ゴッド派の肩を持っていいものか迷ったからだ。

砂乃は、元ゴッド派だった。

それを一年前、おそらくゴッド派から逃げ出してきたであろう砂乃を、亮樹が保護したのだ。

今はゴッド派を離れた身であるとはいえ、かつての神への思いは捨てきれない。だけどそれでは亮樹に嫌われ、捨てられてしまうかもしれないと、砂乃はただそれだけが不安だった。

「あの……」

しかし亮樹は、今の砂乃の言葉を咎めるでもなく、ただ優しく頭を撫でてくれる。

「神も自然も、人も動物も大切にしたいのが“俺たち”だ。だから砂乃の気持ちは間違っていないよ」

「りょーじゅ……」

「だから“どうするか”も、お前が決めたらしい」

どうするか　そんな事、答えは一つだ。

「あたしたち、らしくやろっ」

\*\*\*

ナチュラル派は強いものから順に隊を群なす軍事集団だった。平民は兵隊となり、各隊長が、突撃などの命令を隊員に下す。

がたいのいいこの二人の男も、十八番隊の隊長と副隊長だった。

「いいか？ 逆らう奴は裏切り者だ。裏切り者は斬られるのが筋なのだからな」

そんな脅しめいた言葉をかけられれば、死を恐れる人々に逆らえるはずもなく、順番が回ってくれば、皆傷つきながらに信じる神のチャームを撃った。

今回の捕虜は約十人。もう半分ほどのゴッドへの裏切りを見届け、ナチュラルの隊長たちも飽き始めていた頃。

「ねえりよーじゅ、前から思ってたんだけどさ、いつもたたかうのはあたしで、りよーじゅって何やってるの？」

「……何だよいきなり」

「なんかフコウヘイだなと思って」

ぎこちない発音で、砂乃は不公平だと言った。おそらく最近覚えた言葉なのだろう。そんな砂乃に、亮樹は呆れるしかない。

「……どこでそんな言葉覚えてくんだよ。てか、俺生身の人間だよ？ あんな大勢の兵隊に敵うわけないじゃん」

「すなのだって女の子なのに……」

「……アイス二つで我慢しろ」

「そんなに食べたらおなかこわすよ」

「じゃあお菓子も買ってやるから」

「……のつた」

「だれだ！」

一列に並ぶ捕虜の後ろで、飄々（ひょうひょう）と会話する二人に兵士の一人が声を上げた。一瞬にして皆がこちらを振り返る。

と、隊長らしき男が立ち上がるなり近づいてきた。

「どこのどいつだ？ ナチュラル派なら俺たちのやることに逆らわずに家へ帰るんだな。もちろん、ゴッド派なら命は無い」

その言葉を合図としたように、後ろの兵隊が剣を構える。

ナチュラル派の男児は十六歳で否応無しに兵士にされる。いくら

かの条件から例外も有り得るが、その場合は隊長クラスの間人間が知らないはずは無い。十八歳の亮樹が私服でこんなところにいる時点で、彼が敵だという事は知れていた。

「悪いけど、此処で死ぬのはごめんかな」

「斬り殺せ！」

兵士がわらわらとかかかって来た。この人数を二人　まして一人は少女だ　で相手するのは、誰もが不利だと思った。

しかし少女は素早く形態を変えると、吹きかう風のようになり兵士達を薙ぎ払った。

「なっ……………」

「これは…………風になった？　そうか。こいつ、ロウチルド“墮児”だ！」

風の姿のまま、砂乃は亮樹の右腕に捲きつく。

隊長が神妙そうにその名を呼んだ。

「墮児…………。やはりゴッド派なのか」

「ちげえよ。俺たちはあんたらみたいに、自分の都合のいいものしか見ない連中とは違う」

フューズを造る事で、ナチュラル派とこじれる事を避けたかったゴッド派は、それを科学の賜物と言わずに神の子だシスターと称した。

それを否定したナチュラル派はある意味正しいが、自然を守る為と言いながら、ゴッド派の人間を殺すことを楽しんでいる連中が多い。

結局どちらも、自分達の行いを正当化することしか考えていないのだ。

「あんたたちは正しい。でも間違ってる。それに気付いたのが俺たちだ」

「どういう意味だ？」

「ゴッドもナチュラルも、お互いの道理を受け入れれば必ず上手くいく。神も自然も、人も動物も、守らなければいけないんだ」

「何、奇麗事を…………。お前らは一体何者なんだ！」

すっつと息を吸うと、亮樹は胸をはって声を出した。

「独立部隊、“ビュー・ガーデン”。知らないわけじゃあないだろ？」

ビュー・ガーデン。その言葉に皆が息をのんだ。ナチュラルにもゴッドにも属さないそれは、平和でありたい一般人の憧れであり、同時にいつ相手の派閥に引き込まれるか分からない要注意集団だ。戦争に直接参加しない分、命を狙われる可能性も危険性も高い。仲間に引き込もうとするも殺そうとするも、人それぞれだ。

「……ビュー・ガーデン。そうか。我々が戦争を続けていく上で、もっとも生かしちゃおけない連中ということだな」

どうやらこの隊長は、ビュー・ガーデンに対する対応を、殺す方  
にしているらしい。

風を切るように右手を上から下へ振り下ろすと、後ろの部下へと  
声を上げた。

「こいつらは我々の敵だ！ 殺せ！」

一口に殺せと命じられても、ビュー・ガーデンは少ない仲間内で  
自分達の道理を貫こうとしている分、戦闘力には長けている。

もともと戦う事を目的に此処にいるわけではない彼らに、まっす  
ぐに立ち向かう事は出来なかった。

「何をしている？ 早くやれ！」

「しかし、隊長……」

「しかしもかかしもあるか！ 此処で俺の命令に背くなら、お前た  
ち全員討ち首だぞ！」

「そこまで言うなら、あんたがやったら？」

突如口を挟んだ亮樹に、隊長は怪訝な顔で目線をやった。

「そんなに自分の戦闘力に自信があるのか？」

「いいや。でも戦いたくない奴と戦うのも嫌かな。ビュー・ガーデ  
ンは“弱き者を守る”ために存在するからね」

「フン、甘い事を。だったら俺が相手をしてやろう。後悔する  
なよ」

がたいのいい隊長は、言うなり自分の背に担がれている大きな刀

を鞘から抜き取った。

『……りよーじゅ。たたかうのはすなのだって、分かってる？』

「なんか問題あった？」

『あんな大きな剣できりつけられたくない』

「斬り……って。お前斬っても斬れねえじゃん」

生身姿の砂乃なら話は別だが、今の砂乃は風だ。風は斬ることも撃つことも、まして踏みつけることも出来ない。

もちろん砂乃が気にしているのは痛みではなく、本来守ってもらう立場のはずの自分が、前線に立って戦う事だけだ。

そういう言っているうちに、隊長が大剣をふりかざして亮樹の前に立ちはだかった。重そうに見えるその剣を、そんな素振りは一切見せずに振り下ろす。

「死ねえええええ！」

ざっと、何かが切れる音に、捕虜になっていたゴッド派の面々は目をふさいだ。

しかし切ったのが人ではないことに、長年剣を振り続けている隊長が気付かないわけではない。地面にめり込んだ剣の傍にあったのは、真つ二つになった袋と、果物や野菜、肉など、他生活雑貨ばかりだった。

交わした亮樹は高くジャンプし、隊長の背後に着地する。邪魔になるため手放した袋には卵も入っていて、無残に割れたそれに、青年はまず顔をしかめた。

敵を一瞬に見失った隊長は、あたりを見回して亮樹を探した。

「な……、どこに？」

「ここだよ」

亮樹の腕に巻きついていたら砂乃は、さっと彼の腕から離れると、隊長の背中をとった。

隊長が振り向くよりも早くその体に巻きつき宙へと誘う。

「がはっ！」

自分の身長二つ分程の場所から落とされた隊長は、痛みとシヨッ

クでそのまま気を失った。

「さて、他に俺たちを倒そうって勇氣ある奴はいる？」

だから戦っているのは砂乃だけだってば。

そう思いながらも、砂乃も亮樹の確かな実力を知らないわけではないので黙っていた。

ナチュラル派の兵士は皆逃げていき、同じく逃げようとした副隊長を亮樹が呼び止める。

「な、何でしょう……？」

「ここにいるゴッド派、逃がしてやってもいいかな？」

「いや、それは……」

「困る？ まあそうだろうけど。断るならあんたを捕虜にして、ゴッド派ゴッド派に連れて行かせるよ？」

亮樹があまりにも屈託なく笑うものだから、逆に怖くなった副隊長は、「勝手にしてくれ」と叫びながら走り去って行った。

それを見届けるなり人型に戻った砂乃が、足元に落ちていたチャームを拾い、近くにいた女性に渡す。

「どうぞ。もうほりよになんてならないでくださいね」

「……シスター……」

随分聞かなくなっていたその呼び名に、砂乃は思わず背筋を伸ばした。

シスター。それはゴッド派のみが呼ぶフューズの呼称だ。神の子だと敬う意味をこめて、そう呼ばれている。

砂乃をシスターと呼んだ女が、胸の前で、指を絡めるように手を組んで言葉を続けた。

「ああ、シスター。わたし達ゴッド派を助けに参ってくださいだったのでね」

「いえ……あたしは」

「先ほどはビュー・ガーデンと名乗っておられましたか、あれは敵の目をくまらず嘘でしょう？ シスターが神を裏切るわけがありませんもの」

その言葉を聞くなり、今まで黙っていた他のゴツドの連中が、そうだそうだと同意し始めた。

その様子に、亮樹は溜息をつかずにはいられない。

「……あんなあ、シスターだろうがなんだろうが、砂乃は人間なんだから、神を裏切るとかそんなんは桁外れな観念だろうが」

傍から見れば、何の間違いもない亮樹の言葉を、神だけを信じるものとし敬うゴツド派の連中は、ただの冒涇と受け取った。

「あなたはゴツドの人間ではないわね？ 神を信じているものならば、そんな言葉、言えるわけがないわ」

「だから言つたろう？ 俺はどつちにも属さない。ビュー・ガーデンの人間だよ」

「ビュー・ガーデンは神を冒涇するの？」

「いいや。だけど神神って、それしか知らない子供のように連呼する連中とも違うかな」

「ちよつ、りよーじゅ……」

言いすぎだと砂乃が咎めた。それは正しい反応で、ゴツド派の連中はふつふつと怒りをこみ上げている。

「まあ、人体実験なんかして喜んでるあんたらとは明らかに違つて……それだけは確かかな」

そのまま、踵を返すと、今度こそ亮樹はこの場を離れようと歩み始めた。一足遅れて、砂乃も後を追う。

しばし歩くと、砂乃は亮樹を呼び止めた。

「ちよつ、りよーじゅ！ 歩くの速いよ！」

体の半分は風の砂乃だ。別にこんな数百メートルの距離を小走りに追いかけたからといって、疲れるなんてことはないが、スピードくらい自分に合わせてほしい。

「あ、わり」

振り返った亮樹があまりにもきよとんとしているので、砂乃は仏頂面で訊ねてみた。

「もしかして……すなのを着いてきてるって忘れてた？」

「ははは」

忘れていたのではなく気付いていなかったのだが、そこは笑ってごまかす。

「もう！ りよーじゅのバカ！ それにゴツド派の人にあんなこと言つて、またビュー・ガーデンが他のハバツからテキシされちゃうよ」

「分かつてる。だから、シゲちゃんにはこれな？」

口元に人差し指を当てながら、内緒のポーズで亮樹が言う。

それを砂乃は、軽蔑したように目を細めて見た。

同意してくれる様子のない相手に、どうしたものかと溜息をつけば、少し考えてから亮樹は指を二本立てる。

「……お菓子二つ」

「……」

「飲み物も買つてやるから」

「クレープ食べたい」

「……わかったよ」

どうせ買物からし直しなんだ、と思えば、亮樹は諦めたように頷いた。緒叶に頼まれた食材費は彼女から貰っていたが、今度ばかりは全て実費だ。自分の所持金を考えると、肩を落とさずにはいられない。

悪知恵の働く砂乃を、この時ほど恨めしく思ったことはなかった。

\*\*\*

砂乃と亮樹が去った後のそこは、この上なくしんとしていた。亮樹の言葉がどうかではなく、これからどうするかを悩んでいるのだ。まさかナチュラルから解放されるとは誰も思つてはいなかった。これは喜ばしいことであると同時に、これからの彼等の生き方を大いに悩ませてくれる。

生きる為とはいえ、一度はナチュラルに派閥を変えようとした者

を、ゴツドは再び受け入れてはくれないだろう。どこへ行こうとも、自分達の未来は暗い。誰もがそう思った時、亮樹が撒き散らした食材を無残に踏みつける音がした。

「まさかビュー・ガーデンに救われる時がくるとはね」

皆が振り返った先には、思わず目を見開きたくなるほどに神々しい人間が立っていた。まるで中世ヨーロッパの騎士のような風貌は、神の代行人の証。

「な、棗様！」

その名を知らない者は、ゴツド派にはいなかった。

ゴツド派をまとめるのは、神の代行人と呼ばれる四人組。神の声を直に聞く事が出来るという彼らが、組織をまとめ、支配しているのだ。

「棗様、あの……わたしたちは」

「ナチュラルに一度心を渡した者を、神は必要としないよ。どうしても戻りたいなら、神界へ行つて神に直接謝り許してもらおうしかない」

神界へ行く それはつまり、死ぬということだ。

死んで神の元へ行き、許しを請うて、本当に許された者だけが再び人間界へ戻つてこられると言われている。しかし実際に戻つてきた者は無く、逆に神界へ送る儀式と称した公開処刑に、莫大な金をとられるだけなのだ。

皆が脱力して地べたに座り込む。そんな人間達を尻目に、棗は亮樹達の去った軌跡を眺めていた。

直毛の白い髪が肩にかかる。久しぶりにあの少女を目にした。もう一年は経つだろうか。

「砂乃……」

離れた時とはまるで別人のように笑い、拗ね、困っていた少女を、棗は懐かしげに思い出していた。

しかしその目に、愛情は一切ない。あるのは妖笑だけだ。

「もうすぐ迎えに行くからね。砂乃……」



## 2・再会は涙とともに

俺たちの出会いは、とめどない雨の日。出会った少女は何の感情も持たないような、光のない瞳をしていた。

だけど、確かに切なそうな表情は<sup>しな</sup>否めずに、その少女が父の仇の仲間だと気付いていても、俺は拒絶することが出来なかった。

痛みも幸せも、喜怒哀楽全てを“知らない少女”。自分の名前しか知らないような少女は、俺たちの言葉をすんなりと受け入れた。

わたしは緒叶よ。あなたは？

……すなの。……えなはら、すなの。

服、汚れちゃったわね。変えましょうか。

素直に服を脱いだ少女を、緒叶はタオルで優しく拭いてやる。胸元の痛々しい刻印に最初は表情を歪めたが、深呼吸して笑顔を浮かべなおした。

シャワー浴びるでしょう？ あ、そのペンダントも外しましょうか。

そう言って伸ばした緒叶の手は、冷たく砂乃に振り払われる。

だめ！ これはだめなの！

何の感情もないのかと思われた少女の、最初の反抗。

何がそんなに大切なのか、砂乃はそれから一年、一度たりともそのペンダントを外そうとはしなかった。

\*\*\*

亮樹は庭先へ出ると、無造作に置いてあるベンチへと腰掛けていた。

腕に巻かれた時計型の機械は、ボタンを押せば映像が投影され、内蔵された小型マイクとスピーカーで会話が出来るといふ小型通信機 通称、CTCPだ。

亮樹の親はナチュラル派だった。二年前に、ゴッドとの共存を持ちかけた父はゴッド派の連中によって殺され、女手一つで亮樹を育てようとした母も、過労とストレスで命を失った。

天涯孤独となった亮樹は、父の友人であった滋に諭され、ビュー・ガーデンへと入ったのだ。

ビュー・ガーデンは独立部隊であるとともに中立部隊でもあった。どちらの言い分も確かに正しいところがあるから、どちらかだけに留まったりはしない。もちろん、どちらの言い分も間違っているからと、ビュー・ガーデンに属している人間も少なからずはいるのだが。

分かってくれない連中が多いが、理解してくれている人間も確かにいた。

『よう亮樹、元気か？ 俺は毎日のようにゴッド派の領地を攻めてるよ。……お前はいいよな。人が死ぬとこ、見なくてもいいんだから。俺もそっちに行けたら、毎日がそれなりに充実するのかな……』  
シーティーシーピーから浮き出される映像は、今朝早く届いていた通信が記憶されたものだ。

そこにはナチュラル派の一般兵の軍服を着た、亮樹と同じ年くらいの、黒髪の活発そうな青年がいた。

彼の名は麻生槇那<sup>あせいまきな</sup>。亮樹がまだナチュラル派に属していた頃によく遊んだ、言わば幼馴染だ。

お互いに敵とも取れる立場になったが、今でもこうして、時々連絡を取り合っている。

ビュー・ガーデンの在り方を理解してくれる、亮樹の大切な人の一人だ。

親がナチュラル派でなければ、ともにビュー・ガーデンに入らなかったと彼は言う。

今も説得は続けてくれているようだが、かつては我が子のように可愛がってくれていた自分が、ナチュラルを抜けた途端<sup>とたん</sup>に掌<sup>かえ</sup>を反したように白い目で見てきた人達だ。こちらへの派閥<sup>はくわく</sup>変えは難しいだ

ろっ。

一人でも多くビュー・ガーデンの在り方を理解してほしいのに、結局は何も出来ていない自分が悔しくて、亮樹はその手を握り締めた。

「りょーじゅ？」

突如背後からかかった声に、亮樹の肩が跳ね上がる。声と、自分を指す特徴的なその発音から、振り返らずとも相手が砂乃であることはすぐに判断できた。

反射的に、亮樹は時計型通信機（CTCP）の電源を切る。それにしても、身軽なせいか砂乃の足音は聞き取りにくいのだ。

溜息混じりに振り返れば、目を細めて少女を見た。

「おま……。いきなり声かけんなよ」

「気付かなかったのはりょーじゅじゃない」

「……そーですね」

亮樹の隣に腰掛けると、砂乃は微妙に浮く足をぶらぶらと振る。目の前には緒葉おかのが大切に育てた庭園が、季節を感じさせる花をつけていた。

「なにしてたの？」

「別に。ちよつと息抜き」

「ふーん」

はぐらかされたように感じた砂乃は、興味なさげに返事をした。

亮樹はいつだって、砂乃には深く教えてくれないと思う。表面だけを適当に話して、後ははぐらかす。

それをまた深く追究しないのは、砂乃も全てを亮樹に話したわけでは無いからだ。

「ねえ、りょーじゅ。りょーじゅはどうしてビュー・ガーデンに入ったの？」

「何いきなり」

「聞いたことなかったから」

そっぴえば話したことがなかったな、と亮樹は思った。別に話し

たくなかったわけではないが、特に話そうとも思わなかったのだ。

同じ体勢に飽きてくれば、片足を椅子の上へと乗せた。

「シゲちゃんに言われたんだよ。親を亡くして居場所がない時に、父さんが本当に望んだこと」

砂乃は、じつと亮樹の顔を見た。一度たりとも視線が合わないのは、彼が見ているのが過去の自分だからなのだろうか。

「りよーじゅのお父さんが……のぞんだこと」

繰り返すように言葉を吐けば、僅かに亮樹が頷いたようにも見えた。遠くを見つめる彼の目が細められる。その手が、そつと自分の額に巻かれたバンドに触れた。それが亡くなった亮樹の父の形見だということだけは、砂乃も何となく知っている。

「ナチュラルとゴッドが、共存すること。戦争なんてばかげたこと、いつまでも続けるなんてできないから」

「ねえ。戦争の原因は、やっぱりすなみたいなフューズなの？」

「……違うとは言えない。だけどそれだけじゃない。一番の原因は、周りを認めず、自分達だけが正しいと勝手に決め付ける人間達だ」

人間達 それにはきつと、亮樹自身も含まれているのだろう。

彼の目を見ていれば、そんなことも容易に想像できた。

「りよーじゅは、お父さんのイシを継ぎたいの？」

まじめに訊ねてはくるが、砂乃が本当に自分の質問の意味を理解しているのかは、亮樹には分からない。

「そんな立派なものじゃないよ。ただ俺は……俺だけじゃないけど、親って裏切ることができないもので、子供にとっては自分そのものなんだよな」

「……よく分かんない」

口をへの字に曲げて、砂乃は顔をしかめた。

「ん……親と子、つてさ、癖とか話し方とか、考え方とかも似てくるんだよ。まあ一番近い存在なんだから？ ある意味当たり前だけだね」

あ、と砂乃が息をはいた。

そこでようやく、二人の目が合う。

「お父さんがどうかじゃなく、お父さんの夢がりょーじゅの夢なのね？」

「そういうこと」

うすく笑った亮樹は、そのままベンチから腰を浮かせて歩き出した。

いくつになっても、血のつながった家族は宝だ。だから亮樹には無責任に槇那をビュー・ガーデンに呼ぶことはできなかった。彼がこちら側の人間になるということは、両親を裏切らせることになるからだ。

そんなことは、いくら親友でもさせられない。

「ちよーつとりょーじゅ？ どこ行くの？」

その声に振り返ると、砂乃が数十メートルほど後ろにいた。

砂乃はベンチに座ったまま、ということは、無意識に亮樹が歩みを続けていたのだ。

というか、砂乃の存在を

「忘れてた……」

その言葉に砂乃が怒り拗ねてしまったのは、もはや言うまでもなかった。

\*\*\*

日本国の一番北、海を越えた先の大きな島が、神の住処すみか 神の代行人である四人のアジトだった。

まるで古城のようなそこは、衣装と同じく古代ヨーロッパ城を真似て、百年以上前に建てられたものだ。

その一室から、遙か遠くの島を見つめる一人の男がいた。

「シスターを迎えに行くらしいな」

ノックと共に扉を開けたのは、同じ神の代行人おんの御だ。

「情報が早いね」

振り返るなり、白銀長髪の青年　棗は答える。感情をあまり表に出さない御は、やはり無表情だった。

「迎えに行つて、その後はどうするつもりだ」

「どうつて？」

「パートナー再結成か？」

「くっ……。おもしろいことを聞くね、君は。そんなこと、とうの昔に決まっている」

ぞくりと背中に悪寒が走るのを、御は無意識に感じていた。

何も無い、電気もつかない薄暗いタイルの部屋に、ソファ以外は最低限の生活必需品しか置かれていない殺風景な棗の部屋。

それはまるで、不要な物は排除していく彼の性格そのものを象かたどつているようだった。

「可哀相かわいそうな少女だな」

「可哀相？　愚問ぐもんだね。所詮はたかが兵器じゃないか」

たかが兵器。棗の言葉に、つい御は表情を歪める。

兵器としてでも、一度そうして人間の体を弄んでしまった自分達は、それなりの責任を持たなくてはならないのだ。

「戦わせるために俺たちが造り出したものであると、生きているんだぞ」

「だけど、僕たちの為に、彼女らは死ぬんだよ？」

万物は神によって創られ、神のために生きるもの。

ならば人間によって創られた融合体は、人間の為に生きるものだとでも思っているのだろうか。

もとを辿れば、同じ人間だというのに……。

「そうそう、ナチュラルに引き込まれそうになっていた奴らは、神界へ行く儀式を行うよう手を施しておいたよ。まあ、結局は僕たちの娯楽なわけだけど、金はきっちり取るから安心してよ」

娯楽。儀式と称して人が死んでいく姿を娯楽と例える神経は、御には理解出来ない。しかし、死刑に処される人間たちにも非があるし、まして神を裏切る行為に及んだ輩たちだ。そんな奴らを庇う義

理は、御にもないと判断させた。

「それを助けたのは、シスターらしいな」

「そう、砂乃だよ。全く驚いたね。兵器のくせに自分から人を助けるなんて。あんな感情を持ったモノは、もう使い物にならないだろうなあ……」

肩を竦めて言う棗に、御はまた嫌なものを感じた。

“モノ”。棗にとって融合体は所詮モノなのだ。

「大体奴らも奴らだよ。一度敵に心を売っておきながら、まだゴツドに帰れるかもと期待を抱いていた。……全く、これだから愚民どもは嫌いなんだ」

「……シスターは、いつ迎えに行くつもりなんだ」

「さあ。でも、きつと遅からず時は来るよ。アレは今も、僕が迎えに来るのを待っている」

そう言っただ笑んだ棗だが、その目は決して笑ってはいなかった。むしろ、もう砂乃の名前など呼びたくもないようだ。

窓の閉じた室内に冷たい風が吹きぬけたのは、自分の気持ちのせいなのだろうと、御は無意識に思っていた。

\*\*\*

その夜は風が冷たかった。四季があまり感じられなくなった三十一世紀でも、ナチュラル派の領域には、まだかすかな季節の名残がある。

今は暦の上では五つ目の月だ。冷え込む夜は、なんとも言えず寒い。

亮樹はベッドに潜り込むと、腕から外した時計型通信機を枕もとに置き、早々と通信を槇那のそれへと繋げた。

通信中、と、十五秒ほど表示されると、そこに槇那の顔が現れた。

『おー、亮樹じゃん。久しぶりー』

「……」

『何黙ってんの？』

「あ、いや……まさか出ると思わなくて」

無感情にそう言いながら、亮樹は思わず右上に表示されている電波時計を見た。一寸の狂いもないそれは、確かに十一時四十分を指している。

「だってほら、ナチュラルは軍隊だから、そういう規則はうるさいって、お前が前に言ってたんじゃない」

そうそして、彼等の就寝時間が九時だということも、楨那が教えてくれたのだ。

『普段はね。明日は久々に休みをくれるらしいんだよ。家にも帰りたし、色々と準備してたら、こんな時間でさ』

「休みって、珍しいな」

亮樹の言葉に、楨那は心底嬉しそうに笑った。

『本当だよ。さっき急に言うもんだから大変でさ。本当は亮樹にも会いに行きたいんだけど……』

「分かってるよ。こっちまで来てる余裕ないもんな」

亮樹達はナチュラル派の領域にアジトを置いているが、そこは本島から離れた島で、楨那と直接会うには遠すぎた。現代の交通機器をもつてすれば、数十分で会えない距離ではないが、たまの休みである楨那にしてみると、その数十分も惜しいだろう。かといって亮樹も、明日は滋から話があると言われているので、本島まで赴いている時間は恐らくない。

『ごめんな。俺がビュー・ガーデンに行けたらいいのに』

「人それぞれ事情はあるよ。ビュー・ガーデンの存在価値を分かってくれてるだけでも、俺らにとっては十分だから」

亮樹達が一番恐れるのは、誰もが自分達しか信じられず、終いに自分自身しか信じられなくなる事だ。

人が人を信じなくなる分だけ、きつと戦争は激しくなる。

それを引いても、亮樹にとっては昔からの友人が自分の在り方を

認めてくれるのが、何よりも嬉しかった。

ふと思いついたように、槇那の目線が宙を仰いだ。

『そういえば、例のロウ……じゃない、フューズを拾ってからもう一年じゃん。どうなの、その後？』

突如訊ねられた砂乃すなののことに、亮樹は頭を抱えた。

「日に日に自我が強くなってる気がするよ。それはいいことなんだろうけど、気が強くてわがままなところは、一体誰の影響なんだかな」

『お前じゃないんだ？』

からかうように槇那が笑った。

左手で頬を支えるように肘をつけば、亮樹は呆れたようにうなだれる。

「俺はわがままでも気が強くもねえよ。逆にあんなに人懐っこくもないな」

『確かにな。俺も一回その砂乃ちゃんとやらにあつてみたいね』

「会えるよ。俺がそっちまで連れてってやる」

槇那が笑う。それはどこか、寂しそうな笑顔だった。

『さすが親友。俺が会いたかったら、地の果てからでも会いに来てくれそうだな』

「冗談。そこまで俺は優しくないぜ」

『オーケイ。期待通りの返事だよ。じゃあまた近いうちに連絡が行くと思うから。じゃあな、亮樹』

同じように亮樹が別れを告げると、通信はプツリと切れた。

久しぶりに親友と話せたことに満足した亮樹は、そのまま蒲団ふとんをかぶり目を閉じる。

例え天涯孤独でも、今の亮樹は決して一人じゃない。

だからこそ、大切なものをもう失いたくない亮樹は、今日の前にあるものを必死に守ろうとしているのだった。

翌朝、亮樹は滋と共にアジト内部のモニタールームにいた。

先日他の地域に潜伏しているビュー・ガーデンの知人に会ってきた滋が、現在のゴッドとナチュラルの状況を話してくれる。

「最近はゴッド派の力が大幅に強まっているらしい。ナチュラル派から連れ去られる捕虜も、日に日に増えているという事だ」

「ゴッドに侵食されそうってこと」

「ああ」

ゴッドとナチュラルが勝手に争い、起こった現実だ。放っておきたいのは山々だったが、それはそれでビュー・ガーデンにとっても都合が悪いのだ。

二つの派閥の共存を望むこちらにとって、どちらかの派閥が滅んでしまうのは、共存という目的を阻まれてしまうことになる。

だから今の状態を保つのも、彼らビュー・ガーデンの役目なのだ。「ゴッドが話して分かる連中でないのは今に分かった事じゃないからな。実力行使しか手がないのが辛いところだが」

白髪の増えた色素の薄い短髪を、滋はがしがしと掻いた。年の割に若々しかった亮樹の父とは違って、滋は年相応の顔つきをしている。彼が笑った時にできる目尻のしわが、亮樹は好きだった。

「でも、結局どこを押さえたら上手く話がまとまるわけ？ トップはカミサマなんだから」

「神はあくまで偶像だ。それを信じるのは構わないと思うが、……と、話がずれたな。とにかく、本当に組織を仕切っているのは“神の代理人”と呼ばれる四人だよ」

「何それ、初めて聞くんだけど」

耳に慣れない単語に顔をしかめつつも、亮樹は椅子ごと滋に向き直った。

「そうか？ もう当に砂乃から聞いているものだと思ってたぞ。」

神の代理人。神の声を直に聞き取れるという四人の人間のことで、事実かは期待できんがな」

「はあ？ どう考えても有り得ねえだろ。歴史の勉強で日本国の過

去は学んだけど、神と交信できるなんて、卑弥呼とかいう王女様だけだったぜ」

「邪馬台国……、二五〇〇年以上は前の世界だな」

「そ。確かに昔の人間なら、神の声が聞こえるくらい心清らかだったかもしれないよ。でも今の国状況を考えてよ。信仰するのは勝手でも、神様自身はとつくに人間の相手なんか飽きてるって」

頭の後ろで手を組んで、椅子の背もたれに思いきり体重をかける。ギリリと椅子が悲鳴をあげるのにも、亮樹は構わず体重を預けた。

「砂乃に聞かれたら、さぞかし怒るだろうな」

手の動きだけで操作できるようになったパソコンは、滋の手に合わせて画面を切り替えた。クスクスと笑いながら、砂乃にすっかり懐かれている亮樹を楽しんでいるようだ。

「あいつは何であんなに俺と居たがるのかな。俺って自分でも、結構ひどい男だと思うけど」

「根が優しいんだよ、亮樹は」

そう言っつて、やはり笑いながら滋は亮樹の頭を撫でる。そう、この顔が亮樹は好きなのだ。大きくてゴツゴツした手は、どこか父を思わせて彼を安心させたが、同時に子ども扱いされているような嫌悪感にも襲われた。パツと反抗するように身を逸らす。

「この扱いは嬉しくないよ、シゲちゃん」

「気にするな。俺はお前の父親代わりだ」

「父親代わりでも、ガキ扱いは気に食わないっての！俺もう十八なんだからな」

「俺から見れば、いつまでも子供だな」

マジかよ。亮樹は思った。

この扱いを砂乃や緒叶に見られれば、調子にのったあの二人から、同じく子供扱いされかねない。

緒叶は一応年上だから百歩譲って我慢できても、あのお子様砂乃から子供扱いを受けるのは、地球がひっくり返っても我慢ならなかった。

シゲちゃんに子ども扱いされそうになったら、今度は振り切って全速力で逃げよう。

そう心に決めた亮樹なのだった。

庭先の小さな丘に腰を降ろすと、いつも胸に掲げているペンダントを首から外し、砂乃はクリスタルを太陽に透かした。

いい、砂乃？ このペンダントを肌身離さず持っているんだよ。

記憶の主は、そう言いながらこのペンダントを砂乃の首に付けてくれた。

あの約束を懸命に守り、あれから一年、砂乃は一度もこのペンダントを体から離していない。

だけど記憶の主は、未だに自分を迎えに来てはくれないなかった。元々砂乃は、事の善し悪しもわかっていなかった気がする。

ただ冷たい雨の中自分を見つけてくれた亮樹に感謝し、みんなの役に立てるならと、亮樹と一緒に戦う事を決めた。

だけど事実、砂乃のパートナーは別にいたのだ。亮樹と組む前まだ砂乃がゴッド派にいた頃、砂乃は神の代理人の一人、棗のパートナーだった。

その彼が砂乃にペンダントを渡し、迎えに来るからと約束してくれた。記憶の主だ。

しかし砂乃は亮樹とパートナーを組んでしまった。自我というのが芽生え始めた砂乃には、それがあある種の棗への裏切りだということに、最近漸く気がついたのだ。

こんな裏切り者の自分を、棗は迎えに来てなどくれないかもしれない。

それは悲しさと同時に、砂乃の中で安堵という感情も生んでいた。棗が迎えに来ないということは、彼に捨てられたことになる。

棗が迎えに来るといことは、滋と緒叶、そして亮樹との別れを

意味する。

そう思うと、砂乃は無意識に膝を抱えてその間に額を埋めた。

「……そんなの、いやだな」

ふと漏れた声。だけど何が嫌なのか、自分が何を望んでいるのか、砂乃自身よく分からない。

ただ一つはつきりしているのは、自分が亮樹も滋も緒叶も、棗も大好きだという事だけだ。

暖かい陽光を浴びていた背中に、不意に影が落ちた。

「気分悪い？」

優しくかかった声に顔を向けた。

緒叶だ。

肩につかない程度の短い茶髪に、優しくに垂れた目尻が彼女の性格を象徴しているようだ、と、砂乃はいつも思う。

緑のハイネックのセーターが、その雰囲気一拍車をかけているようにも思われた。

顔を再び前に戻すと、砂乃は重い口を開く。

「気分は……わるくない」

「そう？ 俯いていているのが部屋から見えたから気になってね。

今日は亮樹くんと一緒じゃないのね」

言われてみれば、此処は緒叶の部屋のまん前だ。窓に背を向ける状態になっていた為、全く気がつかなかった。

「りよーじゅは、シゲさんとモニタールームにいるもん。ゴッド派やナチュラル派の話をしているときは、いくら話しかけてもかまってはくれないから」

「そう、それで……拗ねているのね？」

「すっ、すねてない！」

ムキになって発した言葉が、逆に拗ねていると肯定していることになる、と自覚するのは、今の砂乃には難しい。

緒叶はあえて、その場を笑顔でやり過ごした。

「わたしも一人で暇だったの。隣に座ってもいい？」

「……いや」

砂乃の答えを受け取ると、その隣に腰掛けた。その動作は、とても二十五歳とは思えない、もっと落ち着きのあるものだった。

「おかのはシゲさんのイトコなんだってね」

「そうよ。亮樹あきつきくんが教えてくれたの？」

あまり必要外のことを話したがない亮樹だが、砂乃は自分の持った疑問をすべて亮樹に訊ねる。

それは亮樹を誰よりも信頼している証だった。

「うん。でも、ずっと不思議だったの。りょーじゅやシゲさんは、いつもゴッド派とナチュラル派をワカイさせることで頭をかかえているけど、おかのはあんまり、そういう話にはかわらないよね」

「うん。わたしはシゲに頼まれた事柄を調べるだけだし、正直、彼等の最終的な目的は分かっているけど、その時々々の目的は分かっていることが多いわ」

「それは……さびしくない？」

せっかく仲間なのに全てを話してもらえないのは、まるで信頼されていけないようで悲しいと、砂乃は思う。

だけど緒叶は、普段と変わらない笑顔で笑った。

その笑顔自体が悲しいと、砂乃は時々思っている。

「いいのよ。わたしも、知っているのに話していけないことがあるから。先に寂しい思いを与えたのは、わたしの方なの」

ずっと見ていた緒叶の瞳が、悲しく揺れた。

亮樹のとき同様、一度も二人の視線が交わる事はない。

「おかの、あたしにそれを話したいの？」

「砂乃ちゃんには、いつか話すべきだと思っているわ。でも、今ではないと思う。だからあなたには、わたしの罪だけ知っていてほしいの」

遠慮がちに、緒叶の視線が砂乃をとらえる。

拒絶する事も知らずに、砂乃も緒叶を見た。

うん、とだけ、相槌を返す。

「わたし……わたしは、父の行為で、ゴッド派の男性の元に嫁い  
だことがあるの」

「????」

「あ……だからね、ゴッド派の男性と結婚したの。特に好きだった  
わけでもなく、お父さんに薦められたから」

仏頂面のまま、砂乃は首をかしげた。

「好きじゃない人と、ケツコンしなくちゃいけないの？」

「あの頃父は、ゴッド派に心惹かれていた。元々上条家は中立を推  
奨していたんだけど、何とかゴッド派との繋がりが欲しかった父は、  
わたしの身分を偽って、ゴッド派の人間の元へ嫁がせたの」

いくつか理解できない単語も出てきたが、好きでもない男と結婚  
しなければいけないという根本的な疑問が解決されていなかったの  
で、後のことは特に気に止めなかった。

後で亮樹に聞いてみよう、とだけ何となく思ってみる。

「そして直に……わたしは彼の子供を身ごもった」

その言葉に、砂乃の上半身が緒叶の方へのめる。

「赤ちゃんって……、どうやったらできるのっ？」

その気迫に<sup>お</sup>圧された緒叶は思わず身をのけぞった。

自分の話のどこまでをきちんと理解してくれているのかを思うと  
溜息をつかずにはいられない。

「それは……」

思わず説明しそうになると、緒叶はハッと口元に手を当てた。

砂乃は十四歳。日常的な知識は十四年分きちんとあるが、感情……

……というか内面は、最近自我が芽生え始めた三、四歳の子供と何ら  
変わらない。

それを思うと、緒叶は説明していいものなのかただ迷った。

「亮樹くん……訊いたらいいんじゃないかしら？」

どもりながらも、作り笑いを浮かべつつ言った。口元が引きつっ  
ていることに、幸い砂乃が気にした様子はないようだ。

「りょーじゅに聞いても教えてくれないからきいているのっ？」

だったら余計に話さなくてよかったと、息をはく。

「もう少ししたら、砂乃ちゃんにも分かる日がくるわ。それまではあなたの中にある理念しんじつが本当しんじつで良いと思う。無理に知ろうとすることは、時にあなたを傷つけるのよ」

分かった。とだけ、砂乃はうなずいた。

「でも、それを知らないかぎり、りよーじゅはいつだってすなのを子供あつかいするの。すなのは確かに知らないことが多いけど、だから知りたいことを“知りたい”って言うてるだけなのに……」

「亮樹くんは元々、深く話す事を嫌う人だからね。彼に真実を求めるのは、無いものねだりなのかもしれないわ」

無いものねだり。初めてきく言葉ではあったが、なんとなく意味は理解できた。

つまり、話したからに人話してもらえないことを寂しいと思う、それは砂乃のわがままで、緒叶はそう言いたいのだろう。

「だけど砂乃は、“亮樹から”話してほしいのだ。

「そういえば、おかの話のとちゆうだったね。お腹に赤ちゃんができて……その後はどうなったの？」

はぐらかし方がわざとらしくあっただろうか。と砂乃は思う。

「ただ今のお話はして心優しいものではなかったため、途切れさせることが出来るなら、と何も感じない振りをした。

一方緒叶は、佳境に入り始めた話に眉を寄せる。

「普通に生んでも構わなかった。でもわたしが嫁いだ先は、とても熱狂的なゴツドの信者で、彼と彼の両親は、子供を神の子フューズにしようとした」

ドクンという胸の音を、砂乃は初めてその耳で聞いた。気がした。

「わたしの父も反対はしなかったわ。もちろんビュー・ガーデンは組織じゃないから、抜けようとする者を止める者もいなかった。わたしがあの子をフューズとすることを、誰も止めてはくれなかったの」

「止めてほしかったの？ おかのは」

「止めようとしてくれる人がいたのなら、わたしは命にかえてもあの子を実験材料になんてしなかったと、今なら思う。だけどみんなの肯定の声かわたしの鎮痛剤になって、あの時は言われるがままにしか動けなかった」

「……赤ちゃんは？」

顔を逸らして、砂乃は訊ねた。このままでは、言うてはならないことまで言ってしまうそうだ。ふと、緒叶が目を伏せる。

「……実験は失敗だった。子供は命を落として、わたしも彼とは離婚したの」

緒叶も辛いのだろうと、頭の隅では思えた。

だけど今はただ、砂乃の中でふつふつと怒りが込み上げる。

地面から適度な長さで生えて<sup>は</sup>いる芝を、ぎゅっと握った。

「おかのが……殺したの」

「そうなのかもしれない」

「だけど……、おかのは生きてる」

「砂乃ちゃん？」

「……赤ちゃんは、おかのに勝手に体をいじられて、勝手に殺された。生きたかったのに殺された。それなのにおかのは、どうしてフツーな顔して生きていられるの！」

違う。緒叶だって傷ついている。こんなことは言っちゃいけない。頭ではそう思うことができるのに、口は止まってくれなかった。

「フューズだって何だって、あたしは人間だもん！ 実験とか、そんなものから生まれたわけじゃないもん！ あたしは実験の成功体なわけじゃない！」

「砂乃ちゃ……」

フューズである砂乃だからこそ、これは話しておかなければいけない事実だと思った。

だけどそれが、砂乃を傷つける言葉となることに、緒叶は気付けなかったのだ。

実験なんて言葉、決して口にしてはならなかったのに。ほどなくして、砂乃の叫び声を聞きつけた亮樹と滋が、建物から姿を現した。

亮樹の姿を視界に収めた砂乃は、一目散に彼に飛びつく。

「どつしたんだ、一体」

まずは滋が、緒叶に状況説明を求めた。

緒叶は立ち上がると、家へ向かって歩み始め、滋とすれ違おうと肩を並べた瞬間に、その重い口を開く。

「話そうと思ったの。砂乃ちゃんに、全てを」

緒叶の過去を知っているのは、この中では滋だけだった。

彼女にとっては思い出したくもない過去。それを話そうとしたということは、どれだけの覚悟だったのか、滋には図ることができない。

「でも、やっぱりまだ早かったみたい」

そう言って彼女はうすく笑った。

その笑みに痛々しさを感じたのは、理由を知る滋だけだったようだ。

滋の後ろで砂乃をなだめていた亮樹が、緒叶が通り過ぎた瞬間、彼女の髪を撫でる手を止めた。

「待てよ。こいつに何言ったの？ まさかいきなり砂乃が声を上げたわけじゃないんだろ？ あんたが言わなきゃ、こいつは理由なしに人を怒鳴りつける奴じゃない」

「そう。わたしが悪者なのよ。君は砂乃ちゃんを慰めてあげて。わたしのことは……、ごめんなさい、今は放っておいて」

そう口にしながら、やはり緒叶は笑うだけだった。

何かが確実に崩れていくのを、亮樹は無意識に感じていた。

\*\*\*

あれからもう、三日は過ぎていた。緒叶は部屋から顔を見せなく

なり、今日も三人だけで朝食を食べる。

「……まずい」

「文句言うな。緒叶が家事を放棄してるんだからしょうがないだろ  
う」

滋の作った焼飯をかきこみながら言う亮樹の言葉に、当人は不機嫌に答える。

食事を主とした家事は緒叶の担当だ。滋も亮樹も、料理なんて全く経験がない。

好奇心から砂乃が作ると言い出したこともあったが、明らかに危なっかしい手つきに、頼むからとやめてもらった。

「シゲちゃん、慰めてやんないんだね」

「あいつがそれを望まないんだから、大きなお世話にしかならないだろ」

「おかの……すなののこと嫌いになつたかな？」

「なんでそういう心配すんの？ 怒らされたのは砂乃だろ」

そうだけど、そうではないのだ。砂乃だけが被害者なわけではない。

「おかのにも、悲しいことがあるんだよ」

「なーんか、俺が悪者みてえ」

結局、一番状況がつかめていないのは亮樹なのだ。緒叶の過去も、その事情も、亮樹はさわりすら聞かされたことがない。

「しょうがないだろ。全てを曝け出して傷を舐めあう関係になりたくないんだ、緒叶は。それはお前も同じだろう、亮樹？」

そう滋が言うと、砂乃はふと亮樹を見た。

視線をテーブルに向け、まるで凶星をつかれたような脹れっ面をしている。

「お互いに傷を持っているからこそ、緒叶はお前に話そうとしないんだ。分かってやってくれ」

「分かんないわけじゃないよ。確かにあの時は無神経に緒叶を責めちゃったとも思ってる。けど、あいつはいつまで部屋にこもるつも

りなんだよ?」

別に亮樹へのあてつけで、緒叶が部屋にこもっているわけではないのは分かっていた。

それでも早く元気な顔を見せてくれなくては、飯がまずくてしょうがないのだ。

「じきに出てくるさ」

滋はみんなの父のような存在だ。どんな屁理屈を並べても、すんなりと彼によって真実を諭される。

けど多くの人間は、真実を受け止められるほど素直ではないのだ。

「どうだかね。ごちそうさま」

不機嫌に言葉を返して、亮樹は席を立った。

また場の雰囲気が悪くなる。

ダイニングを出た亮樹が、階段を上がる音を聞くと、砂乃は止まっていた箸を再び動かした。

「すなののせい……かな?」

「気にするな。みんなガキなんだ」

自室に入った亮樹は、怒りと罪悪感から複雑な気持ちにさいなまれていた。

対応が子供っぽかった気もするが、今更後には引けない。

と、シーティーパーから流れる着信音で、亮樹はハッと我にかえる。

慌ててボタンを押すと、現れた映像に映っていたのは、見るも懐かしい人物達だった。

「え……、槇那の父さんと母さん?」

実に二年ぶりに見る二人だ。心なしか、あの頃よりも老けて見える。槇那の父　麻生は亮樹の父と同じ、ナチュラル派の上層部地位を持っていたはずだ。だから他のナチュラル派の男達と同じよ

うに軍隊に所属してはいない。

息子である榎那も、本来は軍ではなく将来ナチュラル派を引つ張る者として勉強すればいいのだが、だからこそ軍に入って世界を見渡したいと、彼はいつか言っていた。そのために身分を隠して軍に所属する事にした、と。

麻生夫妻は逸らすことなく亮樹を見ている。

「あ……つと、えと、久しぶり。ど、どしたの？」

『亮樹と話すのは、もう二年ぶりだな』

厳格な面立ちを崩す事なく麻生が言う。幼い頃は、よく榎那と亮樹の父を含めた四人で、遊んだりしたものだ。今はすっかり当時の面影をなくした麻生の言葉に、そうだ、と亮樹は頷いた。

『ビュー・ガーデンにあんたが行くと言ったとき、あたしたちはあんなを裏切り者と見ることでできなかつた。どうしても、そつちの組織はゴツド派の味方に見えたから……』

次に口を開いたのは榎那の母 麻生夫人だ。ふくよかな体型の彼女は、生まれたときから良家の娘だったらしい。おいしいものをたらふく食べて、幸せに育ったに違いない。しつめに厳しく、いつも鬼のような形相しか浮かべていない印象の彼女が、亮樹は幼い頃から苦手だった。

「何だよ、いきなり。別にビュー・ガーデンはゴツドの味方じゃないよ。だからつて、ナチュラルの味方でもない。そして、どちらの敵でもないんだ」

それに組織でもないと付け加えようとしたとき、麻生夫人が先に言葉を発した。

『そう、榎那もよく話していたよ。そつちに行ければ、今のようゴツド派の連中からおびえて暮らす必要もないってね』

その言葉に、亮樹は淡い期待感を抱いた。

ベッドに腰掛、腕をもつと高く上げる。

「もしかして、榎那の説得にに応じてくれたの？ ビュー・ガーデンに、派閥がえしてくれる気になつたんだ！」

しかし麻生は、目を伏せて首を左右に振った。

『確かにお前たちは理想だよ。そっちへ行けたら、どんなにいいかと思う。だけど私達はどうしても、ゴッド派との共存なんて考えられないんだ』

『そう思ってるのはきつとあたし達だけじゃない。だからあんたのやろうとしていることも、所詮都合のいい夢なんだよ』

ギリツと、亮樹は奥歯を噛み締めた。

「何だよ、昔みたいに俺を否定するために、わざわざ通信してきたの？」

そのときの亮樹の気持ちは、まるでビュー・ガーデンへの派閥がえを決めたときに彼らに否定された、あの衝動を連想させた。

『きつともう、あんたと話すこともないと思っただから、伝えておきたかったんだよ。槇那が何度あんならの素晴らしさを訴えても、あたしにそれに応える事はできなかったって』

はつきりと言ってくれる。だけどその言葉に、皮肉はこもっていなかった。

『でも……槇那が望むなら、あいつだけでもそっちに行かせてやればよかった』

「は？ 何それ。何で過去形なんだよ？ 今からでもこっちに来させてやればいいじゃんか。あいつはおじさんたちの為に、ずっとナチュラル派を貫いてきたんだぜ？ 一度でいいから、あいつの夢、叶えてやるうとか思わないの？」

『叶えてやればよかったと、今なら思うさ』

「だから、何で過去形」

『死んだんだよ！ 槇那は』

「は……？」

一瞬目の前が真っ白になるのを、亮樹は感じた。

死んだ？ 槇那が？

麻生夫人は、半ば勢いで真実を伝えてしまったようだった。涙がその頬を伝う。

『軍から命令が出たんだ。領地拡大を目論んでいるゴッド派のスパイとなり、その情報を掴めと』

領地拡大。そのことは、亮樹も滋からいくらか話を聞いていた。ビュー・ガーデンも、それを止めようとしていたのだ。

「命令って……いつ？」

亮樹が槇那と話したのは、つい四日前だ。こんな数日で、死ぬような命令が下されたなんてとても信じられない。麻生が放物線のように歪められていた口を重そうに開く。

『詳しいことは、死の知らせが来るまで何も知らなかった。だけど、三日前に休みをもらったと家に帰宅した時……命令は既に出ていたらしい』

わああと、麻生夫人のわめき声が響いた。

あの日、帰宅して元気に振舞っていたであろう槇那を、思い出したのだろう。いつだって怒っている印象しかかった麻生夫人の突然の泣き声に、亮樹はこの言葉が本物なのだと痛感した。それと同時にただ呆然とする。

家に帰宅する前に命令が下されていたということは、亮樹と通信をしたあの時、槇那はもう自分の死を覚悟していたことになる。

スパイ命令は死の宣告だと、そう教えてくれたのも槇那だった。

ビュー・ガーデンは常に危険と隣り合わせであることを承知している連中だし、大抵は馬の合う人間たちと集団行動をしているため、戦闘能力に長けた仲間が助けてくれる。

だけどナチユラル派の軍団は違う。

守ってくれる連中どころか、助けてくれる仲間もなく、危険が迫れば逃げ出すような同志達に過ぎないのだ。

敵の陣地に乗り込めというのは、つまり死ねと言われたも同じこと。

それを分かっただけで、あの日槇那は笑っていたのだ。

近いうち連絡が行くと思うから……。

あの言葉は、そういう意味だったのかよ。

じゃあな。亮樹。

あの“じゃあな”は永遠の別れを指していたのかよ。  
気がつけば、通信は切られ、時計型通信機は元の腕時計に戻っていた。亮樹は俯き、奥歯を噛み締める。

ぼつぽつと、落ちた水滴がズボンにシミをつくった。それはすぐに乾いて消える。槇那の生きた証はどこにも残ってはくれないのだと、思うたびに涙が溢れた。

俺が会いたかったら、地の果てからでも会いに来てくれそうだな。

お前が望むなら、天国だろうが地獄だろうが、会いに行つてやるよ。

だから、死んだなんて嘘だって、そう言ってくれよ。

こんな最期はあんまりだろ？ お前の人生はこれからじゃんか。

なあ、槇那……。

\*\*\*

「は？ 何だつて？」

「だから、ゴッドの侵略を食い止めに行くよ」

「さて、亮樹。これは簡単に決められる問題じゃないんだ。他のビユーの話も聞いて、もっと詳細と、共に戦闘を手伝ってくれる仲間を見つけてからだ」と、この前も説明しただろう」

滋の部屋へと赴いた亮樹は、ゴッド派の領地拡大をすぐにでも止めたい事を伝えた。

「でもそれじゃ、時間がないと思う。犠牲が今も出てるんだよ？ このままじゃ、俺たちがどうこうする前に、ナチュラルが滅んでしまつかもしれない！」

自室のソファに腰をうずめている滋とは裏腹に、亮樹は仁王立ちで声を荒げた。

滋の新聞を読む手がピクリと揺れる。

「誰か犠牲になつたのか？」

何でも見通してしまふ滋だ。隠すのは無理だと分かっている、つい奥歯を噛み締めて言葉を飲んでしまう。

何も言おうとしない亮樹に、滋は溜息をついた。

「とにかく、もう少し待つんだ。俺もただ新聞を読んでいるだけじゃないつもりだぞ」

「分かつてる。けど犠牲が増える分だけ、お互いの派閥を憎む人間が増えていくから」

「砂乃がいるお前なら、何とかできるとでも思うのか？」

その言葉に、亮樹は砂乃の顔を思い浮かべた。

もともとはゴツドの生み出した少女だ。砂乃がいれば、それなりに対等に戦えるかもしれない。

「だけど、

「砂乃は連れて行かない」

廊下をたかたかと駆ける足音が、少し離れた緒叶の部屋にも届いた。

何事かと西側の窓から庭を覗くと、砂乃が一目散に外を駆けていく。ゆるい斜面の坂となつているところを駆け上がり、登りきつたところでしゃがみこんだ。

膝を抱えたまま、砂乃の頭に亮樹の言葉がリフレインする。

砂乃は連れて行かない。あいつはゴツドへの敬意を忘れていないから。あいつはまだ、ゴツド派の連中を信じてる。そんな奴を連れては行けない。

あれはつまり、砂乃はビュー・ガーデンにいながらも、ゴツド派を信仰している裏切り者だと、そういうことなのだろうか。

たしかに今、ゴツド派の人間と戦えと言われても、まともに戦う事は出来ないだろう。

「だけどそれを、役立たずの裏切り者だと、それは思い過ぎかもしれないが、思われているとは思わなかった。共に戦うと決めたのは砂乃だ。その決意を、決して翻ひるがえしたりはしないのに。」

嗚咽を漏らしながら、何度も深呼吸をした。

他の誰に否定されても、亮樹にだけは信じて、認めてほしかったのだ。

自分は、仲間だと。

「砂乃」

呼ばれた声は、ピシリと砂乃の背筋を強張こわばらせた。

久しぶりに聞く声、だけどその声を、砂乃は決して、忘れたりはしない。

上げた顔の先には、夕闇にもその気高さを失わない、神々しい青年が立っていた。

真っ白な長髪、横に伸びる特徴的な前髪、古代ヨーロッパ騎士を思わせる凛々しき身構え。

「ナツメ……サマ？」

「久しぶりだね。砂乃」

ゆっくり立ち上がると、砂乃は思わず彼の頬に触れた。

夢じゃない。確かに棗様の、暖かい頬が、体が、此处にある。

「約束通り、迎えに来たよ」

ドクンという合図と共に胸の動悸ドキが激しくなった。

「帰ろうか。神カミの元へ」

棗の頬に添えられていた手が、今はしっかりと彼に握られている。ただ呆然と、砂乃はそれを見つめていた。

### 3・すれ違ふ心

事の一部始終を、緒叶は見ていた。

声は聞こえない。だけど、元ゴッド派の緒叶だからこそ分かる事がある。

あれは、あの白髪の男は、神の代行人だ。

そして彼に手を取られた砂乃は、しばし固まっているようにも見えたが、じきに一緒に歩き出した。

砂乃をこのまま行かせてはいけない。

直感とはいえそう感じた緒叶は、一目散に滋の部屋へと走る。

「シゲ！ 砂乃ちゃんが」

不意に言葉を吞んでしまったのは、そこに亮樹の姿があったからだ。

「砂乃がどうした」

見兼ねた滋が、話を進めようと言葉を発する。

ハッと我に返ると、ひっくり返りそうな声を何とか発した。

「そう、外に、神の代行人が来て……多分砂乃ちゃんを連れ帰るためにきたんだわ！」

言葉の最後に亮樹を見たのは無意識だ。だけど心のどこかで、伝えるべき本当の相手は亮樹だと気付いていたのは真実だった。

彼は緒叶の心を悟ったのか、それとも自分の心に従ったのか、彼女の隣を通り過ぎたのかと思うと、滋の部屋から姿を消した。

現代の交通機関は自動車とバイク型の飛行機体が主流だった。

その中でも金銭的に裕福な者のみ、球体の超高速飛行機体も交通手段の一つとして使用できる。

棗が使用しているのも、球体型飛行機体 ガウだ。

数百メートルは高い位置から降ろされたエレベーターのような円

錐に足を踏み入れると、砂乃は一年間過ごした家を見た。

窓はついていないため、手すり以外は自分と上条家を阻むものは何もない。

名残惜しくなどないと言ったら嘘になるけれど、今は亮樹に会いたくないという気持ちの方が強かった。

棗と共にこのまま帰ったら、二度と亮樹達に会う事は無いかもしれない。

寂しいと、やっぱり思ってしまうけど、きっと後悔はしないだろう。

だって隣には、ずっと迎えに来てくれるのを待ち望んでいた棗がいる。

彼の顔を見て安心したいと、砂乃が上条家から背を向けた時だった。

「砂乃！」

呼ばれた名前と声にハッとする。

それが亮樹だと分かって振り向く事ができなかったのは、動揺と罪悪感からだっただ。

裏切り者だと思われていたのだから、大したダメージなど亮樹は受けていないかもしれないが、これは間違いなく、彼への裏切りだ。ビュー・ガーデンを捨てゴッド派へ戻るのだと思われても仕方ない。

いや、実際そうなのだ。

「砂乃、彼は？」

目の前には、目の端で亮樹を見ながら訊ねてくる棗の姿。

今の砂乃は、彼を見つめるだけで精一杯だった。

「……りよーじゅ。かしわば、りよーじゅです。この一年、ずっと砂乃と一緒にいてくれたの」

そう、と返すと、棗の体が亮樹の方だけに集中した。

「初めまして柏葉亮樹君。僕の名前は棗。砂乃のパートナーであり、ゴッド派をまとめる神の代理人の一人です」

初めましてという割には、“亮樹”の発音が砂乃と違って正しか

った気もするが、生憎それに砂乃と亮樹が気付いた様子は無かった。棗の顔は逆光で、亮樹からはよく見えない。だけどその言葉遣いからは、明らかな侮蔑の感情が伝わってきた。

「砂乃、おまえ、ゴッドが嫌になって抜け出してきたんじゃないかな」

そんな棗の言葉は聞かなかったように、亮樹はただ砂乃へと問い掛けた。

棗の表情が、明らかに不機嫌になる。

「……ちがう」

砂乃が答えた。

「俺はそうだと思って、お前を俺たちのところに留まるように言った」

だけどそうでないなら、もしも砂乃がゴッドへ戻りたがっていたのなら、亮樹にそれを阻む事はできなかった。

同情で引き止めたんじゃない、楨那を早くに死なせてしまった麻生両親と変わらない。

傷つけたくなくて、これからの作戦にも巻き込まないと決めたのだ。砂乃の意思でいたいと思う場所にいさせてやらなくては。

「……帰るのか？」

亮樹は俯いていた。彼が何を考えているのか、砂乃には想像も

まして想像しようと思うことも考えつかない。

「りょーじゅは、すなのにいてほしい？」

「俺に聞くな。砂乃の好きなようにすべきだよ」

俺に聞くな。それは、亮樹の口から“裏切り者”なんて言わせるなどということなのだろうか。

彼は優しいから、今この瞬間も、自分に気を使ってくれているのだろうか。

一度彼を疑ってしまった砂乃は、もう否定的にしか事を考えられなくなっていた。

「じゃあ……このままナツメサマと帰る」

「そっか」

話が終わったと判断した棗は、エレベーターを動かした。二人の体がどんと上空のガウに引き込まれていく。

もう後戻りはできない。

それくらい高い位置まで上り詰めた時、庭には俯く亮樹と、いつの間に出てきたのか、こちらを見上げる緒叶と滋の姿があった。

砂乃の名前を呼んでくれているのが、ここからでも分かる。

引き止めてくれたなら、わたしは命に変えても、あの子を実験材料になんてしなかった。

ねえ、おかの。

あたしはこの時、いっしゅんだけあなたの言葉を思い出したの。その理由に気付くまで、ずいぶんとかかかってしまったけれど

……。

砂乃の乗り込んだガウは、間もなく亮樹達の前から姿を消した。

四時間で日本国を一周できる機体だ。その速度は言うまでもない。行ってしまったな」

滋が亮樹の隣に立った。まるで寂しいとでも言いたげな口調だ。

ぎゅっと奥歯を噛み締めれば、青黒く映る芝生を見つめながら、搾り出すように亮樹は言葉をはいた。

「あいつが望んだ居場所なんだから、これでいいんだよ」

「……お前がそう言うのなら、そうなんだろうな」  
くるりと体位を変えると、滋は母屋へと入っていった。彼の言葉に不思議そうに振り返ったとき、緒叶がじっとこちらを見ていたのに、亮樹は気付く。

その目は確実に、自分を責めていた。痛む亮樹の胸にとって、それは火に油を注ぐも同じことだ。痛みを紛らわすには、自分も彼女を睨むように見返すしかなかった。

「何だよ？」

「行かせてしまつてよかったの？」

体の横に下ろされた手が、ゆるくだが拳を作っていた。彼女が何を自分に言わせたいのか、もちろん亮樹には想像もつかない。

「だって、砂乃が帰りたいつて言つたんだ。止める事は、あいつを縛る事にしかないだろ」

「……砂乃ちゃんのためだつて言うのね」

「何が言いたい？」

「それは言い訳だつて、思えたから」

こんな時まで、何故だか緒叶の声は優しく、それは逆に亮樹にダメージを与えた。きつく、咎めるように責めてくれた方が、何倍も楽だ。

「じゃああなたに分かるつてのか？ あいつの気持ち、本当に望んでいたことが！」

ギツと緒叶を見た亮樹の瞳がただ悲しく揺れるているようにしか、彼女には見えなかった。

大切な親友を亡くし、一日も経たないうちに仲間を手放したのだ。今まで自分が必死に戦つて、共存を目指してした行いが、まるで意味がなかったように思われてならない。

「そんなこと、だれにも分からない。だつたらその言葉を信じるしか、……それしかないだろ！」

「……あなたはそうやって、いろんなことから逃げているのよ」

言いにくそうにしながらも、緒叶は振り絞るように言った。

「は……？」

「話すのが嫌だから、何も聞かない。傷つくのが嫌だから、深く関わらない。そうやって逃げているから、砂乃ちゃんの望みも幸せも分からないんじゃない！」

それは凶星だ。

しかし亮樹は逆上したように、再び緒叶に背を向けた。

「たしかにわたしも逃げた。だけど、みんなにとって一番いいことだけは、いつだって分かっていたつもりよ」

緒叶の足音が、体位を変える。

「ゴッドがどういう場所か、あなたは全く知らないわけじゃない。だったら、砂乃ちゃんにとってそこが本当に幸せかも、あなたには分かるはずなのに……」

空に浮かぶ月光の映し出す影が、亮樹一人になったのは、それから間もなくのことだった。

\*\*\*

ガウ内の液晶モニターには、夜空を瞬く星がきらめいていた。メディア番組を好まない棗が、機体外に設置されているカメラに切り替えているのだろう。砂乃はそれを、上質なソファに腰掛けたら呆然と眺めた。ガウ内部は、奥に小さな操作室があるだけで、あとは豪華なシャンデリアに照らされた応接間のような広い一室だ。人間三十人は優に入るだろう。ソファにテレビ、机には、棗の部下が用意してくれた紅茶が湯気を上げていた。天窓がいくつああって、そこから星も見られる。

「砂乃」

声の主は、隣に腰掛けていた棗だ。

「はい」

「この一年、寂しい思いをさせたね。僕が迎えにくるまで、お前はずっと独りぼっちだったのだろう？」

「いいえ。りよーじゅがそばにいてくれました」

ふと棗が視界に入れた砂乃は、今もなおモニターだけに目を向けていた。

気に入らない。たかが兵器のくせに、一人前に感情などを持つなんて。

ズタズタに、傷つけてやりたい。

そう思うとあとは簡単だった。砂乃が傷つくだろう言葉が次々と脳裏に浮かんでくれる。

「亮樹が……か。彼はお前によくしてくれたかい？」

「そうだって言ったら、おこりますか？」

せつかく迎えにきてくれた棗を怒らせたくない、砂乃は不安げに彼を見た。

しかし当の本人は、まるで気になどしなかったようににこりと笑う。

「いいや。迎えに行くのが思ったよりもかなり遅れていただろう？だから、お前が傷ついているんじゃないかととても心配していたんだ。たとえ一時いっときの夢でも、お前が幸せに暮らせたのなら良かったよ」

幸せ。そうだったのだろうか。

もちろん不幸ではなかったけれど、棗と離れ離れにさせられたことは、いつも砂乃の心に寂しさを残していた。

「みんな、やさしかったです」

「そうだろうね。お前からゴッド派の事情を聞きだすために」「え？」

自分の耳を疑った。大きな瞳が、さらに大きく開かれる。

「子供のお前を、彼等は利用していたんだよ。慣れさせればきつとゴッドについて話すだろうと。砂乃、まさかゴッド派のことを彼らに話しては……」

「いません。ナツメサマのことも、このペンダントのことも。だれ一人にも話しませんでした」

「そう。いい子だ」

頭を撫でてくれるその手に、砂乃は思わず頬をゆる緩めた。

何も話さなかったのは、それもいつか、彼に言われていたからだった気がする。

ゴッド派は秘密が多いから、むやみやたらに他人にゴッドの話をしてはいけない、と。

「でも、みんなもすなのに、自分の話をしてはくれなかった」

数日前に、緒叶が自分のことを話そうとしたこと、聞いてやれば

よかったと、砂乃は不意に後悔した。

初めて、自分に過去を話そうとしてくれた人だったのに。

「それはそうだろう。いつ裏切るか分からない相手に、自分の秘密を明かせる人間がいるかい？」

「うらぎる……」

「お前がゴツドについて話さなかったのも、彼らを心から信用していなかったからだ」

そうなのだろうか。砂乃は亮樹を、滋を緒叶を、確かに信用しているつもりでいたのに。

棗の言葉が全て正しく聞こえるのは、彼こそ本当に、砂乃が信じている人物だからなのだろうか。

「お前は初めから、ゴツドの情報を集めるために、ビュー・ガーデンに利用されていただけなんだよ」

「でも……」

「まだ奴らを気にするのか。そんなに彼等はお前を可愛がるように振舞っていたのかい？」

それはどうだろうか。亮樹はたびたび自分を置いていくし、滋はあまり関わる機会もなかった。緒叶だって、面と向かって話したのはあの一回だけだ。

触れ合いなんて、ほとんどなかった。それでもなぜか、砂乃は彼等の愛情を感じていたのだ。

黙りこむ砂乃に痺れをきらすと、棗は切り札を話し始めた。

「ならば教えてあげよう。お前は彼らに決して信じてなどもらえなかったと僕が言う、本当の理由を」

「……」

「言いたくはなかったよ。でも後で傷つくのはお前だ。彼　柏葉  
亮樹の父親はね、ゴツド派によって殺されているんだよ」

「え？」

一瞬、また聞き違えたかと思ったが、さっきも聞き違いではなかったのだから、今回も本当なのだろうと考え直す。

「ただどそれが事実なら、亮樹が自分を信じてくれるわけがないのも納得できる。砂乃は一番神に近い、ゴッド派の人間なのだから。」

「もちろん今の彼女に、棗が名前も知らなかったはずの亮樹の素性を知っていることに疑問をもつほどの、余裕も知能もない。」

「彼の父親がナチュラル派の人間だったのは知っているかい？」

「いいえ」

「そうか。その中でも偉い方だったのだよ。柏葉家は。だから僕もよく覚えている。彼の父親はゴッド派とナチュラル派の共存を、ナチュラルにしながらも訴えていた。それはナチュラル派からも反感を買い、ゴッド派の神経を逆撫でした。“共存を図る身でナチュラルに属すのか”、と」

「亮樹の父親を知っていたというのは真っ赤な嘘だ。砂乃が関わっている人間の素性を、隅々まで調べ上げたに過ぎない。」

「だからゴッド派に招き入れるふりをして、彼を殺したんだ。僕がこれを知ったのは、柏葉亮樹の父かしわはじろうじゆが死んだ後だったけれどね」

「ナツメサマは、何も知らなかったんですね」

「知っていれば止めていたさ。むやみに人を殺す事は、神トナリの教えにそむくからな」

「不意に見せた棗なつめの表情が悲しく曇る。彼は誰よりも、神を愛し尽くしている、砂乃すなのには思えた。」

「分かっただろう？ 柏葉亮樹はゴッド派を恨んでいる。お前が彼に信じてもらおう事など、最初から、叶わなかったんだよ」

「ああ、そうか。砂乃は思った。」

「亮樹が自分に黙って出かけるのも、自分の過去を話してはくれないのも、砂乃を信じていないからこそその事だったのか。」

「信じられるものは、砂乃が信じるものは、やはりゴッドで、棗なのだ。」

「はい、ナツメサマ。ナツメサマは約束を守ってすなのをむかえに来てくれた。だったらすなのが信じるのは、やっぱりナツメサマだけです」

まっすぐに彼の顔を見て、砂乃は言った。

この一年は確かに楽しかった。ゴッド派にいるときは、パートナ―は主で、主従関係だったけれど、ビュー・ガーデンで砂乃は、亮樹と言う対等な関係の人間に出会う事ができた。

それは何より砂乃を成長させてくれる出来事になったけれど、すべては彼女からゴッドの情報を聞き出すための、亮樹の作戦に過ぎなかったのだ。

大丈夫。すなのにはもう、ナツメサマがいる。だれよりも信頼できるナツメサマが……。

\*\*\*

「なつつん」、もうすぐ着くんじゃない？」

タイル張りの華やかなホールに、三人の男女が集まっていた。

壁には瑪瑙めのうが埋め込まれ、天井のシャンデリアの光によってよく映える。

声を発した男 姿かたちから、十代中ごろだろう少年は、三人掛けソファを一人占めして横になっている。

「また棗げきりんの逆鱗さかきりに触れるぞ、森寄もりよき」

そう言ったのは御だった。腕を組んで、森寄の転がるソファの背もたれに後ろから寄りかかっている。

「いいじゃん、なつつんてばいつつも仏頂面の怒り顔だからさ、ニツクネームでもつけて印象よくしてやったほうがいいって」

「それはわたしも思いますね。棗げきりんさんはもう少し、愛想を身につけるべきかと」

と、古楽こがくが森寄に便乗した。

古楽は他の皆と同じく古代ヨーロッパの騎士のような格好をしているものの、ふわふわと流れるような長い金髪と、その美しい容姿から、女性である事は明らかだった。小さな窓から、壮大な景色を眺めている。

「古楽ちゃんてば、なかなか分かるじゃん おっちゃんは分ならず屋だから、ぼくとしては嬉しいかな」

「そうですか。でも、古楽“ちゃん”はやめてくださいね」  
極上の笑みで振り返った古楽が言う。

ソファに横になっっていた森寄には背もたれが死角になって顔は見えなかったものの、言葉の端々から、そのおぞましい感情は読取れた。

「俺もおっちゃんはやめてほしいんだが……」

「何だよみんな！ ぼくがせっかく考えたニックネームなのにさ。だったら古楽ちゃんは“こぐらん”で、おっちゃんは“御ちゃん”にするぜ？」

「じゃあ森寄は“もっくん”ですね」

膨れ面でうなだれる森寄に、仕返しの如く付けられたニックネームだが、その反応は、古楽が望んだものではなかった。

「いいねー、もっくん！ なんか一気に親しみわいた感じ？」  
想像外の森寄の言葉に、古楽は愕然がくぜんとする。諦めたように再び外を眺めた。

「棗さん、もうそろそろでしょうか」

ここにいる三人と、棗を含めて、神の代行人は完成する。今彼等は、集大成になりつつある作戦の運びを、棗に求めていた。

四人は同等の関係だが、その中でも皆をまとめてくれるのが棗だ。「なつつんで、昔パートナー組んでたシスターを迎えに行っただんでしょ？ そんななお優しい方だったんだ？」

明らかに皮肉を込めて、森寄は言った。ちらりと横目で、御が彼を見る。

「昔なんて程じゃない。たった一年前まで、だ。……所詮兵器だとあいつは言っていたが」

「だろうね。なつつんのそういうとこ、ぼく好きなんだよね」

「森寄も、シスターは所詮兵器だと言うの？」

古楽が割り入って訊ねると、森寄は悪びれもなく答えた。

「兵器は兵器、でしょ。まあ、禾夜かやにそんな気持ちを抱いたことはないけど」

それを聞いた途端、御は再び顔を前に向けた。

兵器は、兵器。

神の子をモノと思うことができない御には気持ちよくない言い回しだが、せめて自分のパートナーだけでも人と見ることが出来るなら、森奇は棗よりいくらかマシだった。

そうこうしているうちに、棗が帰ってきたと、三人のうちに連絡が入る。

彼等の作戦が、刻一刻と決行に近づいていた。

城に戻った砂乃は、一旦棗の部屋へと入れられる。

自分が彼と別れた一年前と、その雰囲気は変わらなかった。

「僕はこれから用事があるんだ。お前は此処で待っていてくれな」  
それでも、砂乃が棗の部屋に入るのは珍しいことだ。かつて砂乃が自室として使っていた部屋もあるのだが、果たして今はどうなっているのか、彼女には想像もつかない。

「はい」

笑顔で返した返事は彼に届いたのか、棗は颯爽さつそうとその場を去って行った。

\*\*\*

真っ白な空間に、亮樹は一人佇んでいた。

一寸の狂いもないほど白い空間では、右も左も、前も後ろも、まして上も下も分からない。

だけどそれが当たり前なのか、彼がその景色をおかしいと思っている様子はなかった。

ふと、目の前だけが色を変える。

それは色が変わったと言うよりは、巨大なスクリーンが現れたという方が正しかった。

呆然とそれを眺める亮樹。そのスクリーンの中にも、姿かたちの同じ青年の姿が映る。

ああ、俺だ。

まるで一観客のように、彼はただ映写幕の中の自分を見ている。中の自分は、心なしか今より幼かった。辺りは雨で、視界がぼやける。

その日亮樹は、連日の大雨で、家よりも少し上にある土砂が崩れないか心配で、山道さんどうをひたすら歩いていた。

風も強く傘は使い物にならない。仕方ないと、雨具を適当に羽織って山を目指す。その途中に、うずくまる小さな影を亮樹が見つけたのは、おそらく偶然だった。

おい、どうした？

声をかけたのは好奇心だ。こんな雨の中、うずくまっているなんて、頭がおかしいか具合が悪いのどちらかしかない。

髪が長いから少女だろう。

浴衣姿のそれは、もしかしてこの世のものでは無いのでは、とも亮樹に想像させた。

しかし振り返った姿に、彼は愕然がくぜんとする。

今にも泣きそうに震える瞳、この雨の中を歩いたのだらうと想像できるほどはだけた衣装。ではなく、胸元の一点に、亮樹の視線は集中した。

十字架に絡みつく、逆さ龍の刻印タトゥー。それは神の僕として召喚された、神の子の証シスターであり、禁忌を犯して樂園を追放された、墮児ロウチルドの証であり、融合人間の証だ。

あなた、だあれ？

無防備な少女の姿は、ただ父を殺した仇の仲間としか、亮樹の瞳には映らない。

此处で……何してる。

明らかな憎悪を含んだ言い方だと、自分でも分かった。しかし目の前の少女は、怯えた様子もなく、ただ辺りを見回しては、僅かに首を振って呟く。

わかんない。

ゴッド派の人間がいるところじゃない。ここはナチュラル派の領域だぞ。

あなたは……ナチュラルハ？

ナチュラル派　その意味を、この少女は本当に理解しているのだろうか。軽く首を傾げるその様は、本当に無防備そのものだ。

……一人か？

そう。……うん、そう。

ふと、少女の瞳が伏せられた。悲しい雰囲気漂った、と亮樹が思う。

あれは、同情だったのだろうか。スクリーンの中の自分が、出会った少女に羽織っていただけの雨具をかけてやっている。その映像を見ながら、亮樹はただただ冷静に考えていた。

どうして俺は、あの少女を助けようとしているのだろうか。あれは、父さんを殺した人間の仲間。こうして考えれば、ただの敵なのだ。名前も知らない少女。けどどこか懐かしい、そんな気がする。

「あいつは……誰だった？」

俺は彼女に同情したのだろうか。一人きりだと言った少女が、両親に先立たれた自分と重なったのだろうか。

そうだったのかもしれない。初めは。

だけど関わりを持って接していくうちに、それとは違う感情が芽生えていたと、そう思えた。

まるで、小さな子供が母親に甘えように自分の後をついて回ってくる少女が、疎ましく感じながらも可愛かったのだ。

うちに来いよ。みんな歓迎してくれるから。お前、名前は？

スクリーンの中の亮樹が少女に問い掛ける。小さく答えられた声は、雨の音に掻き消されて、こちらの亮樹にはよく聞こえなかった。

同時に、真っ白だった世界がぼやけ、亮樹は視界を失った。

聞こえなかった声。だけど現実へと引き戻されていく間に、記憶は戻り、少女の名前も頭に浮かぶようになっていた。

そう、あの子の名前は

「砂乃<sup>すなの</sup>……」

次の世界は薄暗く、濃い灰色が視界を占めた。

だけど今回はわかる。ここは自分の部屋で、目に映るのは閉められたブラインドから漏れる薄明かりをまとった天井。

今までいた世界は、夢だ。

その証拠に、ゆっくりと体を起こせば、見慣れた自分の部屋が視界に入る。

暗がりでは色はないものの、ベッドの左側に置かれたデスク、目の前にあるジーンズ地の小さなソファは、間違いなく亮樹の部屋だった。

砂乃と出会ったときの　　というか、過去夢を見ること自体初めてだ。

りょーじゅは、すなのにいてほしい？

切なそうにこちらを見る様は、まるで止めてほしいようだった。でも、亮樹はそれを拒絶したのだ。

もし自分が砂乃なら……ビュー・ガーデンに残ることを選んだだろう。だけど彼は砂乃ではない。柏葉亮樹なのだ。亮樹に砂乃の気持ちは分からない。彼女の言葉しか、彼女の気持ちを知るのに信頼できるものはなかった。

だけど……本心は……。

すなのにいてほしい？

「……うん」

言えるわけなど、なかった。

彼女が自分で、自分の意思で決めた言葉でなくては、自分は頷いてはいけない。

それが、彼女を自由にするという事だ。  
額に手を当て、彼はそのまま頭を垂れた。

#### 4・願うは自由か幸せか

「爆破？ 南の離れ島を？」

その日は朝から、モニタールームに皆が集まっていた。

亮樹と滋と緒叶。そして見慣れぬ男が一人。

彼は獅堂雅しゅうどうといい、同じビュー・ガーデンの、滋の知人だという。身なりもしっかりし、髪型もオールバックに整えられた獅堂が、とても滋と同じ年には見えなかった。が、同じ年らしい。

「ああ。どうやらゴツド派の考えている領地拡大の方法は、南の離れ島を爆破させるというものらしいんだ」

亮樹の投げかけた疑問に、答えてくれたのは獅堂だった。見た目よりも声音は優しいが、声質はやはり野太く低い。

「あそこにはナチュラル派の本部がある。やつら、まずはそこを潰す気か」

「ナチュラルは軍事集団だから、上の人間がいなくなれば、乱れると思っただんでしょね」

滋と緒叶も、ついで意見を述べる。

「でも、それがビュー・ガーデンに知られば、面倒になることは考えなくたって分かるんじゃないの？ なんで奴らは、そんな面倒な橋をあえて渡ろうとするんだよ」

さらりと述べた疑問だが、それはもつともな意見だ。ナチュラルでもゴツドでも、彼ら派閥にとって、ビュー・ガーデンほど厄介な集団はいないだろう。

「そうだ、だから、今回は神の代行人が直々にお目見えすると噂が立っている」

「ああ、神の声が聞こえるってあの？ それが何かやばいの？」

「そんなものは何の根拠もない話だ。あいつらの本質は、フューズを使うという事」

獅堂を抜いた、三人の背筋が強張る。

亮樹以外は、そんなことももちろん知っていたが、今の言葉に再び考えさせられたのだろう。

砂乃は、この作戦に利用するために連れて帰られた？ と。  
そんなことは信じたくない、亮樹はごまかすように頭を振った。  
ゴツド派は味方ではない。だけど、味方でないから嫌な奴だらけだなんて、そんなことはもう、思いたくないのだ。

「……で？ 何か阻止する作戦があるんだろ」  
振り絞って出した声だったためか、おのずと声量が少なくなる。

「ああ。何人かのビュー・ガーデンから協力が取れた。近々奴らが動く事は確かだ。お前たちにも協力してもらいたい」

「もちろんだ。出来る限りのことはするさ。此処でナチュラル派に滅ばれちゃ、いままでの苦勞が水の泡だからな」

そう答えたのは滋だが、亮樹も緒叶ももちろん同じ気持ちだ。

「ああ、そうだな。じゃあ早速だが」

ゴツド派の策略を阻止するための作戦を簡単に述べると、獅堂は上条家から去っていった。

彼の姿が見えなくなるなり、亮樹も自分のバイク型飛行機体マイクへと向かう。一足先に、亮樹には仕事が与えられたのだ。

「気をつけてね」

お互いに背を向けた状態で、緒叶が声をかけてくる。

「……」

「何、黙ってるの？」

「緒叶からそんなこと言われるとは思わなくてさ。あんだ、俺を軽蔑してたんじゃないの？」

「亮樹くんて……、実は執念深いのね」

「冗談だよ」

苦笑しながら振り返った先には、同じく少しだけ顔をこちらに向けた緒叶の姿があった。

「……気をつけて」

「サンキュ」

一言返すなり、ヘルメットをかぶると、亮樹はマイブに乗ってエンジンのかけた。

勢いよく吹かした機体は宙を走り、颯爽と緒叶の視界から消える。彼が向かうは　ゴッド派本部。最北、北の離れ島。

\*\*\*

コンコンと、咳込みながら砂乃は窓を開けた。

此処は古城の最上階だ。島の端　海までもが見渡せた。

「すごーい……」

海を渡ることとはしばしばあっても、こうして全体を見渡す事はそうはない。その壮大な風景に、彼女は思わず感嘆の声を漏らした。

棗と共にゴッド派に戻ってきてから、早一晚が過ぎた。

入れられた部屋はかつての自分の部屋ではなく、最上階の、知り限り十年以上誰にも使われてはいない部屋。

何となく息苦しいその部屋で、棗に渡された毛布をかぶって眠った。

フユース

融合人間であり、まして風である砂乃は、寒さなど感じないよういくらでも調節できる。それでも咳が出るなんてことは、部屋の空気が悪い事しか理由にならなかった。

もちろんそれは掃除を怠っていることが原因なのだが、そんなことに気が回るほど、砂乃は賢くはない。

空気が悪い部屋だ、となんとなく思うくらいだ。

「ナツメサマ、今何してるんだろうっ」

大好きな主人のことを考えて過ごす時間は、何とも幸せだ。窓辺に腕を置き、その間に顎を乗せた。

「このけしき……見せてあげたいな。みんなにも」

一人で呟く声も、調子のいい弾んだ音に乗せられる。

「おかのやりよーじゅも、アジトにこもってばかりだから、きつと喜びそう。シゲさんは……よく一人でお出かけしてるから、もしかしたら見てるかな？」

目を細めながら、視線をうつろにする。壮大な景色も、もう意味を持たない。

「りよーじゅ、何、してるかな。すなのこと、少しでも考えてくれてる……かな」

寂しい。さみしい。サミシイ。

棗が迎えに来てくれるのを、ずっと待っていた。今も、彼がいてくれるから、きつとすぐ亮樹達のことなんて考えなくなると思っていた。

でも違う。今も、彼の、亮樹達のいない一瞬一瞬がさみしくてしようがない。たとえ、自分が嫌われた存在だと気付いていても

……。

長い年月誰にも開けられることなかった扉は傷み、開けようとするたび悲痛な叫びをあげた。

今回もまた、痛々しい軋みの音を響かせながら、その扉が開かれる。

棗から、用があるときは自分から行くから、決して部屋から出てはいけないと言われていた。

だから扉を開いた主は、必然的に棗だと感じる。

「ナツメサマっ！」

自分が一番さみしさを感じている時に来てくれたのが嬉しくて、勢いよく扉へと振り返った。

しかしそこにいたのは、棗よりももっと大きな男性。

角刈りの黒髪、線のように細い目。唯一棗とかぶるのは、着ている衣装だけだ。

「オンサマ……」

神の代理人の一人、御。それが彼の名前だ。

「まさか、こんな部屋に入れられていたとわな」

「こんな部屋？ 海が見えてすてきです」

屋敷内でも、他とないほどにみすばらしい部屋だ。そこに入れても笑っていられるのは、知識が乏しいからこそだろう。

「オンサマ？ すなのに何か用ですか？ それとも、ナツメサマの言伝ことづてとかですか？」

それは訊ねたというよりは、願望がこもっているように聞こえた。「いや……お前の姿がないものだから、どこに入れられているのかと探していた。かつてのお前の部屋は、もう」

言いかけて、口をつぐむ。出来るなら、この無知な少女を傷つけたくはなかった。

しかし無情にも、少女はまっすぐにこちらに目を向けてくる。

「砂乃すなのの……部屋？」

「いや、何でもなし。腹は減ってないか？ 此処は寒かったんじゃ……と、おまえは寒さを感じないようにできるのか」

「お腹も、空いてないです」

笑顔でそう答えているのに、何故だか砂乃が悲しんでいるように見えた。

不思議に思っただけ目を凝らした時、その答えに気付く。

どんなに砂乃が笑っても、その瞳だけは、決して笑ってはいなかった。此処はこの少女にとって、幸せと感ぜられる場所ではないのだ。それに気付いても、御はただ顔をしかめることしかできなかった。

「……棗が、好きか？」

聞いてから、今少女にこれを探ねるのは酷だと感じられた。罪悪感にかられて、彼は目を逸らす。

「？ もちろんです」

首を傾げながらも、砂乃ははっきりと答えた。

「ナツメサマこそ、すなのの一番に信じる方。ナツメサマこそ、一番にすなのを信じてくださる方です」

「本当にそうか？」

「え？」

大きく開かれた瞳を、御はまっすぐに見た。これから起きる事は、どんな結果になろうとも、この少女を傷つけるだろう。

「ただ、その答えだけは、どうか自分で見つけてほしい。」

「お前が信じる者は、信じてくれる者は、本当に棗だけか？ いや、むしろ棗は、本当にお前の信じられる者なのか」

自分を一心に見ていた砂乃の瞳が、不意にそがれて床を見つめた。浴衣のすそを、くしゃくしゃに握りこむ。

「え…… あ、そんなこと……聞かれても」

「ざわざわと、砂乃の心に不安が走った。」

その様子に、御は一瞬声を失うが、なんとか搾り出したように言葉をつむぐ。

「お前は、本当に信じられる者を、見つけるべきだ」

それ以上は何も言ってやれる気がしなかった。逃げるようだと自分でも思ったが、長居は無用と判断して部屋を出る。

扉を閉める直前、「オンサマ……」と呟く砂乃の声を聞いたような気がした。

「本当に……信じられる、者？」

それはナツメサマ。彼がそう言ってくれたし、自分でもそうだと思った。

「ただ、あたしがこの一年間、信じてきたものはなんだった？」

「ナツメサマとの約束。」

「ナツメサマとの思い出。」

「……そして、」

「りょーじゅの言葉。」

「おかなのやさしさ。」

「シゲさんの、ビュー・ガーデンの夢。」

「お前が信じる者は、信じてくれる者は、本当に棗だけか？」

「そんなの……」

お前は、本当に信じられる者を、見つけるべきだ。  
「……わかんないよ……！」  
どうしようもなくて、砂乃の声は、ただ震えた。

\*\*\*

大きな古城の周りは、樹林に囲まれていた。接近戦を得意とするナチュラル派の侵略を抑えるためだろうが、こちらとしては、バイク型飛行機体を隠すのにいい環境だ。

侵入者を見つけ知らせる機械もいくつかは設置されているようだが、その死角に位置するのも難ないことだった。

ヘルメットを外すなり、頭を左右に振る。

汗が数滴、宙を舞った。

「ふう……。あつちい……」

アジトから此処までは、マイブで約六時間。出発は昼間だったのに、現在の辺りはすっかり色を無くしていた。

「さすがに此処まで来るのはきついな」

膝に手をつけて腰を屈めれば、亮樹は疲れた体を癒そうと、数回深呼吸をした。

しばらくして落ち着いたところで、再びあの古城を見上げる。

「シューシューシュー」  
「だけど、此処が神の住処。神の代行人のアジトか……！」

時計型通信機の時計部分は開くようになっていて、そこには耳栓のような小さな受話器が入っている。それを耳にはめ込むと、亮樹は通信を滋のパソコンにつないだ。

「ああ、シゲちゃん？ 俺、亮樹だけど。うん、うん。今着いたよ」  
探知機に探られないよう辺りを見回しながら、ゆっくりと歩む。

「ああ」  
そうしながらも、一文一句聞き逃さないよう、滋の言葉にも耳を傾けた。

「あいつらには、なるべく会わないようにするよ」

\*

「ナツメサマ」

機械的に発せられる声に、自室の壁に寄りかかっていた棗はふと扉へ目をやった。

そこには肩にやっとなついたくらいの短い髪、前髪はそろってはいないものの、古い言い方をするならば“おかつぱ”の、砂乃よりももつと幼い少女が、何の感情もなくただこちらを見ている。

「ああ、好桃か。どうだい？ 修業は上手くいっているかい」

「はい」

答える声にやはり感情はなく、ただ淡々と、自分の言葉に頷く少女の肩に手を置くと、棗は言葉を続けた。

「お前は、僕が今まで出会って来たシスターの中で一番神に近い。神に近い強さを持っている。期待しているよ」

「はい」

そつと手を離し、数歩後ろに下がる。

「それじゃ、もう行ってもいいよ。御のところへ行けば、次すべき事は分かるはずだ。……ああ、それと、もう僕の部屋へは来ないよ  
うに」

「……はい」

消え入りそうな声で返事をし、好桃は棗の部屋からゆっくりと出た。

好桃に感情など持たないよう指導させてきた棗には、あの言葉に少なからず少女が傷ついたなんて、夢にも思わないだろう。

今棗と会話した、十歳前後の少女。彼女こそが、棗の現パートナーだった。

好桃の足音が消えたのを確認すると、棗はソファに荒く腰掛け、大袈裟に足を組んだ。

お前は一番神に近い力を持っている。

たとえシスターといえど、生きているんだぞ。

不意に思い出した自分や御の言葉に苛立てば、机に用意された淹れたての紅茶を肘で滑り飛ばした。激しい音を立ててカップが割れ、湯気をたてた液体が床に広がる。

「シスター？ 馬鹿馬鹿しい。何が神の子だ。所詮は兵器。僕たち人間に敵うわけでもないくせに。ちよつとした強さがあるくらいで粹がる連中がいるんじゃ、世界は変えられないな」

神、神といくら嘆いたって、神様は人間に何もしてはくれない。だから神は信じるのではなく、誰かが成り代わって世界を支配していかなくてはならないのだ。

棗が不機嫌の絶頂にいるその時、彼のシーティーシーピーが着信を知らせた。

「棗」

「俺だ」

現れた映像に映る人物は、名乗られなくても十分棗の見知った人間だった。

「ああ、御か。どうした？」

用があるから連絡してきたのだろうに、御はいくらか話すのを戸惑っていた。

じきに、意を決したように声を発する。

「お前のシスター……名は……砂乃、だったか？ あんな所に入れておくのはどうかと思うぞ」

「ふっ、馬鹿馬鹿しい。いらなくなったモノを、ゴミ箱に捨てるのは当然のことだろう？」

「棗」

「何、機嫌を損ねたかい？ だけど、僕の言葉は間違っているかな？」

のけぞるように腰を前へ出すと、背中を軽く反らした。

不機嫌さに拍車がかかる。

「あんなモノは兵器だ。戦えなくなったモノは何の意味ももたない。

それとも君は、戦えなくなったあの娘に同情して、傍に置いておけとでも言うのかい？」

「だが……」

「だがじゃないよ。僕はそんなのごめんだね。たとえ使えるモノだつて……。生きている？ 馬鹿馬鹿しい。部屋にも入れたくない。考えただけで……。虫酸が走る！」

グツと握りこんだ手に力がこもる。じわりと、掌が熱くなるのを感じた。

「……分かった」

本当は全然分かってなんていなかったが、自分じゃ今の棗めいそうの思いを断ち切る事など出来ないのは分かっていた。

これ以上話していても、きつと埒があかない。

納得したらしい御おんの言葉に、少なからず満足すれば、棗は拳を解いた。長い爪の跡に血が滲んでいる。

「どうするつもりだ、あの娘」

「次の作戦にでも使ってあげたらどうだい？ せいぜい、捨て駒として」

「冷たい男だな」

「フン。優しくしてやる必要のないものに、優しくしてやるつもりなどないね」

「よく分かった」

今度は意見を述べるのではなく、ただ棗の答えを聞き、御は通信を切った。

\*

大きな屋敷の内部に入ると、後はただ目的の部屋を目指して亮樹は歩いた。

柱の影から誰もいないことを確認して、再び前へ進む。

「にしても……。この地図分かりづれえ」

滋が色々な情報を元に書いてくれた内部の地図。物の配置は間違っていないようだ、絵が下手すぎて分かりづらい事この上ない。文句言っつな、という滋の声が受話器から聞こえたが、そこはあえて、聞こえないふりをした。

地図と廊下を順々に見回し、少々焦りながらも歩み続ける。

と、楽しい笑い声が耳に届き、亮樹は慌てて死角となる壁に身を隠した。

そつと覗いた先には、同じような背格好の二人の男女が歩いている。

男の方は、十代半ばくらいの少年で、幼さを残した声と、らくだ色の、顔の輪郭に素直に流れる髪が特徴的だった。

女もまた少女で、若苗色のボブカットが目をついた。格好がTシャツに短パンというラフな服装のせい、髪色だけが映えている。

少年は格好から、神の代理人であることは何となく分かった。

少年が小さくも響く声で、少女に話し掛ける。

「禾夜、待てつて。あんまり好き勝手に歩き回るなよな。なつっんに見つかったら、またひどい目にあうぞ」

「カヤ、ナツメ嫌い」

ふと楽しいな笑いを絶やすと、禾夜と呼ばれた少女はふいとそっぽを向いた。焦ったように一度目を見開いたものの、辺りを見回して粟の影がないことを悟れば、少年は安堵の息と共に頂垂れる。

「……その呼び方もやめろつて。一応みんな様付けで呼んでんだからさあ」

そんな少年の言う言葉も、まるで聞こえなかったように禾夜は言葉を発した。

「カヤ、モリサキは好き」

「……森寄様」

不服げに言う森寄を見れば、何故だか満足げに禾夜は笑った。

「様つて感じじゃないもん、モリサキは。ねえねえねえねえね、次はいつ行くの？」

「次は、三日後だよ。三日後に、此処とは遠くはなれた、南の端の島へ行く。そこで、おおいに暴れられるよ」

「楽しみ。カヤ、人が死んでくるところとか見るの、大好き！ だって何か楽しいもん。こう……カヤの手で苦しんでいく人とか、すこいよね！ カヤがやっているんだよ、信じられる？」

人の死に様を見て興奮したように身振り手振りをしながら、禾夜は言葉を紡ぎ続けた。

その様子に、森寄はつい笑みをこぼす。

「くくつ。本当禾夜は好きだよなあ。でも……、おっちゃんが聞いたら怒りそうな話だけだよ」

神の子を殺人口ボットのように人殺しに慣れさせること。御はそれを嫌い、よく自分達と口論になっている。

「オンは……、よく分かんないけど、カヤのこと睨むから好きじゃない。ナツメもオンも……なんか冷たいよね？」

「ああ……分かったから。もう寝るぞ禾夜。ほら、部屋帰れ」

もうじきこの場を棗が通るのを、森寄は知っていた。変な危害を加えられる前に、禾夜を此処から離れさせようと思う。

「うん！ おやすみー、モリサキー」

まるで無知な少女のように大きく手を振ると、禾夜は角の亮樹に気付かず通りを走り去った。

同じく森寄も、踵を返して今来た道を帰って行った。

再び静寂の戻った廊下で、亮樹は一人怒りに震える。

あの少女は融合人間だろうか。分からない、だけど、確かにあったのだ。

左肩に、十字架に絡みつく逆さ龍の刻印が。

カヤ、人が死んでくるところとか見るの、大好き！

「……人が死ぬところ見るのが……好き？」

グツと握り締めた拳を、力任せに壁へ叩きつける。

それでも、痛いのは手より胸だった。

「バカじゃねえのか？ 有り得ねえだろ！ 苦しむ姿が好きだって

? くさってる……。そんなの絶対くさ<sup>ぜ</sup>ってる!」

思うがままに叫んだ。誰かに聞かれたら、とか、そんなことを考える余裕も、もはやない。

『亮樹、落ち着け』

ふと耳に響いた滋の声に、自分の立場を思い出させられるが、一度爆発した憤りは、そう簡単に収まってはくれなかった。

「分かってるさ、だけど……。くっそう!」

人を殺す事に何の疑問も持たない。あんな集団に、亮樹の父は殺されたのだ。

それに気付かされて、どうして落ち着いてなどいられるだろう。

『亮樹。目的を見失うな。見つかるぞ』

「……分かってる」

事実、彼は分かってなどいなかった。頭が混乱して、もうまともに考える事もままならない。

「けど……。だけど……!」

“ だけど ”、なんだい

ハッと、亮樹は振り返った。そこには白色長髪の見覚えのある青年が、怪訝な目で立っている。彼は砂乃のパートナーの……。そう確か、棗、だ。

あまりに気狂いしすぎて、棗が近づいてきていた事に、亮樹は気付けなかったのだ。

得意の冷たい口調で、棗は呆然としている亮樹を皮肉った。

「こんなところで何をしているのかなあ。柏葉亮樹君」

「……あなた、砂乃の……?」

砂乃のパートナー。つい口をついて出そうになった言葉だが、言い切る前に、棗が全く桁違いな言葉を続ける。

「実におかしな話だ。何故、此処にビュー・ガーデンの君がいるのだろう。……。それとも、ゴッド派に派閥変えかい?」

「ふざけんな! お前らがナチュラル派の……。ナチュラル派の領域を侵そうとしているから、だから……。っ!」

『亮樹！』

そこで亮樹はハツとする。頭に血が昇って事を冷静に考えられないからといって、これは立派な情報流出だ。

「なるほどね。結構簡単にビュー・ガーデンは、手の内を明かしてくれるんだ」

「っ」

最悪だ。此処まで口が軽いと、もう怒りを通り越して焦りしか生まれない。

と、棗が自分のシーティーパーを持ち上げると、彼にしか使えない手の動きで、通信をつないだ。

「好桃、すぐに僕のところにおいで。……敵だよ」

最後の部分だけ言葉が冷たく響いたのは、その単語が、呼び出した人物を一番急がせるものだからなのだろう。

だけど亮樹が気になったのは、言葉よりも、棗が呼び出した人物だった。

「すもも……？」

亮樹を倒したいなら人間の手を染めるまでも無い。此処にいるのは神の代理人。代理人とは名ばかりだが、事実フューズを使う連中だということも亮樹は獅堂から聞いたばかりだ。フューズを出してくれば、生身の亮樹なんて、きつとひとたまりも無いだろう。

ならば今呼んだ好桃がフューズと考えて妥当だが、亮樹が素直にそれを受け入れられないのは、棗のパートナーは砂乃のはずだからだった。

そんな彼の思いに気付いたように、棗は厭味たらしい笑みを見せる。

「五分も経たないうちに彼女は来る。優秀だろう？ 僕の“現”、パートナーは」

「“現”……？ 砂乃はっ？」

勢いをつけて一步步み出ると、答えを待つように肩で大きく息をした。

「あんな戦えないもの、何の意味もないね。他の神の代行人たちは、なぜかシスターに色々なことを教えるが、僕は戦う事以外をシスターに教える必要はないと思う。だからあんなふうに関心を持ってしまったモノは、何の役にも立たない、ただの娘……いや、あんな研究の成功物体なんて、人間とも言えないね。単なる老廃物だ」  
「っ、てめえ！ 何のために……だったら、何のために砂乃を連れて帰ったんだ！」

憤った亮樹は、思い切り棗の胸倉に掴みかかった。

しかし青年は、壁に押しやられても、涼しい顔つきでこちらを見ている。

「決まっているだろう。次の作戦に、君たちの手の内にシスターがいるのは面倒だからさ」

ぱつと亮樹の手を振り払い、棗は乱れた襟元を整える。

「ビュー・ガーデンは砂乃を失った以上、皆ただの人間。もう怖いものは何も無い。他に、質問はあるかい？」

「……っ、返せよ、だったら、砂乃を返せ！」

「返せ……？ 砂乃が僕の元にいるのを望んだのにかい？」

っ。亮樹は息をのんだ。

砂乃の望む世界に、彼女を居させること。それが彼女と出会ったときからの、亮樹の一番の願いだった。

だからこそ、彼は今悩む。傷付いてでも、少女を望む場所にさせるべきか、例え望まない場所でも、少女を連れ帰るべきか……。

「君は砂乃を手放した。その君に、あの娘に戻って来いと言えるのかい」

「それは……」

『亮樹乗るな！ これは罠だ！ 時間をとらせる為の……フューズが来る前に、早く逃げろ！』

「……」

『何を勘違いしているんだ。俺たちが望んでいるのは、お前がそこで、フューズたちに殺されることじゃない！ たとえ……何の情報

も手に入れられなくなつて、生きて帰つて来い！ それが俺たちの、お前に望む第一のことだ！』

「シゲちゃん……」

小さく、小さく亮樹は、その名前を呟いた。

胸に暖かいものが込み上げる。失う分だけ得るものが、亮樹には必ずあつた。

けどそんな思いも、この卑劣な神の代行人は簡単に打ち砕いてくれる。

「君の望みは分かっているよ。三日後、僕たちがナチュラル派の領域を侵略するため、南の本拠地を攻撃する。その詳細情報がほしいんだろ？ けどまあ、どこを探してもそんなものは出てこないよ。情報は全て、僕たちのシーティーシーピーの中に入っている」

スツと、自分のシーティーシーピーを指差して、棗は得意げにそれだけ言った。

しかしそれは、亮樹にとって驚愕おどろの事実だ。

「なっ？ シーティーシーピーは、あくまで時計型の通信機だろ？」

そんな機能、あるなんて聞いたことないぞ！」

「ふん、君のような元ナチュラル派には分からないだろうけど、本来科学は、ナチュラル派よりゴッド派の方が進んでいる。このように機械をどんどん進化させることくらい、僕たちには造作も無い」  
確かに融合人間の実験を成功させたゴッド派なのだから、その理屈は正しいだろう。

そのまま一度時計に目をやると、じきに好桃が来ると思いながら棗は再び口を開いた。

「だけど……君は実につまらない男だつたよ。前に来たナチュラルのあの男の方が、もう少し楽しませてくれたね」

「あの男……？」

亮樹が首をかしげる。突然降つてかかつて来た話題に、全く着いていけない。

そう思つたのは一瞬だつた。

「分かっているだろう？ 君にはもうとっくに情報が来たはずだ。……大切な友が死んだと」

ドクンと亮樹の胸が鳴る。案外あっさりと、彼はその名を口にしていた。

「槇那……？ お前、槇那のこと知ってたのかっ？」

その疑問にも、棗は冷静に、そして残虐に答えてくれる。

「当たり前だろう。砂乃の傍にいた人間のことはみんな調べてある。君の父親のこと……上条緒叶のこともね」

上条緒叶。棗がその名をわざわざ強調させて言ったのは、亮樹が今一番聞きたくない話は何なのか、全て予測がついていたからだ。

「緒叶……？」

だけど亮樹は、緒叶の名に首を傾げることしかしなかった。これから棗が話す事実がどういうものなのか、瞬間的に気付く事が出来なかったのだ。

「上条緒叶。彼女の過去を、君は知らないだったね」

真実を話して傷を舐めあう関係になりたくないんだ、緒叶は。それはお前も同じだろう、亮樹？

滋の言葉がよみがえる。

緒叶にも悲しい事があるんだよ。

気をつけて。

悲しい事、それは、俺にもあるよ。緒叶に話せていないこと。シゲちゃんしか知らない事実。

だから、これを聞いたら、俺も緒叶に話さなくちゃいけない。緒叶に、とか、そんなんじゃない。

俺には出来ないんだ。この傷を掘り返す事が。

「やめる……！ 言うな……！」

「彼女はね、過去にゴッド派の男に嫁ぎ……」

「言うな！」

「その男との間に出来た子供を……」

「やめろっ！」

「神の子にしようとしたんだよ」

亮樹は奥歯を噛み締める。

聞いた。聞いてしまった。

緒叶の傷を。

「まあ、実験は失敗。子供は死んでしまったけどね」

さらりと言う青年に殺意が芽生えた。それでも、一心にその感情を押さえ込む。

「命を弄んでしまったと、あの女は思っているだろう。そんなことをしているゴッド派の元に嫁いだ自分が、きつと恥ずかしいだろう……君は、上条緒叶を同情の目でしか見れなくなる。かわいそうだね彼女も。何も知らず自分の傍にいてくれる人間が欲しくて、君を傍に置いておいたのに」

かわいそう、それが果たして、棗に言えたことだろうか。彼がこうして今緒叶の過去を話さなければ、亮樹がその真実を知るのは、少なくとももう少し後だった。

いや、それが自然な流れで、亮樹は緒叶の口から、自分自身も過去を話せる様になったときに、お互いに腹を割って話したかったのだ。

それを、この男が壊した。此処から無事に帰れても、亮樹は自分がビュー・ガーデンに派閥変えするまでの経緯いきさつを緒叶に話さなくてはいけない。だってそれが、自分達が“対等な関係”だということだ。

棗の目的は、恐らく亮樹の心に不安を持たせることだ。そうやってこの先の戦いを有利にする。

だけど、そんな手には乗るものか。

緒叶が自分の傷を忘れるために利用したくて、俺の傍にいてだつて？

そんなことは、

「違う。俺たちが一緒にいたのは、そういう意味じゃない！」

「だったら他に何かがある？ ビュー・ガーデン、アレは結局、どち

らの派閥も信じられなくなった、弱い人間の集まりだろう」

「違う」

自分の周りをゆっくりと往復する棗を、亮樹は睨んだ。

もう亮樹が惑わされていないと分かっただら、棗が次の作戦に移るまでは早かった。

冷静な表情を崩さずに、立ち止まるなり亮樹を凝視する。

「その点、だから彼は強かったのかもしれないね。麻生槇那。最後まで実に勇敢に僕に立ち向かってくれた。まあ、簡単にひねり潰してやれてしまったけどね」

その言葉は、落ち着きを取り戻していた亮樹の心を再び逆上させた。

槇那、彼は誰より自分を分かってくれた、大切な……大切な友だったのだ。

それを、こいつは、“こいつら”は、どこまで生命を軽んじたら気が済むのだろう。

「っ、てつめえ、ふざけんな……っ！」

拳が空をきった。しかしそれが棗に当たることは叶わない。

急に何かが飛び掛ってきたかと思えば、次の瞬間には腕に痺れるような痛みが走っていた。

「うっ！」

食い込む牙は、とても人間のものとは思えない。しかし目の前

それもかなりの至近距離にいるそれは、明らかにまだ幼い少女だ。フーフーと唸りながら、威嚇するようにこちらを睨む。

その金の瞳は、ただ自分を敵としか見なしてはいないようだった。「ジャスト五分。よく来たね、好桃」

性質が悪い。不意に亮樹がそう思ったのは、好桃と砂乃のイントネーションが似ていて聞き違えそうになったからだ。それが偶然かわざとなのかは、彼にはとても分からないが。

しかし、この少女が好桃か。

つまりこの少女も融合人間。それも砂乃と違い、風との融合なん

てかわいいものではないだろう。

ギリギリと、牙が腕に食い込む。

少女の口元に亮樹の血が溢れた。

かわいそうな少女。こうして人の血を見ても、心に傷の一つも植え付けられはしないのだ。

これが彼女らの運命だと諭されても、亮樹は納得なんてしない。

教えてやれば、少女達は心を持つことが出来るのだと、亮樹は知っていたからだ。

砂乃すなののように。

だけど今日の前にいる少女は、そんな思いも一変させた。

この眼、この威嚇のオーラは、まるで獣だ。他人は敵か味方でしかなく、今の亮樹は、少女にとって前者でしかない。

それでもまだ人間の姿を留めているだけ、この少女は手加減してくれているのだろう。

むろん、姿を変えるまでもない相手と見なしていることになるのだろう。

きっと本気を出したら、砂乃が風になるように、少女も融合したもう一方の姿になるはずだ。そしてそうなったら、本当に亮樹になす術はなくなることになる。

好桃すももがもう一度、フウツと鼻を鳴らした。

腕の痛みが一層増す。

血を溢れさせすぎたせいだろうか。頭が朦朧もうろうとする。

少女の目が時々四つに見えるときは、本当に頭を振りたくなつた。少しでも動いたら余計に深く歯をたてられるだろうと考えられただけ、まだ思考回路が働いていたかと安心する。

「その腕、食いちぎってやってもいいよ」

「フーフ、フーフ」

好桃が息をはく分だけ、深く牙が突き刺さる。このままでは、本当にその牙が腕を貫通するのではないかとも思った。

左手をパーカのポケットに突っ込む。

そつと隠されたナイフの柄を握った。

しかしそれを振りかざすのはためらわれる。こいつはフューズ。だけど、

一、人間だ。

それを容易に傷つけるなんて、亮樹にできるはずがなかった。

「離せ……！」

口で言っただけの相手ではない。

しかし亮樹は、此処へ殺生をしに来ているわけでもないのだ。

何度か舌打ちをすると、あえて好桃に見えるようにナイフをちらつかせた。

ほんの一瞬好桃の視線がナイフを捕らえたのを見逃さなければ、シュツとそれで宙を切る。

案の定、少女は素早くそれを避けてくれた。

タンツと、好桃の体が棗の前に着地する。

息も絶え絶えな亮樹とは裏腹に、涼しげな表情で少女は立ち上がった。

「ナツメサマ、テキ、クロス」

同じ調子で紡がれる三つの言葉。このまま此処には本当に殺されかねない。

「くっそ！」

一口に叫ぶと、亮樹はその場を走り去った。

「追え、好桃」

好桃とは違い、音はきちんとあるのに、単調で冷たく響く声で棗は命じる。

それを聞いたと同時に、好桃の体が四つん這いになり、颯爽と廊下を駆けていった。

亮樹は必死に走った。腕は血をたらたらと流し、鈍い痛みだけを残す。

「亮樹、落ち着け。ばれたからにはもう、内部の人間に全て情報が回っているはずだ。誰にも見つからずに逃げる事は不可能かもしれ

ない。だけど焦るな、焦るんじゃないぞ！」

滋の声が漸く耳に届いた。

本当はあのフューズに噛まれた時も、意識が朦朧としている時も、彼はずつと声をかけ続けてくれていた気がするのだが。

「……分かつてる。っ、でもごめん、シゲちゃん。緒叶にも……謝つて……」

『謝るのは……無事に帰ってきたお前だ。俺が緒叶に謝ったって、何の意味もない』

「……俺は、バカだったね」

『大丈夫だ。帰って来い、亮樹……』

優しい滋の声が、傷ついた亮樹の体を、心を、癒してくれる。

彼等のために、生きて帰ろう。そう思えば、痛みをこらえて、亮樹は一心に走った。

警報機が無残な音を響かせる。

「侵入者だ！ 捕まえるー！」

あつという間に下つ端の騎士達が集まってくる。

「あつちだ、見つけたぞ！」

大きな声が傷に響いた。何人いるのか、騎士の足音が多すぎて、どこからかの特定もできない。

「追えー！」

左からかと気付くと、パツと右に体を反転させる。長く続く廊下を何とか逃げ切りたかった亮樹だが、思いはむなしく、ぐいとその体をつかまれ、口を塞がれれば、無常にも暗い室内へと引き込まれてしまった。

## 5・居場所

「絶対に逃がすなよ！」

騎士の中でも偉い方の人間が、大勢の部下に向かって声を荒げる。それでももう、亮樹の姿を視界に収める者はいなかった。

「何処へ行きやがった！」

「くっそう！」

悔しげな声が、高々と廊下に響く。

「んーっ！」

口を塞ぐ大きな手に、亮樹は抗うように頭を振った。

しかし想像以上にその力は強く、攻撃する事もままならない。

口を塞がれた瞬間にシーティーシーピーの電源をさりげなく切れ、滋に冷静になれと諭してもらった事もできない状況だった。

「静かにしろ」

野太く響く声は、心地よいバスだった。

それでも相手が誰か分からず、まして敵か味方も分からないこの状況で、その声に心落ち着かせることなんてできない。

ふっと口を塞ぐ手を離されると、思ったより体が酸素を欲して息が乱れた。

言ってやりたいことは山ほどあるのに、やっと紡ぎ出せる言葉は少ない。

「あんたは……？」

ゆっくりと振り返る。すぐに危害を加えてこないから、もしかして味方なのでは、と、淡い期待が胸に立ち込めた。

だが願いは願いでしかなく、電気も点かない暗い部屋に、至近距離だから見えるその衣装が逆に目立った。

古代ヨーロッパの騎士を思わせる気高き風貌。

それを見た途端、亮樹は壁際へと一気に逃げ込んだ。

背中をとられないよう壁にしつかり張り付けば、ナイフを構える。  
「神の代行人！」

「落ち着け。俺はお前に、危害を加える気は無い」

そんな台詞は何を考えていても言えるだろう。危害を加えない。  
もし亮樹が彼なら、そう言って油断させたところを一気に攻撃するはずだ。

そう思えば、余計に身を固くすることしか出来なかった。

すると男は亮樹から離れ、壁とは反対の窓側へ近づいたかと思えば、ガラリとそれを全開する。

「此処は三階だが、下にはたくさん木がある。降りられない事もないだろう」

「は……？」

フツと肩の力が抜けた。こつちを油断させる作戦にしては、やらせようとすることに多少無茶がある。

「何だ、やつぱり無理か？」

「っ、無理なものか！ 何のために……俺がこの二年間、どれだけ鍛えたと思っただ」

「そうか、だったら……此処から逃げろ」

「……あんた、神の代行人だろ？ なんで俺にそんな事……。俺はビュー・ガーデン、敵だぞ！」

「ならば、正面から堂々と出て行くため、この部屋を出るか？ すぐに見つかって、殺されてしまうぞ。力では勝っていても、人数が集まればお前は不利だ」

たしかに人数だけでなく、この怪我も条件に入れば、亮樹が生きて帰れる道は他にない。

「だけど……、ここでそうやってあんたが俺を逃がしてくれるのも、畏かもしれない」

「信じる信じないは自由だ。俺はお前を留める気もない」  
それは下手に、自分は味方だ、と言われるよりも信憑性があった。いつしか握っていたナイフが腕ごと体の横に垂れている。そんな

にも自分は、この男の存在と言葉に翻弄されていたのだ。

「どうする。お前を庭に出さないよう兵士達は勤めている。外にはまだ、警備の人間は少ない」

「 教えるよ。どうして俺を、無事に逃がそうとするのかを」

男は何も言わなかったが、決して目をそらしたりもしなかった。

別に気まずいものがあつて何も話さないのではないらしい。恐らく、必要外は話す気が無いと、その意思を表しているつもりなのだろう。

「あんたは誰だ。あの棗つて奴の仲間なんだろ？ あんたも砂乃を

……モノみたいに見てんだろ」

やっぱり男は目を逸らさない。

答えが欲しくて、亮樹も彼をまっすぐに見た。

顔は分からない。だけど月明かりに照らされて、その格好は何となく分かった。

大きな体は、百八十センチはありそうだ。体格も、身長に比例して自分よりも遥かに大きく、ガツチリとしている。

そのシルエツトだけなら、どこか滋に似ていた。

「シスターは確かに兵器として創られた」

グツと、亮樹は奥歯を噛み締める。もしかしたら、彼なら自分の欲しい答えをくれるかもしれない。そんな淡い希望は打ち砕かれたかに思われた。

しかし、男の言葉はまだ続く。

「だが、彼女らは人間として育っているんだ。兵器としての役目も持っているが、人として育つ事も、決して忘れてはならない事だ」  
ぱつと、亮樹は顔を上げた。

月明かりの影になり彼の顔が見えないと言うことは、彼から亮樹の顔は、きつと丸見えなのだろう。

「俺を敵と思うか味方と思うかは自由だが、……もう一度言おう。

お前に危害を加える気はない」

もう言葉は出なかった。ゆっくりとナイフをポケットにしまうと、

亮樹は彼が開けてくれた窓へと向かう。

この人は、信じてもいい。

彼の言葉にそう判断して近づけば、漸くその顔がよく見えた。角刈りに狐目。やっぱり顔つきは、滋とは全然違う。

「あんたのフュー……じゃない、シスターは？」

ふと気になった事を聞いてみる。

「眠っている。隣の部屋だ」

「どんな奴だよ」

「普通の娘だ。あまり戦いには出さないようにしている。あいつが自分から戦うと言ったときだけ、戦わせる。兵器だって人間。自分の意思を持って戦う事が、彼女らの役目だと俺は思う」

「俺も、そう思うよ」

彼が視線を送る方向に亮樹も目をやった。

きつとそこに、彼が自分のパートナーの姿を見ているのだと思いつながら。

「でもいいのかよ？ 俺を逃がして。あの棗に知られたら……」

「構わん。何とでも言える。言い逃れが苦手なわけではない」

「へえ。でも、あんただって三日後のナチュラルを潰す作戦に参加するんだよな？ ナチュラルを味方だと思っているわけじゃないんだろ」

それはつまり、ビュー・ガーデンの味方でもないということ。

だったらいくらシスターがどうか言っただって、自分をこうして逃がしてくれる理由は何処にも無い。

別にもう、彼に理由を求めているわけでもなかったが、このまま別れるのにも名残惜しくて、気付けばそんな事を訊ねていた。「ナチュラルは敵だ。俺は、神を信じ、時には神に全てをゆだねる事も必要だと思っている」

「どんな風に」

「疲れた時、神に癒しを求める事……、願いがある時、神に叶えて欲しいと願う事、辛い時、逃げてもいいか神に諭してもらおうこと。」

人間は、人間だけを信じてはやってはいけない」

まるで子供に聞かせるようにやんわりと男は諭す。

そんな夢のような話に、亮樹は思わず笑った。もちろんそれはバカにしたわけではなく、予想外の言葉に困惑した上で出てきた笑みだ。

「あんた……それでも神の代行人かよ。そんな夢みたいな話、ゴツドでも一番下の、平民しか信じてないんだと思ってた」

少し考えたように下を向けば、男は表情も変えずに前に向き直った。

彼の真黒な瞳は、吸い込まれそうなほどに綺麗で、月明かりの下、ほのかな光を放っている。

ああこれが、純粋な人間の眼なのかと、亮樹はしばし見とれていった。

「俺はそんな世界を作りたくて、神の代行人になった」  
きっぱりと男が言う。

この人には、ちゃんと信念というものがあるのだ。

それは素晴らしい事だけど、それが正しいかと聞かれたら、亮樹は頷く事が出来なかった。

亮樹の信念も、また確かにあるのだ。

ふと視線を窓の外に向ければ、でも、と呟いて亮樹は言葉を続けた。

「神様だけが、全てかな？ あんたがそう言ってくれるの、めっちゃくちや嬉しいけど、自然も大事なんじゃないかねえの？ ……例えば、あんな達がこうして城の周りに作ってる樹林。これがなかったら、俺たちはこうやって酸素を吸うことも出来なかったかも知れない。木がなかったら、土が廃れる。土が廃れたら、果物や野菜は作れなくなる。そうになったら、世界が荒れる。あんたの言う神様を信じるのもすてきだけど、自然だって、負けたもんじゃないぜ」

まっすぐに目の前の壮大な景色を見つめる青年を、男もまた羨ましげに見た。

人は自分に持ち合わせていないものを羨ましいと思う。男も、青年も、自分にはない強さと信念に、互いが心惹かれていた。と、ふいに辺りが騒がしくなる。

「お前が中にいないことがばれてきたらしい。早く逃げろ」

「名前っ」

「あ？」

「俺は柏葉亮樹。あんたは？」

柏葉亮樹。さっき自分に砂乃の名前を出してきた時から、この青年がそうなのではと予想はしていた。

でも、改めて聞くとやはり納得してしまう。

砂乃の現パートナー。いや、状況的には元と言うべきかもしれないが、彼が少女に感情という宝を与えた張本人。

なるほど、と男はただ納得した。この青年なら人の心を動かせたのも分かる。

まして十四年間戦う事以外を知らなかった砂乃に、喜怒哀楽を教えることは、きっと自分には生半可に出来る事ではなかっただろう。けどこの、若くして色々な事を悟っている青年ならば、なんの苦労も無く、ただ普通に接する事で、砂乃に感情をつけてやれたに違いない。

亮樹の言葉を聞いていたら、男自身、自然と共有してみたいとも思えたのだから。

「……御とだけ、名乗っておこう」

ポツリと紡がれた言葉は、亮樹をまっすぐに見てはいなかった。必要外のことは話す気が無い。御はつい先ほどそれを態度で証明してくれたが、恐らくこれは、自分達にとって必要外の情報だ。

それを、僅かな罪の意識を感じながらも、御は自分に話してくれた。

「御ね。あんたいつか、ビュー・ガーデンに来たらいい。きっとあなたには、そっちの世界の方が合ってると思うから」

その言葉を最後に、亮樹は御の部屋を飛び出した。風の抵抗で腕

が痛んだが、何とか上手く木の間から着地する。

辺りを見回せば、確かに追手らしき人間は数人しかいなかった。これなら難なく逃げられそうだが、無情にも傷が疼く。

木がクツシヨンになってくれたのは間違いないが、片手を負傷していれば、僅かな衝撃が体に激痛を与える。

これは計算外だったな、と、自分の軽はずみな判断と行為を軽く後悔すれば、とりあえず見つかる前に逃げようと自分のバイク型飛行機体へ向かって、亮樹は走った。

\*\*\*

包ま<sup>くる</sup>っていた毛布からむくりと顔を出すと、砂乃ははあっと溜息をついた。

「つまらない……」

一人で過ごす一日はとても長い。退屈に耐えられなくて昼寝もしよっちゆうしたせいか、肝心の夜には、目が冴えて全く眠れそうになかった。

ナツメサマ、今日は一度も会いに来てくれなかった。

彼は忙しい身だ。離れる前も毎日を必ず共に過ごしていたわけではなかったし、あの頃は、それに此処まで悲しいや寂しいとは思わなかった気がする。

そんなこと思える余裕も無いほどに、砂乃の感情は制限されていた。

毛布から出れば、窓辺へと向かう。

閉められた窓にそっと手をつき、見上げた空には星が瞬<sup>またた</sup>いている。それもまた綺麗だと、砂乃は思った。

この星星も、朝のかがやく海も、ナツメサマと見たい。

ふとそう願ったとき、砂乃の目に一つの黒い影が映った。

だれ……？ りよーじゅに似てる。りよーじゅに……。

りよーじゅ！

いくら暗くとも、視力のいい砂乃にはその人の顔がよく見えた。そしてそう悟った時にはもう、砂乃は窓から外へと飛び出していた。

体の半分が風の砂乃に、抵抗や重力なんてものは関係ない。

たとえ城の最上階だろうと、飛び降りることに恐怖も害もなかった。

軽やかに地面に着地すれば、今彼を見た方向へと必死に走っていく。

りよーじゅ、うそ、りよーじゅ？

こればかりは、自分の目を疑った。亮樹あきが此処にいるなんて、冷静に考えれば万が一もないことだ。

だって此処は神の住処すまかとも呼ばれるゴッド派の聖地。ビュー・ガ―デンに属している亮樹が簡単に入れる場所でも、まして無事に出られる場所でもないのだ。

それでも砂乃すなのがこうやって走るのは、頭で考える事とは裏腹のことを、心が、体が叫ぶから。

あたしがりよーじゅを、見まちがえるわけがない。  
と。

りよーじゅ。

「りよーじゅっ……、きゃっ！」

その名を呼ぼうとすれば、強風が邪魔をした。

ふと見上げれば、一体のマイブが空を駆け巡る。

「りよーじゅ……」

あれは、りよーじゅだ。りよーじゅだったんだ。

きつとほんの十数メートル差まで距離を縮めていたのに、砂乃が彼に触れることも、まして会うことも結局叶わなかった。

彼が此処にいた理由は分からない。だけど……。

「……むかえに来てくれたわけじゃ、ないんだよね」

その声は、わずかな絶望の色を残していた。

\*

「どついうこと」

御の部屋へと入り込めば、棗は我が物顔で壁に背をつき、部屋主へと問い掛けた。

「何がだ」

「……何が？ そうやってとぼけてるつもり？ 何人かの騎士が見てるんだ。柏葉亮樹が、この辺りの部屋の窓から飛び出したこと。この使われていない部屋の中、何処に誰がいるかも分からない柏葉亮樹が、どの部屋でも有意に開けると思っかい？ 君が彼を逃がしたの」

棗の鋭い眼光が、まっすぐに御を睨んだ。

「俺を疑うか」

「疑いたいわけじゃないよ。だけど、他に可能性がない」

その言葉に、御はいくらか迷った。

本当のことを話してしまおうか。けれどまだ、亮樹はそう遠くまで逃げていない。

今事実を話せば、憤った棗が、無理をしても亮樹を殺しに行きかねないというのに、むやみに口を割る事が御には出来なかった。

だからつい、はぐらかすように冷たい言葉を返してしまう。

「だったら、どうする？」

「っ、君は僕を裏切るのかい？」

切れ長の目を大きく剥いて、棗は訊ねてきた。裏切る。棗はそれを、何より嫌う人間だった。

どんなに自分勝手に生きていても、それに便乗してくる人間がなぜかいる。

古楽や森寄はまさしくそのいい例だが、御は違った。

彼は父の後を継いで神の代行人になっただけで、決して棗と同じ

意見を持っているわけではない。

むしろ、御と棗は正反対だ。

そんな彼が、なぜか御にだけこうして仲間意識を持ってくれる。それが原因かは分からないが、御もなぜか、こんなに意見が食い違っても、棗の敵に回る気にはなれなかった。

あんたいつか、ビュー・ガーデンに来たらいい。

亮樹のあの言葉に魅力が無かったわけではないが、恐らくそれは、実現する事の無い“夢の話”だ。

「御っ！」

と、考えすぎたのか、黙っている御に痺れをきらした棗が叫ぶ。

頭で冷静に言葉を紡げればいいものの、なぜか棗に優しい言葉をかけてやることができない。

「静かにしろ。姫愛（まへ）が起きる」

「……君はそんなに自分のシスターがかわいいかい？」

「少なくともお前が思うよりはな」

「シスターは兵器だよ。それが分からないようじゃ、君は所詮、単なる平民（にんげん）でしかないってことか」

「構わん。俺は、神に対する夢話を信じる、平民でいたって構わなかった。だけれど、平民達が望む世界を創れるならばと、父の跡を継ぐ気になった」

くつと、棗が息を呑んだ。御に食いかかりそうなのを何とか耐えたのだろう。

「そんな事は聞いてないよ。どうでもいい」

聞いていないというよりは、聞きたくない、そう言いたげな口ぶりだった。

棗には棗の信念がある。たとえ世界中の全てが彼を批判しても、彼の中でのたった一つの真実だ。

恐らく棗は、自分の信念を覆される事を一番に恐れている。

そしてそれが出来るのが限られた人間で、果たして誰なのかも、もう気付いている。

時々、棗が小さな子供と同じように御の目に映るのは、恐らくそういう理由からだ。

それを分かっている聞いてしまう自分も、十分子供に思えるが。

「柏葉亮樹は、強かったか？」

ふと棗は唇を結んだ。そして次の瞬間には、そこに楽しげな弧を描く。

「強かった？ フン、簡単に怖気づいたよ。あんな弱い人間初めてだ。まあ、何もかもをゴツドに奪われてきた人間だ。ある意味、一番神を怖がっている奴かも知れない」

「何か話したのか？」

\*

階段を駆け上がった踊り場のすぐ先は御の部屋だ。

自分の部屋に戻る途中、砂乃は御と棗の声を聞きつけると、つい部屋に近づいて聞き耳を立てた。

飛び降りるのは簡単でも、飛び上がる事は、さすがに最上階では難しい。地道に上り詰めていたところを、調度二人の声が聞こえたのだ。

盗み聞きなんて最低だ。だけど、

今日一日、一度も会いに来てくれなかったナツメサマ。その理由が、分かるかも知れない。そう思えば、砂乃の足は、もうそこから動かなかった。

「何か？ ああ、言ったかも知れないね。麻生槇那は殺してあげたって」

「麻生槇那……？」

「柏葉亮樹の大切な親友だよ。あれは、僕がこの手で殺してあげた。もちろん、彼の友人だと知っていて」

え？

もう此処へ来てから、砂乃は自分を疑いっぱなしだった。

知りたくなかった真実。それはこつも無情に、彼女の中に流れ込んでくる。

この先は、聞いちゃいけない。きっと砂乃の聞きたくない話に決まっている。

足が動かないのは、竦すくんでいるだけ。

「何故、柏葉亮樹を傷つけようとする」

「邪魔だからさ。彼のような人間がたくさんいては、何匹シスターを作ったって、また諭して、単なる人間にしまいかもしれない。ああ、人間じゃなかった。単なる 使つかいようの無い老廃物」

段々、棗の声が冷たく響くようになってゆく。

「最低だな、お前は」

「ふん、なんと思われようが構わないよ。僕は……シスターなんて、必要ないと思う。あんなもの、何故少女なんて兵器にしようと考えてしまったんだろう？ もっと感情の持つ心配なんて無い、ロボットでも創ったほうが良かったんじゃないのか？」

「創ったのは……先代であるお前の父親だろう」

ふと、棗は視線を床にやった。

無意識だろうが、掌が握り締められている。

「あんな男、父親だと思ったことは無い」

棗の父については、御もよく知っていた。

その全身全霊を、シスターと、ゴッドに尽くした人だ。

「だけど、本当に今日は気分が悪い。……いいや、あの女を連れ帰ってきてからずっとだ」

「棗」

「君は本当に、シスターを兵器とは思えないんだね。合わないんじゃないのかい、神の代行人？ さっさと子供でも作って、代替わりでもしたらどうだい？」

もちろんその言葉が本心ではないことも、御は知っている。

残りの階段を一気に駆け上がると、砂乃は自室に入り床へと腰を落とした。

前方についた手を握り締めようとすると、ザラザラとした埃も一緒に指につく。

あの女を連れ帰ってきてからずっとだ。

あの……女？

もちろん、柏葉亮樹の友人だと知っていてね。

ナツメサマが、殺した？ りょーじゅの……友達を……。

俺に聞くな。何処にいたいかは、砂乃が決めたらしい。

色々な言葉が、頭の中をリフレインする。

何が正しいのか、何を信じたらいいのか、もう砂乃には分からなかった。

用があるときは僕からお前の部屋に行くから。この部屋からは絶対に出ないようにね。

お前は、本当に信じられる者を……見つけるべきだ。

「っ、そんなことない！」

そうだよ、りょーじゅの友達ってことは、ナチュラル派……だもんね。敵だから、しかたなかったんだ。りょーじゅの友達ってことは知ってても、敵だったから……。そうだよね……。ナツメサマ！少女の声にならない悲痛の叫びが、痛々しく夜空に消えた。

\*\*\*

朝、眩暈がしそうなほどの陽光が、室内へと入ってきた。しかしそれには目もくれず、亮樹の視線は虚ろに室内を見つめている。

右手に巻かれた包帯は、今朝方緒叶おかのに手当てしてもらったものだ。バイク型飛行機体の速度で、アジトに戻るまで六時間弱。神の住処を出た時は、もう月が傾いていたから、此処へ戻れたのは明け方だった。

一睡もしていない。

虚ろな瞳をゆっくり動かし、ベッド際の時計を見る。焦点を合わせれば、指している時刻は昨日自分が出かけた時間に近かった。と、不意にノックの音がする。

亮樹の返事を待たずに、ドアはゆっくりと開かれた。

「亮樹くん」

「緒叶……」

「腕……大丈夫？」

静かな声が心地いい。

腕の痛みは、この数時間のあいだでいくらか引いていた。

「大したことねえよ。さすがに昨日はちょっと無理しすぎて痛んだけど、一晩寝れば、どってことない」

一晩寝れば そんな真っ赤な嘘に、緒叶はもうとっくに気付いているだろう。

それでも痛んでいないのは本当なようなので、特につっこんだりはない。

もしも神の代行人との戦いが明日だと言っなら、押さえつけてでも寝れと言っけれど。

「そう、よかった。……何を聞いたの？」

急に表情を引き締めるものだから、亮樹はつい言葉をのんでしまった。

「シゲと、獅堂さんが向こうで待ってる。話してくれるよね」

「うん……」

亮樹の声を聞き取ると、緒叶は部屋を出ようとした。

「待って緒叶！」

振り返る彼女に、亮樹は拳を握り締めた。言わなくちゃ。例え不本意に知ってしまった事実でも、その責任は果たさなくてはいけない。

「俺……俺、さ」

「……どうしたの？」

緒叶の優しい声が、逆に亮樹の罪悪感を煽る。

意を決すると、亮樹は荒々しくも頭を下げた。

「っ、ごめん！ 俺……棗から、聞いた」

「棗……？ 神の代行人の、棗、様？ 何を……？」

元ゴッド派の緒叶には、その名前は知っていて当たり前のものだ。あの頃は、まだ先代との代替わりをしたばかりで、あまり関わる事はなかったけれど。

「あんたのこと」

「わたしの、こと？」

きよとんと首を傾げるも、亮樹の様子に不安を覚え、さらに相手が神の代行人だという事実にはハツとする。

「待つて亮樹くん、それって……！」

「ほんとにごめん！」

緒叶の話を最後まで聞かないうちに、亮樹はただ謝った。

背筋が凍る思いとは、このことを言うのだからか。まるで金縛りにでもあったかのように、緒叶はその場から動けなくなっていた。それでもばれたからにはしょうがない。

それに加え気がかりなのは、亮樹が自分よりこの事実を重く受け止めているのでは、ということだ。

「そっか、聞いたのね」

亮樹は頭を上げない。思ったとおりだ。

すっつと深呼吸すると、緒叶は緩く笑みを浮かべた。自分が彼にかけてあげなくてはならない言葉は分かっている。

「いいよ」

「！」

「いつかは、話さなくちゃいけないことだと思ってた。砂乃ちゃんにはもう少し話してるし、シゲも全部知ってる。 亮樹くんにだけ話さないつもりだったわけじゃないもの。いつかは話さなきゃいけないってわかってた。……でもわたし、逃げてたの」

確かにわたしも逃げてた。でも、みんなにとって一番いいことだけは、いつだってわかっていたつもりよ。

ああ、あの言葉は、そういう意味だったのか。

逃げていると言いながら、緒叶が何も話そうとしなかったのは、それが亮樹にとってこんなにも重い事実だからだ。

彼のように、過去を話せば当時の傷がよみがえり、自分自身が傷つくからではない。

「俺は、それを今聞くべきじゃなかったんだ……」

緒叶に自分の過去を話さなくてはいけないとか、そんなことは二の次で。

まだまだ子供の亮樹の精神には、耐えることのできないものだったから。

ゆっくりと顔を上げると、緒叶が優しい表情のままに微笑んだ。

「だから、また話すわ。……それまでは、あなたの中にしまっておいて。しまえないほど重いことだったら申し訳ないけど、わたしだつて分かつてるから。亮樹くんにも、わたしに話してくれてないことがあるってこと。そしてそれを、君はまだ、わたしに話せないってこと」

「緒叶……」

「わたし達にはもう少し時間が必要だと思うの。お互いに、話せると思うときがきたら話そう」

それはつまり、亮樹から彼の過去については聞かないという事だ。亮樹の顔が落胆の色に染まる。自分の傷を掘り返さなくていいと言われたことはありがたい。しかしそれは、自分達の間係を一変させる。

“対等な関係”その概念は塵となり、亮樹は一生緒叶に負い目を感じて過ごさなくてはいけないのだ。

微笑を笑顔に変えて、緒叶は続けた。

「大丈夫よ。わたし、こつ見えても結構タフなもの。……わたし達は、別に知ったから話さなくて、知らないから教えてくれなくて、対等な関係なんだよ」

対等、その言葉を緒叶から聞けば、亮樹の心はいくらか晴れた。

棗から聞いてしまった事によつて、二人の関係が全く変わらなかつたと言つたら嘘になる。それでもその変わり方が、いい方に転がる事もあるのだと、亮樹は思えた。

「ありがとう。緒叶……」

睡眠不足が原因か、足がとても重い。かと思えば浮いているような気分にも襲われる。それでもなんとかモニタールームまで行くと、滋と獅堂が、温かな態度で迎えてくれた。

「おお、亮樹。昨日は悪かった。まさかお前がこんなことになると思つていれば……。もう少し年配の男をやるべきだったか、やはり」  
「気にしないでよ獅堂さん。俺が行くつて言つたんだ、それに……。いろんな事が知れて、よかつた気がする」

「それで。何を聞いてきた？」

ふつと滋が口を挟んだ。

時計型通信機を繋いでいたとはいえ、全ての情報を明確に聞き取つていたわけではない。

「その前に、シゲちゃん。ありがとう、あの時、俺を、励ましてくれて……」

照れくさくて途切れ途切れではあつたが、確かに礼を言う事が出来た。

そんな亮樹を微笑ましく思えば、滋は優しげな笑みを浮かべる。

「何だいきなり。そうかしこまつて感謝されると、ちよつと気持ち悪いぞ」

「なつ、なんだよそれ！ せつかく俺が、ちゃんと礼言つてんのに……」

「無事に帰つてきてくれてよかつた。亮樹……」

右腕を見れば、決して無事なんかではないのだが、それでも今は、こうして再びお互いの顔を見ることが出来て嬉しい。

「当たり前じゃん。俺の居場所は此処なんだから、何があつたって、俺は此処に帰つてくるよ」

力強くそう言えば、ふと滋の表情が和らいだように見えた。何だかんだで、張り詰めていたのだろう。

三人の様子を一度見回せば、獅堂は亮樹に向いた。

「そろそろ話を進めるぞ。亮樹、お前が昨日聞いてきた事、とりあえず分かる限りで話してくれ」

モニタールームは十人くらいが囲める大きな丸机と、いくつあるかは数えたことのない回転椅子で部屋が埋まっている

近くの椅子を引いて腰掛けると、亮樹は頷いた。

「うん……でもマジ、何も聞けてないけど……。とりあえず、三日後……いや、もう一日経ったから明後日だ。奴らは南の端の島を攻撃する。そしてそこに、融合人間を連れて行くのも間違いない」

「……二日後か……」

ふと、獅堂の表情が重くなった。きつと考えていたより事態が急で深刻だったのだろう。

「どうするんですか？ 一体何人のビュー・ガーデンが来てくれるのか分からないけれど融合人間フュースって、砂乃ちゃんすなのの力を見てき

ただで、わたしには……ううん、わたし達には大体分かる。あれは……決して、人間の敵かなうものじゃない」

「ああ、それと、砂乃は風だから俺たちはそこまで思ってたけど……あの、神の代行人の一人の棗なつめってやつ……一応、砂乃の元パートナーだけ……あいつは新しい融合人間フュースを使ってた」

「何？ ならば何故、此処にいた江奈原砂乃えなはらを連れて帰った」

「俺たちの手の内に融合人間がいることが厄介だから。砂乃をどうするつもりなのかは分からなかったけど、だけど……あいつの今の融合人間は、なにか獣との融合体だ」

「獣……？」

「何だったんだろうっ、あれ……」

獅堂の目線が、亮樹の右腕に移った。

「その腕も、融合人間にやられたんだな」

「うん」

俯き加減に頷けば、ごくりと唾を飲んだ。顔を上げ、滋と緒叶を支点に三人を見る。

「俺さ……。砂乃を、連れて帰ってきたい」

それは立派な意思表示だった。決して変わることはない決心だ。それをわざわざ滋達に言ったのは、もし自分が再び迷いそうになったとき、この決意が確かに胸にあることを、思い出させて欲しいからなのかもしれない。

「亮樹……」

滋が自分の名前を呟くと、あまりにその意見は突拍子すぎたかと、亮樹はあたふたした。

「あ、あいつが、あっちの方がいいって言ったって、向こうにいる連中は、砂乃のこと考えてる奴なんてほとんどいない。特に、あいつが一番信じてる棗が、一番砂乃を裏切ってる！ あんなところ、砂乃にとつて、いい場所じゃないから」

「……わたしも、砂乃ちゃんに帰ってきて欲しい」

「緒叶……」

「確かに、この家に砂乃がいないと、なんだか物足りないしな」

「シゲちゃん……」

「融合人間は被害者だ。保護するのは、立派な俺たちの役目だろ」

二人に便乗して獅堂もこの意見に乗ってくれた。

強くなりきれない亮樹の言葉を、三人はしっかりと心に刻んでくれている。

「一番いい場所にいさせてやるのが、一番の幸せなんだ」

滋のその言葉に、亮樹はただ強く頷いた。

二日後の計画を大まかに話すと、獅堂は椅子から腰を浮かせ扉へと向かった。

計画といっても、ナチュラル派のアジト付近にそれぞれ配置され、現れた神の代理人の行く手を阻むというだけだ。

獅堂を筆頭とした、爆発物処理班が、大方事前に仕組まれているだろう爆弾を見つけ処理する。

ナチュラル派に気付かれないうようゴツドを撃退するという、口で言うには簡単だが、実行するには生半可ではない計画だ。

「俺たちに集団行動が向いていない事は分かっている。だから、作戦などはもう何も無い。後は……健闘を祈る！　どうか……ゴツド派の作戦を阻止してくれ」

「ああ。分かっている」

亮樹と緒叶も同じく頷く。作戦の決行が、刻一刻と迫っていた。

「また此処で会おう……！」

どうか此処での会話が最後にならないよう、彼等は願った。

\*\*\*

小鳥のさえずりが屋内まで響いてくる。

しかし少女の耳に、それは届いていなかった。砂乃もまた、この二日間ともに睡眠をとっていないのだ。

古びた階段を上る音は廊下の軋む音になり、やがて砂乃の部屋のドアを開ける音へと変わった。

大好きだった主が、何知らずな顔で入ってくる。その後ろには、銀髪の幼い少女もいた。

「ナツメサマ……」

「おはよう砂乃。昨日はよく眠れたかい？」

問い掛ける少女の目が赤くても、この男の視界にそれは入らない。

「っ、あはい……」

「そうか、よかった。実はね、明日……南の離れ島を攻めるつもりなんだ」

「え？」

「あそこがナチュラルのアジトだということを、お前は知っているかい？」

「……いいえ」

素直に首を振る砂乃に、棗も同じく頷いた。

「そうか。僕たちが生きていくうえで、いや、ゴツドの願いを叶えるうえで、ナチュラル派はとてつもなく邪魔だ。殺してしまうべきなんだ、神を信じる事の出来ない人間は。……ねえ砂乃、お前にはそれがよく分かるはずだ。神の子というだけで、奴らはお前を人は違うような目で見る。辛かったらどう？　まるでこの世のもので無いように見られるのは。君の存在を認めてくれる人間だけが、傍にいればいいと思わないかい？　共に行こうよ。そしてナチュラルを滅ぼそう。大丈夫、柏葉亮樹や、上条緒叶たちだって、もしも僕たちの気持ち分かるのなら、生かしておいてあげるから。さあ砂乃、また一緒に戦おう」

虚ろな顔で、砂乃は棗を見た。人間がこうも簡単に嘘を並べられる生き物だと、今までは感じた事もなかったのに。

今の少女には、彼の言葉が嘘しかないように思えて仕方ない。

それでも砂乃は、必死に信じていたのだ。昨日までは。

昨日、一日砂乃は待っていた。もしも棗が自分に会いに来てくれたなら、彼はちゃんと砂乃のことを考えてくれている。色々な事実を踏まえた上で、心を痛めながら亮樹の友達を殺したのだ、と。

しかし棗は会いに来てくれなかった。自分の言葉を砂乃に聞かれたいとも知らずに、脆い少女の心を救ってはくれなかった。

そのくせ、今はこれだ。ナチュラルを殺せ？　自分を認めてくれるもの以外は、全て排除しろと、この男は言うのか。

十三年間、砂乃にとって棗は全てだった。

彼の言葉は嘘かもしれない。怒りと不安をこんなにも抱えているのに、僅かに信じて希望をもってしまふ自分は愚かだと思えて仕方ない。

棗の後ろで佇む少女を一瞬視界におさめ、砂乃は訊ねた。

「……あの子は」

砂乃の視界を辿り好桃を見ると、棗は思い出したように頷いた。

「ああ、彼女は好桃。お前がいらない一年間、僕が共に戦ってきた」  
「え？」

「とても優秀な子だよ。彼女とお前がそろえば、きつと強い力を発揮できると思う」

見つめるは床。確かに砂乃だつて、この一年間亮樹とパートナーを組んできた。その自分に言えたことではないのかもしれない。ただ、思わずにはいられなかった。

これは、裏切りでは無いか。

「ナツメサマの、新しい、パートナー……?」

「新しいパートナーなんて、そんな風に思うことは無い。二人とも、僕の為に戦うものだ。二人とも大切にしているんだよ」

「…… ナツメサマのために…… 戦うもの」

「そうだ。神の子は神の代行人<sup>シスター</sup>の為に戦う。もはや下僕<sup>しもべ</sup>だろう?」  
ヒュッと、砂乃は息をのんだ。

下僕、そう言ったのだ。この男は。

かつて砂乃を最強の武器にしようとしたこの男は、砂乃に対して、お前は神の子の中で一番神に近い、と諭した。共に戦おうと誓った。パートナーとして。

パートナーとは、共に対等な関係を築いてこそ、意味を持つ言葉ではないのだろうか。

主と下僕。思えば最初から、砂乃と棗はパートナーなんて関係を築けてはいなかったのだ。

それに気付いてしまっても、まだ心が否定する。

だって棗の傍（此処）を失えば、砂乃の居場所は何処にもない。

「砂乃どうしたんだい？ 久しぶりに、その力を見せてはくれないかい？ 明日の為に、少し修業をしようじゃないか」

逆らつてはならないと、砂乃の中の砂乃が叫ぶ。

頷けば、棗はまだこうして笑ってくれる。傍にいてくれる。

優しい棗。この時砂乃は、まだ彼へのそんな印象を捨てきれずにいたのだろう。

話せば分かってくれると、信じていたのだ。

「いやです」

「何？」

「あたし、すなのは！ 人を殺すのはもう……いやです！」  
まるで夢から覚めたように、棗の表情から笑みが消えた。

「どういうつもりだい？ その言葉は」

戻らない一年間が、走馬灯のように駆け巡る。ああ、もう、何もかも失うのだろうか。

「一年間、りよーじゅや、おかのやシゲさんについて、すなのは……人が死んでくのやだって思った。ゴッド派もナチュラル派も、いっしょに生きて行けるんです！ だからナツメサマ、そうやってすぐ、自分達のこと分かってくれない人は殺しちゃうとか、そういうのやめてください！ お願いします！ ……ナツメサマがむかえに来てくれたの、うれしかったけど、でも、ちがう。一年前、ずっといっしょにすごしてくれたナツメサマと、今のナツメサマはちがう！」

はあつと息をつけば、ゆっくりと棗を見上げた。

「違うよ」

それと同時に、今までに無い冷たい声が耳を掠める。

「違うのはお前だ。お前が変わったんだ。柏葉亮樹……いや、ピュ

ー・ガーデンなんかと馴れ合ううちに、お前は感情を持ってしまった。全く使えない。だから嫌だったんだ。お前がそうやって感情を持ってから、僕の思い通りには何もならない。もう、戦う事も出来なくなったのか？」

「っ、だつて……！ むやみに人を殺すのは、よくないって……！」

「敵なんだ。敵は殺すのが当たり前。お前はそうやって、“僕の周りの僕の敵”を殺してきたじゃないか」

「だけど……！」

「もういいよ。まさかそこまで使えなくなっているとは思わなかった。……もうお前は、用無しだ」

棗の声が冷たく砂乃の中に流れ込んでくる。

用無し。はつきりと言い渡されたこの言葉が、こんなにも心に重

く<sup>の</sup>押し掛かるのだと、砂乃は今まで知る由も無かった。

それだけ自分が幸せな世界にいたのだと、改めて思い知らされる。何もなかったように少女に背を向けると、棗は元の優しげな声で言葉を紡いだ。

「ごめんね好桃、待たせたね。行こうか。……役に立たない奴は、じきに廃棄する」

しかしその声は砂乃に向けられたものではない。

むしろ自分にはつきり言われてしまったのだ。

もう、要らないと。

怖い。

正直それは初めて感じる感情だった。喜怒哀楽を覚えた砂乃は、それを自我と本能により使い分けていた。

それでもこんな気持ちには、今までなつたことがない。

行くところがない。頼る人がいない。棄てられる……！

心でそう感じる前に、体は棗の腕を掴んで引き止めていた。

「待ってくださいナツメサマ！ これ……！ ナツメサマに言われて、すなの、ずっとこのペンダント持っていました！ ナツメサマがこれを持っていたら、必ずむかえに来てくれるって約束してくれたから……だからっ！」

首から下げられた小さなクリスタルを掴んで必死に訴える。

少女の胸のそれを見ても、棗の表情は変わることを知ろうとはしなかった。

「こんなもの、一年間も大事に持っていたのか。いや、持っていてくれなくては都合が悪かったんだけどね」

砂乃の顔に絶望の色が浮かんだ。

棗の言葉の意味は理解できなくても、その言葉の端々に込められた皮肉の意は理解できる。

そんな砂乃に、彼は嘲笑した。

「僕がお前に、お前を迎えに行く為に、これを渡したと、今も本当にそう思えるかい？」

嘘だ。これは、夢、夢に違いない。

「お前が僕の手の届かないところに行ってしまったって、ビュー・ガーデンでもナチュラルでも、どちらかの味方になってしまふのはとても厄介だ。お前が奴らを信じきる前に、僕はお前を連れ帰ってくる必要があった。だからそれを渡した」

どんなに棗の口が、声が冷たい言葉を放つても、砂乃にそれを受け止める事はできない。

遠まわしな説明が面倒くさくなったのか、一度舌打ちをすると、棗の声と瞳は更に冷たくなった。

「分からないかい？ 本当に馬鹿だな、神の子は」

砂乃が握り締めていたクリスタルを横から奪うと、荒く引いて紐から千切りとる。

小さく悲鳴を上げながら、砂乃はその行為を凝視していた。

「発信機と盗聴器……、仕掛けてあるんだよ、この中に。お前が今まで柏葉亮樹達と会話してきた言葉も、何処へ赴いてきたかの情報も、僕は全て聞いていた」

「ナツメ……サマ」

消え入りそうな声でその名を呼ぶ。

これが、砂乃が救いを求める最後の瞬間だとも知らない棗に、その声は届かない。

「だけど、もう用無しだ」

ぐぐつと手に力を込めれば、案外それはすぐに割れ、破片は床へと散った。

息をのんで、砂乃は床を見る。

たった一つの棗との繋がりが、こうも簡単に断たれてしまうと、どうしてこの幼き少女に想像できただろう。

へたりと床に沈めば、震える手で破片に触れる。もう、何もかもが戻らないのだ。

「お前のことはどうしてくれようか。だけどじきに……死ぬ事になるのだけは覚悟しておいてくれな。お前はゴッド派について知りす

ぎている。元々はゴッド派で、十三年間も生きてきたんだからね。そんなお前が、激しく邪魔だ」

「ナツメサマ……」

恐怖心がふつふつとこみ上げてくる。

何もかもが怖くて、もう砂乃は耳を塞ぎたかった。

それでも、体が自由に動いてくれない。

「柏葉亮樹も上条緒叶も、上条滋もみんな死ぬ」

「！ ナツメサマ！」

「みんな僕が殺す。ナチュラルも滅ぶ。世界は、僕が神になって支配するんだ。……お前はもう、必要ない」

それを最後に、砂乃の前から棗の姿は消えた。

\*\*\*

空は晴天。この青空の下で惨いことを行おうとしている人間が本当に存在するのかと、亮樹は疑いたくなっていた。

それでも、こうして着々と自分達が準備を進めているのだから、その真実に狂いはないのだろう。

ふと、亮樹は額のバンドに触れる。これから向かう先は、亮樹にとって終わりの場所で、始まりの場所だ。

「……行つてくんね、父さん。見ててよ、成長した俺のこと。母さんと二人で、さ」

「亮樹、準備できたか？」

滋からかけられた声にハッと我に返ると、亮樹は明るく振り返って彼の元へと駆け寄った。

「うん！ 大丈夫、……悪い待たせた」

「いや、大丈夫だ。行くぞ」

「うん」

調度そう言つて自動車型飛行機体に乗り込もうと振り返ったときに、勢いよくドアの開く音がした。

「亮樹くん、シゲ！」

肩につかない短い髪を風に流しながら、緒叶が二人の元へと近づいてくる。

「緒叶」

「、本当にわたし……行かなくていいの？」

不満げというよりは不安げに、彼女は訊ねた。行けないことが不満なのではなく、二人の無事を不安がっているのだ。

「お前には此处でやる必要がある。向こうの事は俺たちに任せろ」

「……別に心配してるわけじゃ……心配はしてるけど、あなたたちが、何かあるなんて思ってるわけじゃないわ。だけど……これ、持つて行ってほしい」

差し出した掌には、小さな石で作られた時計型通信機用のベルトが二つ乗せられていた。

それは現代に伝わるお守りで、鮮緑色を基調としているものには、危険から身を護る効果があると言われている。

「これ……。緒叶あんた、昨日夜遅くまで起きてたと思ったら、こんなもん作ってたのか？」

「っ、こんなもんなんて、言わないでよ。……要らないなら、いいけど」

「いや、ありがとう」

不服げに言葉を返してくる緒叶を流すようにそう言うと、亮樹は左腕の時計型通信機を外し、ベルトを交換した。

同じように滋もベルトを交換する。

そんな亮樹を見ながら、緒叶の視線は彼の右腕に集中していた。

「次はそんな風になって帰ってこないでね」

「う……。肝に銘じとく」

次は亮樹と滋を視界に収め、緒叶は言う。

「気をつけて。行ってらっしゃい」

「行ってきます」

二人ははつきりそう答えると、自動車型飛行機体に乗って空をかけた。

その姿が見えなくなるまで緒叶は見送り、そして祈る。

「……三人で、帰ってきてね……」

\*\*\*

あれからの約一日を、砂乃は何もすることなく、まして感じることもなく、ただ呆然と過ごしていた。

不意にギイイと扉が開かれると、昨日の恐怖がよみがえって体が震える。

しかしかけられた声は、気が抜けるほどあっけらかんとしたものだ。だった。

「砂、乃？」

顔を上げれば、その先にはきよとんとこちらを見つめる少女の姿がある。

少女といっても、その姿から砂乃よりは年上だろう。

水色の髪が背中まで流れる、十六、七歳の少女だ。

目の前の少女を“砂乃”だと認めると、あとは臆することなく砂乃の体に抱きついた。

「砂乃？ やっぱり、砂乃？ ……砂乃！」

ピクリと体が強張る。

「御様に、ここにおんにいるって聞いたの。いた……！ 本当にいた！ 久しぶり！」

御様、その言葉に、砂乃の中の薄い記憶がよみがえった。

一年前、まるで姉のように砂乃を可愛がってくれた神の子の存在。

「きあら……？ きあらなの？」

僅かに体を離して、目の前の少女が薄く笑む。

「姫愛よ」

その声に、今まで張り詰めていた気持ちが一気に解ける。  
安心したように砂乃も笑んだ。

「久しぶり……」

久しぶりの再会を大いに喜べば、姫愛はただ幸せそうに笑った。

「此処に来てること、もっと早く知ってたら、もっと早く会いに来た」

「うん……」

「砂乃、元気ない？」

「え？」

「目も赤い……。どうした？」

砂乃は言葉に詰まった。主に棄てられてしまったなど、言えるわけがない。

きつと無駄な心配をかけてしまっし、何より心が、その事実を認めることに恐怖しているのだ。

姫愛と共に過ごしてきたあの頃、砂乃はこんな風にいるんなことを感じ取る事は出来ていなかった。

きつといつだって無表情だったろうに、そんな砂乃の変化を、姫愛はなぜか鮮明に感じてくれる。

「……言いたくないなら、いい」

ふつと顔を上げれば、姫愛はやっぱり、ただ優しく笑んでいた。

「姫愛、これから……ナチュラルと戦いに行く。だから……また後で、会いに来る。じゃあね、砂乃」

「待ってきあら」

さつさと部屋から出て行こうとした姫愛を、砂乃はとっさに呼び止めた。

一人にしてくれようとしたのが姫愛の優しさなのは分かっていたが、どうしても気にかかることがあったのだ。

「きあらは、人を殺して……平気？」

ナチュラルと戦いに行くという事は、自然とそういう状況にもなりうるだろう。

その質問にも姫愛は、臆することなく答えてくれた。

「分かんない。姫愛には、人を殺すとか、よく分からない。でも……御様は喜ばない。禾夜とか朱夏しゆなとかは、喜んでる時もあるかも知れない。でも姫愛は……御様の喜ぶことをしたい。殺すとか、戦うとか……分かんない、だけど。御様の為に、何でもする」

「……じゃあすなのは、ナツメサマのために、戦うべきなのかな」  
「姫愛は、自分でそう決めた。砂乃、やりたくないならやらなくていい。砂乃が、一番したいこと、すればいい」

「すなのが一番……したい、こと？」

「一番一緒にいたい人……とか、一番、やりたいこと、とか、叶えたい未来……。よく分からないけど、砂乃の一番したいようにしたらいい。じゃあ、姫愛行く！ またね！」

たかたかと軽快な足音を立てて、姫愛は部屋を出て行った。

その様子を呆然と見ていた砂乃の脳裏には、姫愛の言葉がこだまする。

「すなのが……一番いっしょに、いたい人……」

それは誰だろう。もう誰も、砂乃を愛してくれる人はいない。神の子にとってはパートナーが全てだと言うのに、亮樹は自分から切り離し、棗には棄てられた。

それでも、誰からも見棄てられたこの状況で、砂乃が共に在りた  
いと思うのは……。

りよーじゅー！

何その顔……そんなにすなのが来るのがめーわく？

だって俺もう十八だよ？ お子様にはわからない所にだって

興味ある。

すなの、子供じゃないもん。

じゃあ赤ちゃんはどうやって出来るのか知ってる？

し……自然に？

はい、お子様ー。

最初にさいしょ浮かんだのは、いつだって自分をのけ者にでもするように

置いていく亮樹。

赤ちゃんの出来方を知らない砂乃を、お子様扱いしかしてくれない意地悪な男の子。

りよーじゅはどうして、ビュー・ガーデンに入ったの？

聞いちゃったから。父さんの本当にしたかったこと。

りよーじゅのお父さんが、したかったこと？

ゴッドとナチュラルが共存すること。

りよーじゅは、お父さんのイシをつぎたいの？

そんな立派なもんじゃないよ。ただ、親と子供って考え方が自然と似てくるから。

次に浮かんだのは、初めて僅かながら心の内を語ってくれた亮樹。けどあの時だって、彼は砂乃の存在を忘れて、一人行ってしまおうとしてたんだよね。

別にそんなこと、今は怒りも湧かないけれど。

砂乃は連れて行かない。

あいつはまだゴッドを信じてるから。そんな奴を、連れてはいけない。

最後に浮かんだのは、初めて本気で、砂乃を引き離そうとした亮樹。

何処に行くにも彼と共に在る事を望んだ少女にとって、あれほど残酷に響く言葉は無かった。

それがどんな言葉であっても、裏切り者と、そう言われたようにしか感じられない。

りよーじゅは、すなのにそばにいて欲しい？

俺に聞くな。砂乃の好きにしたらいい。

ねえ、りよーじゅ。あたしあの時、りよーじゅに答えてほしかった。“自分で”じゃなくて、“りよーじゅ”に答えを出して欲しかったの。そしたらすなのは、例えナツメサマがどんな風になってもいようと、彼に着いていけた気がする。

……ちがう。

そう、違うのだ。砂乃は確かに亮樹に答えを求めたが、欲しかったのは、他でもないたった一言。

止めてくれる人がいたなら、わたしは命に変えてでも、その子を実験材料にはしなかった。

棗と共にガウから上条家を離れた時、ふと脳裏を過ぎった緒叶の言葉。あの理由が、砂乃には漸くわかった。

止めて欲しかったのだ、自分は、亮樹に。

傍にいて欲しいかと聞いたあの時、たった一言、うん、と答えて欲しかったのだ。

そうすれば、砂乃は棗の手を振り払い、亮樹の元へ駆けてゆけた。少女の願いは、たったそれだけだった。

だけどそんな些細な願いももう叶いはしないから、少女の胸はただ痛む。

一緒にいたい人とか

ふと姫愛の言葉を思い出した時には、砂乃は部屋を飛び出していた。

その手には、棗によって割られたクリスタルの破片が、固く握られている。

だって気付いてしまったから。自分の気持ちに。どんなに亮樹が砂乃を嫌っていたとしても、砂乃は彼と共にいたい。

亮樹と、緒叶と滋と……ビュー・ガーデンにいたいと、そう思えるから。

一番やりたいこととか

死んで欲しくない。

亮樹達と一緒に生きたい。ナチュラルの人たちだって、だれ一人として、死んで欲しくなど無いのだ。

長い階段を一気に駆け下りる。時折足がもつれたが、無重力に近い体質のおかげで、なんとか転ばず走る事が出来ていた。

叶えたい未来とか

ゴッドとナチュラルが共存できる未来を、すなのだってつくりた

い。

それがりょーじゅの夢なら、それはもう、すなのの夢なんだよ。だって、りょーじゅだけだったもの。すなのを兵器なんて思わず、十四歳の女の子として扱ってくれたのは。例え油断させるためだというナツメサマの言葉が本当でも、そうやってすなのと接してくれたのは。

パートナーという関係が築けたと思えるのは、りょーじゅだけだもの。

階段を降りきると、外に続く扉はすぐそこだ。今のペースのままに走り続け、のりに任せるように勢いよく扉を開けた。

辺りを見回すが、もう誰のけはいも無い。

と、突然突風が辺りの木々を揺らした。

ふと見上げれば、ガウが上空へと上り詰め、今にも発進しようとしている。

間に合わない！

「待って！」

追いかけようとはむしゃらに走ったが、思いは虚しく、足がもつれた。

今度は重力に抵抗する事ができず、流れるままに地に突っ伏す。

草を握り締め上空を見上げた瞬間には、もうガウの姿は見えなかった。

「……っ、どうしよう……！」

手が痛い。握り締めたクリスタルの破片が手の平にくい込み血を滲ませる。

そこから痛みが広がって、もう全身が、辛いと悲鳴を上げていた。けどこんなこと、亮樹あきを失う痛みに比べたらどうってことない。

なぜなら今、亮樹が、みんなが死んでしまおうと考えただけで、砂す乃なのの心はこんなにも痛むのだ。

その痛みは、手の痛みなど優に超えている。

漸く自分のいたい場所が分かったのに、その居場所すら、いま棗なつめ

に奪われようとしている。

大好きだった主。それに奪われようとする大切なパートナー。  
失う恐怖が、幼い少女の心を、弄ぶように蝕んでいった。

## 6・枯れた思いと生まれた絆

自動車型飛行機体から降りれば、亮樹はググツと背伸びをする。たった二十分弱の短い旅だったが、これからの自分達の目的を思い返すと、始める前から精神的にか体が重かった。

「……ナチュラルのアジトも久々だなあ」  
目の前に広がる大きな建物を見ると、亮樹は息を吐くと同時に呟いた。

オーブから降りた滋が答える。

「お前はやはり何度か来たことがあるのか」

「そりゃあ俺の父さんは、一応ナチュラルのお偉いさんでしたから。この辺に住んでたこともあったよ」

無言に頷けば滋は建物を見上げた。

どこか見覚えのあるそれは、自分の大好きな書物に載っていたものだ。

「大会議場に似てるなあ……」

あまりにぼそりと呟かれた声は聞き取りづらく、亮樹は怪訝そうに聞き返した。

「え？」

すると、滋はバツが悪そうにしながら話してくれた。

「ああ、いや……。随分昔、もう千年くらい前の話だが、大統領とか総理大臣とか、そんな風に言われるものがあつたんだよ、世界には。その偉様たちが会議する、国会議事堂つてのがあつてさ、それによく似た形をしてる」

「……シゲちゃんて何気にさあ、歴史好きだよな」

「ふっ、違うよ。昔の世界が好きなんだ。ナチュラルとかゴッドとか、この日本国はそんなことに一切関与しない、一番平和な世界だったからな」

まるで懂れるように呟く滋に、亮樹はしばし黙った。

ふつと顔を上げれば、まっすぐに前を見据えて言い切る。

「でもさ。俺たちがそんな世界にするんだろ」

ナチュラルとゴツドが共存し、殺戮なんて言葉とは無縁の、そんな世界。

それを創るのが、ビュー・ガーデンの願いなのだから。

にっこ笑って滋は頷いた。

「ああ。そのために今日、此処に来たんだ」

そう言えば、滋は左側に体位を変えて数歩歩き出した。

「俺はあっちに行くが、お前は向こうに回ってくれ。他のビュー・ガーデンの連中もいるかも知れないが、あまり会わないよ？ そんなに性格のいい連中ばかりじゃないからな」

「分かってるよ。他のビュー・ガーデンと一緒に戦う気なんてないし、多分戦い方も違うし、気だつて合わないだろっ」

同じようにして右側を向けば、亮樹は茂みを越えた。

「……戻って来いよ」

「分かってるよ。ついしょっ」

もう一つ茂みを越えると、亮樹はさっさと自分の持ち場へと走っていった。

木に攀じ登れば、幹に腰掛辺りを見回す。

なかなか大きな木だ。天辺まで登れば、建物の屋上すら見渡せそうだった。

さすがナチュラル派。森林を大事にしすぎて育ちすぎたとも言えるだろう。

辺り一体を見回せば、すっかりナチュラルに扮したビュー・ガーデンがちらほらと見えた。

どんなに成りすましていても、雰囲気などでその違いは一目瞭然だ。

しかし亮樹の目についたのはビュー・ガーデンよりも、平和そうに笑っているナチュラルの平民達だった。

ナチュラル派のお偉方の集まるこの建物よりずっと奥にある町で

は、多くの人は何も知らないように普通に生活している。

もしも父がゴッドに殺されたりしなければ、今ごろ自分もあの中で幸せに笑っていたのだろうか。と不意に思ってみたりした。

家族に囲まれて、一步先の世界が殺戮に染まっていることなんて知らずに平和に生きるのと、大切なものを失ってでも、こうして自分で世界を、その在り方を見て生きるとでは、どちらが幸せなのだろう。

分からないけれど、だけど何も知らずにただのうのと過こして  
いる自分を想像すると、そんなのは絶対に嫌だ、と思わずにはいられないのだ。

ビュー・ガーデンの在り方は父の夢であり、やはり亮樹アキラの夢なの  
だった。

気を入れなおして再び建物の周りを見渡す。

ゴッド派の者らしき人間は目につかなかったが、灯台下暗し。す  
ぐ近くから聞き覚えのある声があった。

「モリサキ！ はやく！」

ふっと見下ろした先にいるのは、いつぞやの若草色の髪をした少  
女と、らくだ色の髪の少年だ。

少女は明るく後ろの少年に手招きした。

彼はげっそりと近づいてくる。

「はあ、禾夜……お前、本当タフだよな。確かに此処までは二時間  
で来れるけどさ、少しくらい疲れたりとかしないわけ？」

問い掛けてくる少年 森寄の言葉に、少女 禾夜は胸を張っ

て答えた。

「全然。これからが楽しいんじゃない。でもさあ、だつれも敵さんが  
いなくて……つまんない」

本当に不服そうに言うものだから、宥めるためなのか森寄はポツ  
リと細かい作戦を語り始めた。

嫌でも自然に、それが亮樹の耳にも入ってくる。

「まあ、ぼくたちのやることは、所詮は建物の爆破に気付かれない

ことだから。今日つてさ、大事な会議の日なんだつて。僕たちがこ  
うやって爆弾仕掛けてるとも知らずに、ナチュラルの偉い人間たち  
は、みんなあそこに集まってる。気付く事もないだろうから、そう  
暴れる事もないかも」

それを聞けば、案の定禾夜は嘆いた。

「ええ！ モリサキが言ったんじゃん。此処にすればたくさん暴れ  
られるつて」

「ん〜、ビュー・ガーデンくらいはいると思っただけどな〜」

困ったように頭を掻く森寄を、禾夜は恨めしそうに睨んだ。

そしてふと、背後に危険を察する。

葉がざわざわと揺れると、禾夜は森寄に飛び掛った。

「モリサキっ」

加減を知らない少女の体は、勢いよく森寄に体当たりしてくれる。  
とつさのことに対応しきれず、彼はそのまま倒れこんだ。

「つてて……。なんだよ一体」

刺激を受けた頭をさすりながら、文句の一つも言つてやるうかと  
思ったが、禾夜は既にこちらに目もくれていなかった。

激しく木の上を睨んでいる。

怪訝そうに森寄も禾夜の視線を追うが、その先にあつたのは、た  
くさんの葉の生い茂る大木だけで、他は何の姿も見受けられなかつ  
た。

疑問に思い辺りを見回せば、先ほど自分の立っていた場所に小型  
のナイフが突き刺さっている。

禾夜が身を挺して自分を守ったことに、森寄は漸く気付いた。

と同時に、木の枝が大きく揺れる。タンツと音を立てて地に降り  
立ったのは、棗と同じくらい年の青年だった。

「誰？」

声変わりもまだの声を精一杯低くして、森寄は訊ねる。

「お前らの望んだ、“ビュー・ガーデン”だよ」

簡潔に亮樹が述べると、森寄よりも禾夜が早く反応した。

ビュー・ガーデンとかは関係無しに、とっさにそれが敵として認識される。

「……あんた……よくも、モリサキを」

大切な主が攻撃されたことは、何よりもの屈辱だった。

さつと右手を左肩に沿え、空気を斬るように右に動かす。

「赦さない！」

禾夜の動きに乗って木の葉が亮樹を襲い出した。

とっさに避けるものの、その量は半端でない。まんまと逃げ場の無い茂みまで追い込まれてしまった。

「モリサキ、命令して」

シスターはパートナーの命令がないと攻撃は出来ない。

本能と、本能と理性からできた融合体。明らかに本能が体の機能を支配していて、彼女達だけでは、相手をどこまで傷つけていいのか、そこまでの判断ができない。だからいつだってパートナーの指示に従うよう、彼女達はしつけられている。

「……禾夜の好きにしているよ」

「じゃあ、クロス」

目の色が変わった少女に、亮樹は些細な疑問を投げかける。

「お前……木の融合体……？」

「違うよカヤは、大地から生まれたシスター。木だけじゃなくて……」

次に地面に手をつきながら、禾夜は言葉を続けた。

「土だつて味方なんだから！」

言葉と同時に地面が割れる。その速さに、亮樹は間一髪左へ転がり避けるのが精一杯だった。

やはりフューズ相手に生身で戦うのには限度がある。

転がった拍子に右腕が痛み、庇いながら立ち上がる頃には、どうやって逃げようかさえ考え始めていた。

しかし怒りに狂っている神の子が、そう簡単に自分を逃がしてくれるわけがない。

間髪いれずに、次の攻撃が亮樹を襲った。

時刻は十四時二十分を指していた。

大会議場に設置した爆弾が爆破するのは十六時ジャスト。既に数人のビュー・ガーデンは蹴散らしたものの、未だ一番痛めつけてやりたい人物には会えていない。

柏葉亮樹。やはり戦いに恐れをなして逃げたのだろうか、棗は呆然と思っていた。

「ナツメサマ」

音の無いリズムで自分を呼んだのは、下僕である神の子の好桃だった。前を歩いていた少女だが、彼が急に立ち止まったのを不思議に思ったのだろう。

何でもないと返せば、少女は何も言わずに再び前を歩き出した。

あと一時間と四十分。ビュー・ガーデンがどれだけ粹がろうと、自分達の作戦を翻す事は出来ない。恐らく今は建物内に設置した爆弾を探し処理しようとも考えているのだろうが、みすみすそんなことをさせるつもりもなかった。

「好桃、会議場に入るよ。中に潜り込んでいるビュー・ガーデンを排除する」

「はい」

前を歩く少女が振り向き様に返事をした。

と、ほぼ同時に東側の木々が激しく揺れる。

「……森寄か」

草木をこんなにも唸らせる事ができるのは、それと融合した神の子を従える森寄しかいないだろう。

しかし何にしたって、こんなに大っぴらに大地を轟かせては鈍感なナチュラル派にも気付かれかねない。

スツと体の向きを変えると、棗は忌々しそうに言った。

「好桃、悪いがそっちへは一人で行ってくれ。僕もすぐに後を追うから。ああ、あと、もしも君が敵だと判断する輩と直面したら

「迷わず殺せ」

「はい」

簡潔に返事を返すなり好桃は駆け足で棗の元から離れていった。そんな少女の後ろ姿が見えなくなると、棗も自分の目指す先へと駆け出した。

「っ、かはっ」

大木に勢いよく叩きつけられる。

いつかの晩は飛び降りるクッション代わりになっけてくれた“木”という存在が、今は単なる凶器に過ぎなくなっていた。

亮樹が前のめりに倒れ込むと、禾夜は迷わず次の攻撃を仕掛けてくる。

体が思うように動かなくなってきた亮樹は、ああ、死ぬ、とさえ思い始めていた。

禾夜が最後の一手の如く、その手を振りかざした。

その時。

「待て」

冷たくかけられた一声に、禾夜の手は思わず強張った。

声のした方向に、ゆっくりと顔を向ける。

「なっつん」

その姿に声も出ない禾夜とは裏腹に、森奇は目前の人間の名を呼んだ。

「その呼び方はやめろ」

気に障ったのかどうなのか、森奇には見向きもせず無感情にそう言えば、棗は彼の横を通り過ぎる。

そのまま禾夜の元まで歩きつめると、捻るようにその腕を掴み上げた。

「いたっ！」

「！ やめるよなっつん！ 禾夜に……」

手を出すなと続けたかった言葉だが、棗から向けられた冷たい視線に、森奇は思わず息だけをのんだ。

その間に亮樹はゆっくりと起き上がる。仲間割れか？とも思っただが、そんな言葉で片付けられるほど、場の雰囲気は優しくはなかった。

棗の視線が一瞬、亮樹をとらえる。

「彼は僕が殺す。森奇、君たちには下がっててもらいたい」

「……何で？」

「彼が何者か、君たちは知らないんだろう？ だったら言う必要の無い事だ」

「そんな……っ！ 禾夜を力ずくで押さえつけて……傷つけて、ほんとたちに聞く権利は十分あるだろうっ？ それにこいつはビュー・ガーデンだ！ 作戦の邪魔になる奴は殺すって、それはあんたの指示じゃないか！」

棗が手荒く放り出した禾夜を庇いながら、森奇は声を上げた。

禾夜は異常なほど棗に怯えている。

無理も無い。彼女は一度、うるさいということを理由に、棗に瀕死状態になるまで傷つけられた過去があるのだから。

「そう、だからこれも、僕からの命令だ」

「……っ」

「おい……待てよ」

割って入って来た亮樹は、息も絶え絶えに意見する。右手を庇うようにゆっくりと立ち上がるうとするも、体に力が入らず再び座り込んだ。

「お前ら……変だ。同じ神の代行人、なのに……どうして命令だの権利だのって言葉が……飛び交う？ なんで、お前らは、対等な関係なんじゃないのかよ」

「死にぞこないが余計な口を挟まないで欲しいね。対等な関係？ そんなものがこの世のどこに存在する？ たとえ万民が平等だと諭されても規されても、その中には必ず上下関係が発生する。力とか、

頭脳とか、所詮は勝ったものが上へと上るんだ」

それは確かにそうかもしれない。だけどそうではないと誰かが、人の上に立つ存在である人間が証明していかなくては、どうして戦争が終わるだろう。

「……だけど……そうだ。あんた達はゴッド派だろう。神を一番に立てるあんた達が、どうしてそんな、科学的なことを言うんだよ！」  
「ゴッド派が神を信じ、神の言葉どおりに行動していると信じるのは、所詮は平民どもだけだ。だってそうだろう？ もしも僕たちが神の言葉通りに行動するなら、どうして神の子なんて創る？ 一番神を信じていないのは、僕たち神の代行人さ」

その言葉に、亮樹はただ愕然とする。神を信じるゴッド派。自然を尊重するナチュラル派。彼ら二つの派閥が共存してこそ、美しき国が創れると言うのに。

そんな彼らが神なんて信じていないというなら、この戦争は単なるいがみ合いの喧嘩ではないか。原因の無い喧嘩を終わらせる方法なんて、時が経つのを待つ以外に何があるだろう。

「じゃあ……、あんたがゴッド派でいる、理由はなんだ」

「それは、気に入らないからさ、この世界が。人間は人間の言葉などに耳を貸さない、だけど人間外の言葉は意外とあっさり受け入れるものだ。だから僕は神になる。そしてこの腐った世界を支配し作り変えるんだ」

きつぱりと棗は言い切った。そんな彼の言葉に眉根を寄せて、亮樹は唸る。

それは美しい信念だ。たった一つ望む世界を造り出すために必死になることは、素晴らしい事かもしれない。  
だけ。

「あんたの望む世界がどんなものかは知れない。だけど、俺は絶対、その意見には賛同できない」

「なぜそう言い切れる？」

「あんたは……楨那を殺し、砂乃を裏切ったから」

「まだそんな事を言っているのかい。僕の行いは何も間違っていない。麻生槇那はナチュラルの人間だから敵と見なし殺すのは当然だし、砂乃は所詮兵器として作られた少女だ。兵器として使えなくなつたのなら、棄てるのは当然だろう？　なあ、森奇」

急に話を振られれば、森奇は答えに詰まった。

ナチュラルを敵とし殺すことは間違つてはいないだろう。しかし彼には、禾夜を兵器と見なし使えなくなれば棄てるなんてことは決してできない。

無知で、無防備で、そして自由な、とても手に負えない少女だが、それが愛しくて仕方ないのだ。

「森奇？」

名を呼ばれば、視線は逆に下へと下がった。庇っていたはずなのに、今は護られるように禾夜に手を握られている。

まあ禾夜にとっては、助けを求めるために差し伸ばされた手に過ぎないのだろうが。それでも今は、それが森奇の支えだった。

「……ぼく、なつつんが要らないものを要らないときっぱり判断するところ、すごく憧れる。なつつんの望む世界だって、きつとぼくは賛同すると思う。でも、神の子に対する扱いは、頷く事は出来ないんだ」

俯きがちに言葉を紡いでいる森奇に、棗の表情は見えていないのだろう。見えていたなら、この冷たい表情を前に、少年が彼に反発できたとは思えない。

「なつつんの神の子は……正直、ぼくにはどうでもいい。人のこととやかく言うほど、ぼくはお人好しな人間じゃないからね。でも禾夜は別だ。ぼくは禾夜を要らないなんてきつと一生思わないし、たとえ禾夜が戦えなくなつたって、棄てたりなんてしない……ううん、できないから」

「モリサキ……」

禾夜の歡喜の声に、森奇は少女を見た。

その表情にホッとできるのは、それだけ彼の中で、この少女が大

切だからだ。

しかし非道なこの男にそんな言葉は通じない。

「ふん、神の子、神の子。所詮は単なる兵器にそこまで感情移入してどうするんだ？ やはり君たちは使えない。用無しになった兵器に愛着なんて持っていて、それは単なる判断力に乏しいバカな人間というだけの事だ」

「あんたはそうやって、簡単に人を傷つけるんだ。兵器？ 確かに、砂乃もその女も、兵器として作られたのかも知れない。だけど、あいつらは人間だ！ ちゃんと感情を持ってる……涙を流せる、人間なんだよ！」

背後でそう叫んだ亮樹に、棗はゆっくりと振り返った。

まるで子供の戯言でも聞いたかのように、厭味たらしく笑みを浮かべる。

「人間？ よく言うよ。彼女達は家族にも棄てられた存在なんだよ。苗字はあっても、帰る家はない。いくら神の子と呼ばれていても、所詮はただの融合体だ。まともな神経を持った親なら、そうやって我が子の体を弄らせようとするかな？ 所詮彼女らは、誰からも見棄てられた存在なんだよ」

「違う！」

亮樹は叫んだ。腹筋が痛む。恐らく先ほどの戦いの最中に打ったのだろう。

誰からも見棄てられた存在。

違う。そんな事は、絶対に違うのだ。愛されない人間なんていない。例え親に見放されたことが事実でも、ならば他の誰かが愛してやるべきなのだ。

御が自分の神の子を想っているように。

亮樹の目の前にいる、森奇と呼ばれる少年が、禾夜という神の子を大切にしているように。

亮樹が砂乃を、愛しく思っているように。 。  
ごくりと唾を飲み、息を吐けば、まっすぐな目で棗を見た。

「俺は……砂乃を見棄てない。絶対に見棄てたりしない。砂乃も、緒叶もシゲちゃんも……。あんたが殺そうとするナチュラル派の間だつて、護つてみせる。それに　ゴッド派の人間も、誰一人殺させたりはしない。俺は、誰の敵にもならない。誰も……裏切らない、誰も見棄てない。　あんだだつて、命の危機に曝されたなら、きつと助ける」

それは願望でも幻想でもなく、立派な決意だつた。みんなが幸せに生きられる世界を創ること　それが亮樹の中で、人が人らしく生きられる世界の“信念”だつた。

一筋の光が亮樹を照らす。

木葉の間から差し込んでくる光だが、棗にはそれを希望の光だと思つことはできなかつた。

「ばかが……。そんなもの、所詮はおとぎ話じゃないか」

誰もが幸せに生きられる世界。棗だつてそれを望んだことくらいある。それでもそんな希望は夢だと思ひ知らされた過去があつたから、彼は今こうして“新しい世界”へと思ひを馳せているのだ。

「君の夢話は聞いてて反吐へどが出る。君は誰も護れないよ。何故つて？　柏葉亮樹、君は今此処で死ぬからだ」

亮樹を過去の自分だと思つるのは、都合のいい解釈だろうか。それでも棗は、今此処で自分の手によって彼を殺さなければ、前に進めないような気がしてならなかつた。

腰に携える剣を引き抜けば、亮樹の方へと構える。

亮樹は息をのむ。棗の剣の腕など知り得もしないが、今の体力状態で避けきれるとはとても思えない。

ああ、もう、終わりだ。と、この時ばかりは本気で思った。

剣が風を斬る音がする。振り上げたのだろう。固く目を閉じていた亮樹には予測することしかできなかつた。

ふわりと優しい風が頬を掠めた。それを合図とすれば、走馬灯のように、亮樹の中に大切な人々の言葉が浮かんで消える。

次はそんな風になつて帰つてこないでね。

「ごめん、緒叶。お守りまで作ってくれたのに、俺はあんたの期待に応えられそうにない。」  
「いや、ここまで痛めつけられた時点で、もう約束は守れないかもしれないけどさ。」

戻って来いよ。

「ごめん、シゲちゃん。いつだって俺の無事を祈っていてくれたのに、俺はバカやってばかりだった。」

話せるときがきたら話そう。

例え何の情報も手に入れられなくなたって、生きて帰って来い！  
検討を祈る！

気をつけて。

りょーじゅは、すなのにいてほしい？

わたしたちは、別に知ったから話さなくなたって、知らないから教えてくれなくなたって、対等な関係なんだよ。

また此処で会おう。

じゃあ、ナツメサマとこのまま帰る。

それは逃げだって、思えたから。

だが、彼女らは人間として育っているんだ。兵器としての役目も持つてはいるが、人として育つ事も、決して忘れてはならないことだ。

お父さんがどうかじゃなく、お父さんの夢が、りょーじゅの夢なのね？

ごめん。みんな。ごめん。

ごめんな。砂乃。

さすが親友。俺が会いたかったら、地の果てからでも、会いに来てくれそうだな。

きつと今そっちへ行ったら、槇那は怒るだろうな。だけど、槇那、父さん、母さん。もうすぐ俺は、そっちへ行くよ……。

大体の清算はしたつもりだった。後悔はどうしようもなく残るけど、それも運命なら仕方ないのかもしれない。そこまで思っているのに、いつまで経っても棗の剣は振り下ろされない。不信に思った

亮樹が目を開いた時、視線の先には、予想外の光景が広がっていた。  
「砂……乃？」

目の前で自分を庇うように手を広げる少女。彼女を目にするのは、  
実に何日ぶりだろうか。

「砂乃、どうしてお前が此処に」

だが事実、それに一番驚愕しているのは棗だった。連れてきてな  
んていないはずの少女。なぜそれが此処にいるのか。

「俺だ」

そう言っ、砂乃が飛び出してきた木の陰から現れたのは御だっ  
た。棗の目がみるみるうちに丸くなっていく。

「俺が後を追わずよう、部下に頼んでおいていた。自動車型飛行機  
体しか残っていなかったから、ほぼ同時刻に屋敷を出ても、着くの  
は今になってしまったようだな」

「……どうして」

「どうしてか、分からないか？」

「あたしが……りょーじゅのところに戻りたかったから。すなのは、  
りょーじゅが死ぬなんてイヤだったからです」

臆することなく言葉を発す少女に、亮樹は息をのんだ。自分から  
棗の元に帰った砂乃。そんな彼女から、こんな言葉が聞けるなんて  
思いもしなかったのだ。

「はっ。僕に見棄てられれば、今度は大切にしてくれる者の元へ帰  
るのかい？ 随分偉い存在なんだね、神の子は……<sup>シスター</sup>。兵器のくせに  
！」

パンつと、威勢のいい音が響いたかと思うと、音の先では棗の頬  
が赤くなっていた。

殴ったのは御だ。

「もう、やめろ……！ お前の個人的感情で、神の子を、人を傷つ  
けてはならない」

棗は顔を御に向ける事が出来なかった。いままでどんな言葉を吐  
いても自分についてきた御が、こうして棗に手を出すのは初めてだ。

そんな事は知り得もない亮樹だが、森崎までもが目を丸くして二人を見ているので、そうでは無いかと想像なら出来た。

棗の中に恐怖が生まれる。自分の信じてきたものが、呆気なく崩れ去っていくような、そんな恐怖。

ずつと感じてはいたのだ。亮樹に出会ったそのときから。

亮樹は自分の望んだ未来を切り開こうとしていた。棗が望み、そして諦めた未来を。

さらに、棗がどうしても愛せなかった神の子を愛した。

神の子は、棗から父親を奪った憎き生き物で。彼はそんな少女達をどうしても愛せなかったのだ。

棗の成し得なかった事を成し、成そうとしている亮樹は、やっと見つけた彼の信念を打ち砕く。

だから棗は、この手で亮樹を殺そうと、その胸に誓っていたのだ。

「御」

まだ顔を見るまでは出来なかったけれど、消え入りそうな声で、ゆっくりとその名を呼んだ。

「僕は……僕には、たとえ君が神の子を愛せと言ったって……無理なんだ」

御はただ一人、棗の過去を知っている。少年だった棗に植え付けられた傷の重さも、何もかもを見てきた。

何も出来なかった無力な自分。なのに棗は御を責めることなく、何処までも信頼を寄せてくれていた。まるで兄を慕うように。

「ああ、でも、だからって傷つけては駄目だ。たとえお前に彼女達が人だと思えなくても確かに生きている、人間なんだ」

ゆっくりと棗が辺りを見回せば、砂乃が、禾夜が、そして姫愛もが、まっすぐにこちらを見ていた。

人間。ただの兵器として創られた少女達が、パートナーが存在しなくてはろくに戦えもしなかった少女達が、いつしか感情を持ち、人間と呼べる存在になっていたのか。

ふと体位を変えれば、誰にも目を合わせることなく、棗は数歩前

へ進んだ。

「……好桃を連れてくる。君たちは先にガウに戻ってくれ。古楽にも連絡は入れておく」

「なつつん？」

「戦う気が失せた。今日はもう帰ろう。      ああ別に、このままいたいならいてくれて構わないよ。ただし、迎えは来ないから帰りを自分で何とかできるならね」

本当に気が失せたのか、棗の声はいつになくあっさりとしていた。その目は何の起因もなく元の色を取り戻す。

いつかの冷たい瞳のままに、棗はふと振り返り、亮樹たちを見た。「砂乃、お前はそこにいたいならそうすればいい。どの道僕にはもう新しいパートナーがいる」

少女の瞳に光が宿った。それは失うものの変わりに大切なものを得た輝きだ。

棗の事は本当に好きだった。だけど砂乃が望む場所は、やはり亮樹の傍にある。

棗が身を翻すと、御と森崎が後に続いた。

「共に行く。古楽を連れて、皆で帰ろう」

「ぼくも。一人でガウにいたってつまらないしさ。禾夜、行くよ」

まだ不満げに、禾夜も後ろを歩き出した。

最後を歩く姫愛が、ふと砂乃を見ては優しく微笑む。それはまるで、相手の幸せを喜ぶようであり、はたまた別れを惜しむようでもあった。

亮樹は息をつく。一気に気が抜けたように肩を落とした。しかし、まだ全てが片付いたわけではないと気がつけば、顔を上げてなければ、顔を振り絞る。

「待てよ！」

砂乃に庇われていた身を乗り出して声を吐く。神の代行人が振り返れば、その拳を亮樹は握った。

「爆弾って何処に仕掛けた？ どうせならその処理も」

「そんなものは自分達で何とかしろ」

間髪いれずに放たれる棗の言葉に、亮樹の顔がただ歪む。

「全て護る。誰も死なせない。それが君の言葉だろう。だったら君で何とかしろ。ナチュラルは敵だ。それを滅するという僕たちの信念は変わってはいない。この先は、君たちが君たちの信念で動くところだ」

再び棗の体が亮樹に背を向けた。力強い足踏みで、その場を去っていく。

歩み続ける彼らの背中を、亮樹は見えなくなるまで眺めていた。

不意に、砂乃が亮樹に振り返る。

その顔を見れば、少女は気の抜けたような表情で座り込んだ。いつもと同じように、亮樹が呆れた声をかけてくる。

「何やってんだよ」

「ホツとしたらこしが抜けちゃった……。あの、りよーじゅ。ナツメサマたち、行かせちゃってよかったの？」

きよとんと、だけど不安げに見上げてくる砂乃が可笑しくて、亮樹はつい意地悪でもしたいような衝動に駆られる。

「何だよ？ 戦いたかったの？」

「ちがうけど」

「いいんだよ。俺たちの目的は殺すとか捕まえるとか、そういうことじゃない。あいつらが退散してくれたなら、これで爆弾さえ見つければ、必要外の死者は出ない。なんにも不都合なんてないんだから、いいんだ」

それより、と呟くと、亮樹は砂乃の右手を取った。すっかり血は乾いているようだったが、けがをしていることは見て取れる。

ポケットからハンカチを取り出すと、少女の掌を上に向けた。

「随分勇敢に戦ったあとかな？ これ」

それが悪い冗談だと本能で感じ取れば、砂乃は恨めしげに彼を睨んだ。

「ちがうよ」

血で染まった中にも、いくらか光るものがある。少女の首元を見れば、それは彼女がずっと大切にしていたペンダントの、クリスタルの破片ではないかと想像する事が出来た。

「バカ……。何やってんだよ」

丁寧に破片を取り除けば、そこにハンカチを巻いてくれる。

そうする亮樹の手が思いのほか優しく、砂乃の目から涙が一粒、また一粒と流れ出した。

「なっ、何泣いてんだよ？」

「すなっ、すなのは、これからもりよーじゅのそばにいて……いいの？」

嗚咽をあげながらもそんな事を聞いてくる。その言葉に、亮樹ははたと思った。

「お前、さっきの聞いてた？」

俺は砂乃を見棄てない。

あの言葉を聞かなきゃ、砂乃はこんなこと言えなかったはずだ。少なくとも「亮樹の元へ帰ってもいい？」と、聞いてくるのが筋だろっ。

しどろもどろする青年の問いに、少女はコクコクと頷く。

本人に聞かれたとなるとどこかこそばゆいところがあって、亮樹は自分の口に手をあてて、空を仰いだ。

再び少女を見れば、自分の気持ちなんかお構いなしに涙を流している。本来強気で、意地っ張りなところのある砂乃が、こうして亮樹の前で泣くのは珍しいことだった。

「砂乃が……。望むなら」

ぼそりと呟かれた言葉が聞こえなくて、砂乃は亮樹を見返した。

大好きな青年の、穏やかな笑顔がそこにある。

「帰って来いよ。みんな待ってる。……俺さ、今同じ問いをされたなら、今度ははっきりと言えるよ」

涙で喉が焼けそうに痛かった。それでもどうしても聞きたくて、砂乃は一度息をのむ。

「……りょーじゅは、すなのに、そばにいてほしい？」

「うん」

大きく頷く亮樹に、その体に、砂乃は強く抱きついた。神の住処に帰ってからの長い時間、ずっとずっと考え続けていたことを彼に伝える。

「すなの……ずっと、さみしくて。ナツメサマがいてくれる、って、どんなに心で思っても、出てくるのはりょーじゅとかおかのとか……みんなのことばかりで、え……」

「うん」

「あ、いたかった……。会いたかったよう。りょーじゅ……！」

「うん……」

何を言っても、亮樹は「うん」としか答えてくれなかったが、砂乃にはそれで十分だった。たった数日。それだけしか離れていなかったのに、砂乃には彼の声が懐かしくてたまらない。

亮樹の胸に顔をうずめて泣きじゃくる少女の長い黒髪を、彼は愛おしそうに撫でた。

「おかえり」と、小さく呟く。

じきに滋から通信が入り、爆弾が無事に処理されたことを知らされた。

結局、これからもナチュラルとゴッドはいがみ合い、ビュー・ガーデンはただ中立を目指して駆け回って、何も変わりはないのだからか。

全て護る。誰も死なせない。それが君の言葉だ。

いや、違う。亮樹の言葉は確かに棗の心に焼きついている。

例え君が言ったって、僕は神の子を人間だと思つことは出来ないんだ。

それでも、傷つけては駄目だ。たとえお前が彼女達を人だと思えなくても、人間なんだ。

戦う気が失せた。

御の言葉を棄は少なからず受け入れている。

世界は変わる。そのために、自分達は存在するのだ。世界を緑で  
いっぱいにし、ひとの心にはいつだって、疲れた身を預け休める事  
ができる神が存在する。

亮樹たちは願う。日本国がそんな、“美しい楽園”<sup>ビュール・ガーデン</sup>になることを。

## 7・君に捧げる、新しき十字の証

上条家かみじょうに、いつもと同じ朝が来た。和を主とした朝食の並ぶテーブルには、滋しげると緒叶おかの、そして、亮樹りやうじゆと砂乃すなのが変わらぬ配置で机を囲む。

昨日オーブ自動車型飛行機体オリーブに乗り込んだ砂乃を、それで帰ってきた砂乃を、滋と緒叶は何もなかったように迎え入れてくれた。

誰一人、ごめんなんて言葉は口にしていない。わざわざ口にしなかつたつて、それぞれが何を思っているかは、みんなちゃんと分かっていた。

それでも食卓が静かなのは、緒叶が無言の怒りを露にしているからだ。それが自分に対する怒りなのか、砂乃は少し不安になる。そんな雰囲気おんきを打ち破いたのは亮樹だった。

「……緒叶。機嫌直せよ」

もくもくとご飯をかき込みながら、彼は言う。

「誰のせいだと思ってるの？」

亮樹は苦笑する。理由は分かっていた。彼女の祈りに答えることができず、傷だらけに帰ってきてしまった自分だ。

「そりゃ、けがしないようにとは思ってたけどさ。しょうがないじゃん。こういうの覚悟で行ってたんだから」

「へえ？ 神の代理人に囲まれても助けも呼ばなかったんでしょ？」  
う、と亮樹は箸を置いた。確かに自分で何とかしようと呼ばなかったのは事実だが、囲まれたのは不本意だ。

そんな彼の真意を悟れば、滋が味噌汁をすすりながら、代わるように口を開いた。

「そう言っただけでやるなよ、緒叶。お前が普段穏やかな分、そうして怒ると亮樹は逆に堪えるんだ」

滋の言うとおりだ。いつもは優しい緒叶が怒るのは、自分がこの上なく悪い事をしてしまったようで、罪悪感に駆られてしかたない。

「だって……、わたしがどんな思いで待っていたかも知らないで。不慮の事故なんてものじゃ済まないでしょ。捻挫までしてるのよ」

医学の進歩した三十世紀だからこそ、擦り傷や切り傷なんてものは一日で治るが、捻挫や骨折は、どうしてもわずかな時間が掛かってしまう。好桃に噛み付かれた前回のも、酷いけがの部類には入ったが、あれは助けを呼ぶにも呼べなかったから怒る気にはならなかったのだろう。それから考えて、さすがに今回は緒叶も許しきれなかったようだ。

「すぐ治るっつの。緒叶は心配しすぎなんだよ」

その言葉に、緒叶は荒々しく箸を置いた。

「心配して何が悪いの！ 亮樹くんたちが帰ってくるまで、わたし気が気じゃなかったんだから！」

「おい、緒叶、落ち着けて。亮樹ももう少し言葉を選べ……」

「あの……」

と、賑やかな彼らの声を掻き消すように割って入ったのは砂乃だ。皆の視線が、戸惑いがちな少女に集まる。

「話、中断させて……ごめん……。でも、どうしても、言わなきゃいけないこと、あって」

顔面蒼白、まさにその言葉が的確だというほど、砂乃の表情は重かった。皆がこちらに注目するから、さらに緊張が加わって声が震える。

「あたし、十三年間、ずっとゴッド派にいた。だから、本当はみんなに話してないゴツドの情報ことが……いくつかある。でも、でも、ね。あたし……」

突拍子なことを言い出した少女に、三人は言葉を失った。じきに気が抜けたように椅子にもたれかかったり、肩を落としたりする。

「あー、俺もあるな。俺の父さんはナチュラルでも偉かったし、俺は十六年間いたしな」

「わたしも。子供のこと……まだ詳しくは話してないわ」

「俺もいくらかあるかもな……」

「な、ってシゲちゃんずつとビュー・ガーデンなんだから、分かる事全部話そうよ」

高らかな笑いが食卓に漏れた。

きよとんと、砂乃の目が丸くなる。

「あの……」

先ほどと同じ言葉が漏れたが、今度は戸惑いではなく困惑が混じった。

「今はまだ、言いたくないんだろ？ そんなん、俺らにだって秘密はあるんだ。言えるときがきたら言えばいいんだよ」

隣で微笑む青年に、砂乃は目頭が熱くなった。

此処はなんて、居心地がいいのだろう。みんなが砂乃を思っているのが分かる。みんなの気持ちがふつふつと、砂乃の中に流れ込んでくるようだった。

「ありがとう」

こんな言葉、棗には言ったことがない。なんて美しい言葉なのだろう。どうしても言いたくて、砂乃は何度も“ありがとう”と呟いた。

昼下がり、何もすることがなくなれば、亮樹はさっさと出かける準備を始めた。

着替えてバイク型飛行機体用のグローブをはめれば、颯爽と玄関へと向かう。

「どこ行くの？」

何の気なしに扉を開ければ、ふと右側から声が掛かった。

「うわっ？ ……て、砂乃……」

「グローブまでしちゃって、一人でどっか行く気だったんだ。緒叶にばれたらまた怒るよ」

壁にもたれるように背中をつけて、目を細めながら亮樹を見てくる。渋い顔をしながらも彼は答えた。

「別にいいじゃん」

「どこ行くかくらい、教えてよ！ そしたらすなの、別につれてけなんて言わないのに……」

こついうところは、まるで以前と変わらないな、と亮樹は思った。置いていかれることを彼女が恐れるのは無理もない。しかしそれを、亮樹に求められても困るのだ。

「そんなに俺に置いてかれたくないならさ、常に俺の見張りでもしてたらいいじゃん」

「だから今こつやって待ちぶせてたんです！」

「……槇那の墓参りに行くんだよ」

諦めたように答えると、砂乃の目が見る見る丸くなっていく。

「まきな？」

「俺の親友。この戦争に巻き込まれて死んだんだ」

そう言う亮樹に、砂乃はふと棗の言葉を思い出した。

「ナツメサマに……殺された……？」

「知ってたのか？」

「ぐうぜん聞いたことがあって……。じゃあすなのは、じゃまだよね」

勝手に納得すれば、砂乃はそそくさと退散しようとした。少女が亮樹に背を向ければ彼は仕方ないなと息をつく。

「一緒に行くか？」

パツと振り返った砂乃の表情は柔らんでいたが、すぐに緊張が走った。

「でも……、ナチュラルだったなら、すなのになんて会いたくないよ……」

「あいつはナチュラルとかゴッドとか、気にする奴じゃないよ。ずつとビュー・ガーデンに来る事を夢見てたんだから」

「え……」

「それにあいつ、一度お前に会いたがってた」

これは約束だったから。果たす事は叶わなかったけれど。

砂乃と二人で、槇那の墓前に立ってやるのも悪くないかもしれな  
いと思えば、亮樹は迷わず砂乃にヘルメットを投げた。

亮樹からどこかへ行こうと誘われたのは初めてだったから、砂乃  
は喜んでバイク型飛行機体の後部に座る。

その手に、小さなピンを握って。

槇那の墓は湖に面していた。波打つ音がとても心地いい。

「いい場所だね」

墓参りを済ませれば、二人は丘に登り橋を歩いた。風が波を揺ら  
し、二人の髪を靡かせる。

「ナチュラル派にとつて、死した人は尊い存在だから。その町でも  
一番いい場所や好きだった場所に葬ってやるのは当然なんだよ」

「りょーじゅのお父さんのお墓も、ここにあるの？」

橋の下の霊園を見ながら訊ねる。そんな砂乃には、亮樹の表情が  
曇った事なんて気付けなかった。

「……父さんは……ナチュラルを裏切ったようなもの、だったから」

あまりに小さな声は、油断すれば聞き逃しそうだった。そうして  
振り返った先に俯く亮樹がいるものだから、砂乃はただうるたえる。

「あ、ごめん……」

「なんでお前が謝んの？」

「だって、つらいでしょ？ りょーじゅのお父さんは何にも悪い事  
なんてしていないのに、きれいな場所でゆっくり眠る事もできない  
なんて。それなのに、すなのはりょーじゅに思い出させちゃった……」

「別に……。思い出しても平気つついたら嘘になるけど、俺本当に  
言いたくないことは言わないから大丈夫だよ」

「でも」

「あんまり深く考えんなよ。父さんにはちゃんと、シゲちゃんたちが  
墓を造ってくれた。ちつぽけな墓だけど、父さんは満足してるよ」

「そ……か」

じゃあお母さんは？ なんて言葉が口をつきそうになったけれど、そればかりはグツと耐えた。

いま自分達と共にならないのなら、それはもう。

「そいえば砂乃、ペンダントやめたんだな」

その首元にいつもの黒い紐が下がっていない事に気がつけば、亮樹は何の気なしに訊ねた。

クリスタルは元々どうしようもなくなっていたが、その紐だけは砂乃はこれからも身に付け続けるのだろう、と無意識に思っていたからだ。

「あ、うん。あれは元々、ナツメサマがくれたものだったから」

「そうだったんだ」

「それをナツメサマにわられて、……てゆうか、あたしの居場所を見失わないために与えてくれただけだったけど。これはすなのにとつて、ナツメサマとすなのがパートナーだっていう証だったから」

帯に挟んでいた小瓶を取り出せば、光に透かすように持ち上げる。

「それ……？」

「おかのがやってくれたの。あたしが持っていたのなら、こうやって持っていればいいって」

亮樹が丁寧に砂乃の掌から取ってくれたクリスタルは、洗われて元の色を取り戻していた。

それをしばし見つめれば、なんの前触れもなく、湖へと放り投げる。

「あつ、おい！」

突然の事に亮樹は思わず手すりから身を乗り出す。しかし小瓶は音も立てずに湖中へと消えた。

「何やってんだよ」

「いいの！」

あれだけ大事にしていたものだから、当然これからも持ち続けるのだと思えた。

しかし少女は、それを手放した事にすっきりしたように微笑んでいる。

「すなのにはもう、あれは要らない。ナツメサマとパートナーだつていう証は要らないの」

ゆつくりと亮樹に近づき、隣に並べば彼を見上げた。

「すなののパートナーは、りょーじゅだから」

青年の瞳が、光を宿す。見開かれた目に陽光が集まったのだ。

「だからさ、りょーじゅのつけてるアクセサリー、何でもいいから一つちよーだい？」

なくては不安なのではないが、どうしても、パートナーの証が欲しかった。

亮樹は少し迷ったような素振りを見せて、首のネックレスを一つ外す。

十字架の真ん中に、蒼い宝石が埋め込まれていた。

「言つとくけど、高いもんじゃないからな」

「いいの。ありがとう!」

満面の笑みで少女が言う。

体の小さい砂乃に、そのネックレスは不似合いな気がしたが、あまりに嬉しそうに笑うので亮樹にも思わず笑みがこぼれた。

「んじゃ、帰るか」

「すなの、パフェ食べたいな」

「は？　アイスで我慢しろよ」

「格がちがうよ!」

「……お菓子も買ってやるから」

呆れた口調で亮樹が言う。その返事に満足すれば砂乃は高らかに声を発した。

「のつた!」

バイク型飛行機体<sup>マイブ</sup>へ向かう二人の後ろ姿を、沈み始めた太陽が照らす。

まるでこれから始まる青年と少女の物語を後援するように、その

光はいつまでも二人を照らし続けていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3479c/>

---

少女兵器-Girl Arms-

2010年10月8日14時58分発行